
デュエリスト アシュマ 第十二話 キュポアの春（後編）

高岡 佳司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デュエリスト アシユマ 第十二話 キュポアの春（後編）

【Nコード】

N4545K

【作者名】

高岡 佳司

【あらすじ】

オロは、マスクドなる集団を使って、アシユマを追い詰める。

そして、密かにバヴェルと神人のバックアップの発掘を……。

後ろには七賢人の影が……。

混迷を極める世界にアシユマ達の運命や如何に？

SF剣戟冒険アドベンチャー、新シリーズオロ編三部作の二、

デュエリスト アシユマ『第十二話 キュポアの春（後編）』た

だ今参上！

主な登場人物

アシユマ・アトー・ヒョウエ・シバ・シヨアク・アシユオン。

先のノリトレアでのバヴェル紛争（七賢人紛争）での英雄である。無類の武器、『鬼虎』と言う刀を持つ。

年の頃は二十四〜五。

年齢が定まらないのは生年月日があやふやな為である。

謂れの無い事には敢然と立ち向かい、怒ると何でも真つ二つにする怖い男でもあったが

アーチエルにとっては優しい夫だった。

多少寡黙なところがある。

アーチエル・アトー・ヒョウエ・シバ・シヨアク・アシユオン。

元、レキシタニア王国の第一王女。

破壊の権化、バヴェルのまさに鍵であり前回の七賢人紛争の中心にいた少女である。

今は、愛するアシユマの妻。

と、同時にアシユマが暴走しない為のストッパーでもある。

どこまでも真つ直ぐな、豊かで美しい栗色の髪の毛を持ち、長く密度の高いまつ毛と黒目がちの大きな瞳を持ち合わせた美しい眼は遙か彼方を見つめ、潤って張りのある形の良い薄紅色の唇はきゅつと真一文字に引き締められて、人形のように形容されるほどの美形の少女。

凜として可憐で儂げでなどとよく形容される。

オルバニアン・マグマイヤー

ノリトレア王家王位継承者第二位であるルーラン・ノリトレアがその正体であり、アルステイーンの義理の弟に当たる。

王位継承者なのだが今は王位継承権をかなぐり捨てて武者修行を兼ねた賞金稼ぎとなっている。

刀と銃両方にいいセンスを発揮し、また、魔導機兵に乗らせれば右に出るものがないほどの操縦技術を見せる。

好むと好まざるとに関わらず、喜怒哀楽のはっきりした性格である。

アルミナ・ラ・シア

言いたい事は、はっきり言う性格。

口の悪いのがタマに傷。

戦利眼なる特殊な能力を持つ大剣使いの少女である。

顔かたちは目鼻立ちがはっきりとしていて、きりつとした美少女である。

眼帯を取って両目が開けば赤い眼と黄金に光る眼が見れるはずである。

オルバニアンとは恋仲、リイナとは喧嘩友達でもある。

アルステイーン・ノリトレア。

年の頃は二十七。

ノリトレア王国の国王

頭は切れるが変わり者の王である。

また、国民に善政を敷き人気は高い。

七賢人紛争の英雄の一人。
その正体はダスト・モンキーことヨディ・ヨフルである。

エフアール・ノリトレア。

ノリトレアの王妃である。

未だにアルステインをヨディと呼ぶ。

先の七賢人紛争での英雄の内の一入である。

今では二人の間に子を生している。

息子のアシュオンだ。

これは、アシュマの名からとったもの。

キュポア・アップルトン

レキソタニア王国の第二王女。

アーチエルの実妹である。

常にお転婆だが、時に弱い部分も見せる。

物事をずばずば言うが、心根は優しい少女である。

最近はそのうことは減ったが多少我侷な所もある。

なお、父親似なのか、直ぐ上の姉、アーチエルには似ているところ
は少ない。

が、こちらも整った顔つきで美形である。

リイナと歳が近い事もあり、彼女とは非常に仲が良い。

ハルマ・イコナ

魔法に造詣が深く、剣の腕も達者である。

非常に温厚であり、日向を思わせる微笑が印象的な美青年である。キュポアに急接近する。

謎な部分が多々あり、アシュマには危険視をされる。

リイナ・アナン

体に似合わず大振りで鉦の様なククリを使う。

青黒い艶やかな髪を持つ。

正体はアシュマと同じイレギュラーナンバーで戦闘のセンスに関してはもしかしてアシュマの次に実力があるかもしれない少女である。

それ以外、はっとする様な美少女である。

この少女、二重人格であり、優しい可憐な少女の時もあれば、寡黙でそのくせ口を開けば口が悪く性悪に見えることもあるが性根はとても優しい。

アルミナとは喧嘩友達でもある。

アールヌー国のレンヌ王子とは中々良い仲であるが、そのことからかわれると泣く。

レンヌ・アデュニ

スラリと背が伸び、褐色の肌と相まってエキゾチックな美少年。

アールヌー国の第二王子であるが実質的な後継者。

これは兄のディーヌ・アデュニ第一王子が王位継承権を放棄したためである。

時に喧嘩もするがリイナとはとても良い恋仲にある。

召喚術を得意としている。

ミカ・タキオ

スコラの優等生。

アシュマと同じイーハンのタマン島出身。

アーチエルとは親友関係にある。

ジークフリート・シュヴァイツァーと言う将来を誓い合った恋人がいる。

非常に他人想いのところがある。

ジークフリート・シュヴァイツァー

アルミナと同じく身の丈ほどもある大きな剣を遣う。

剣の腕も確かである。

ただ、アルミナ曰くアシュマに輪をかけた寡黙さと無愛想さで周りからは誤解されがちであるが、ミカには優しい彼氏であるらしい。

サクラコ・セタ

イーハンの家老の娘。

根っからの女王様気質。

性格は悪くない。

エースティール・アップルトン

レキソタニア王国の現在の王。

アリア・アップルトン

エースティーの妻。

王妃。

出自はオロ・エバスの妹。

エドス・アップルトン

レキシタニアの前王。

人生はまだまだ現役。

アン・デボン

元々はアップルトン家のメイドとして働くが、数奇な運命からかアーチエルと共に戦場にも付いて回る不遇な人。

ただし本人はアーチエルのお側にいられるだけで幸せらしい。

アーチエルの姉的存在でもある。

アリシアナ・コクレト。

黒龍号のメカニック担当。

程よく鍛えられ、引き締まった肉体を持っている。

鼻筋の通った中々の美人でもある

良くも悪くも軍人氣質。

ダン・コクレト少尉。

男性かなり、ガタイが良い。

それに比例して顔の方はあまりよろしくない。

この男性このようななりをしてコクレト軍曹の旦那である。

夫婦して黒龍号に『勤務』しているのである。

旦那の方から猛アタックがあったかと思いきや、それは奥さんのほうからと言うことらしい。

事実、アリシアナは、男性とはこうだと思っている節があるらしく、アシュマなどは線が細くて駄目らしい。

アリサ・コクレト。

アリシアナとダンの間に生まれた女兒。

三歳。

母親アリシアナ似のくりっとした愛らしい瞳を持つ幼子。

リン・シャオリン

オロ・エバス、クーロン支店の総責任者。

先のクーロン革命の立役者。

アベニ・ロー

アルステインの直属の影の者。

アシュマ仕込みの朧霞と空蝉を使いこなし中々の成果を挙げている。

キララ・ムラサキ

元、ガルマイン配下、暗殺集団『影の者』の内の一人。
アシュマに捕まって以来、アシュマの仲間となり、アベニの元で
訓練を続けていた。

少女は髪の毛は短かく亜麻色の髪の毛を持ち、中々愛くるしい、
くるりとした瞳と愛らしい唇を美少女。

ガンロク

アシュマを『師匠』と呼ぶ。

名字なのか名なのかは分からない。

ただのガンロクである。

身長は二メートル二十ほど。

剣の腕はアシュマも一目を置くほど。

意外と手先が器用である。

サリアナ・タウル

自称イーハンの貧乏御家人の主従の主。

男……らしい。

エスタ・ワナックス

とある、貧乏御家人の従者の方。

身なりは悪くない。
男……らしい。

オロ・エバス

汎用型電脳装置などの基本OSを作って財を成し、今では、鉄鋼や貴金属、造船や飛行機、果ては魔導機兵の様な兵器なども取り扱っている豪商。

今や世界の五パーセントは彼の財力とまで言われ、世界をその指で動かせるのではないかと噂されるほどの人物。

ティシユラ・アマンガム

オロの貞淑な『愛人』

ウグラ・ハン

三年前のイルドリアの武道大会の優勝者。
オロの軍師。

オロに意見を言える数少ないうちの一人。

ザザ

牛頭牛足の魔人。

マスケドのリーダー。

戦槌『牛槌鬼』を使う。

割と人情に脆い点がある。

ロシ

銀白色の長い髪を持ち、蒼白く氷のように冷たい色の視線を放ち、
酷薄で残忍そうな笑みを浮かべる、無情の男。

絶世の美青年。

マスクドのサブリーダー。

刀『天馬鬼』を使う。

ミヤ

羊頭の魔人。

マスクド。

槍『羊槍鬼』を使う。

グチ

猿頭の魔人

マスクド。

『猿双鬼』を使う。

ザキとは犬猿の仲。

ザキ

犬頭の魔人

マスクド。

『犬牙鬼』を使う。

グチとは犬猿の中。

ラキ

女のマスクド。

『猪球鬼』と言う大鉄球付きの鎖鎌を使う。

かなり身体は大きい方。

妹にマスクドのハヤがいる

ハヤ

女のマスクド。

中々美形。

細身の剣『鬼細鳥』を持つ

姉にマスクドのラキがいる。

序節

「さあ、われらと共に」

「ザザがアーチエルに近寄る。」

「それ以上近付かないで！ 近付いたら舌を嚙んで死にまする！」

「う……」

「ザザは言葉を詰まらせて次の行動に窮した。」

ロシはそんなアーチエルとザザを横目にザザの作った紅龍号の天井の裂け目から紅龍号の中へ入って行った。

「だが剣戟の音は聞こえては来なかった。」

「何が起こっているのだろうか？」

中では怒号と悲鳴とが交じり合い中で何かあったことは連想するに難くなかった。

そして再びロシが現れた時、ロシの左手には首根っこをつかまれたアリサの姿があった。

「アリサ……」

「アーチエルが悲鳴を上げた。」

「アリサは気を失っているのか、ぐったりとしていた。」

「さあ、この娘の命が惜しかったら我々と一緒に来てもらおうか？」

「ロシは冷酷にもそう言い放った。」

「卑怯者！ そんな方法を使って。わたくしだけを黽れば（なぶれば）良いではありませんか！」

「さて娘御よ我らマスクドはそのような卑怯な手は使わん。ロシよその娘を返して来るのだ」

「ザザよ、先程も言った。大局を見て欲しい。このような事は瑣末な事だ」

「……………」

「ザザは黙ってしまった。」

「葛藤しているのだろう。」

アーチエルはこのロシと言う男が、一緒についていくことを拒めば、なんの躊躇いもなく幼子であるアリサの命を奪うであろう事を確信した。

「分かりました。付いて行きます。ですからアリサを……その幼子を元に返してやって下さい」

「分かった」

ロシはもう一度紅龍号の中に入っていきアリサを返してきて、船外へ出た。

「では行きましようかな？」

ロシはアーチエルを促した。

(アシユマさま。助けて!!)

アーチエルは心の中でそう願ったがアシユマは助けには来てくれなかった。

アーチエルは一緒について行くしかなかった。

アーチエルは呪文ウィングを唱えて、ザザとロシに両脇を抱えられ母艦に連れて行かれた。

アシユマはどうなってしまったのか？

アーチエルはどうなってしまふのか？

そのアシユマはどうなったか？

アシユマはその時ハヤと呼ばれるマスクドと対峙していた。

アシユマはこの魔封じの穴に飛び込んできたとき、彼の念導境界面がクッションとなってアシユマとハヤを激突の衝撃から救ってくれた。

尤もその念導境界面も、お互い、この魔封じの穴ではかき消されてしまっていた。

そして二人はお互いの武器を持って対峙していた。

アシユマは秘剣、裏・閃光一刀・崩しの体制を、ハヤは右手に柄を持ち、その右手は彼女の右頬に左手は切っ先に添えられて、びた

りとアシユマを狙っていた。

暫く緊張した時間が流れた。

お互い動かなかった。

が、その緊張した時間も、

「やめだ」

アシユマの一言で終わりを告げた。

いや、正確にはアシユマが一方的に緊張を解いただけで、ハヤは警戒を解いていなかった。

むしろ何かの罠かと思ひ警戒を強めたほどだ。

「よせ。俺も無駄な殺生はしたくない」

アシユマは言った。

「馬鹿にするのか？ もう勝った気でいる。わたしはそれ程、易くは無いぞ？」

ハヤは憤った。

「試してみるか？ 無駄だと思うがな」

アシユマはハヤにそう言った。

「おのれ！」

ハヤはアシユマに向かって突進し剣の切っ先を伸ばしてきた。

アシユマはそれを体を開いて僅差でかわし、ハヤの脚を絡めて転がした。

ハヤは随分大袈裟にすっ転んだ。

「おのれ！ よくも……」

怒り心頭で言い掛けるハヤの眼の前には鬼虎の切っ先があった。

「突進してくる事は分かっていた。経験の差だ」

そうアシユマは言った。

「殺せ！ お前に負けた私にはもう生きる価値など無い！ さあ、殺せ！」

ハヤは自棄になったように見えた。

「極端な奴だな。言った筈だ。無駄な殺生はせんと」

アシユマはこのハヤ態度の豹変振りに呆気にとられた。

「どつちにしろマスクドの掟に従って私は殺されるのだ」

「随分と馬鹿げた掟もあるもんだ」

「仕方あるまい！　それがマスクドと言うものだ！」

「そのマスクドと言うものは一体なんなのだ？」

「今の時代はいざ知らず、古代、マスクドと言うものは『鬼』を持つものの天敵として創られた。徹底的に『鬼』とそれを持つ者を分析して、それらを上回るものとして作られたのだ」

「ではお前も人工的に作られたり、ナノマシンを身体に注入されたりしているのか？」

「当然だ。マスクドは生まれた時から競争を強いられる。万単位の色々なタイプのマスクドがテストを繰り返され、ふるいに掛けられるのだ。時には幼い頃から殺し合いを強要され、負けた者には死の裁定が下されたものだ」

「勝った者には？」

「荣誉が与えられた」

「下らん」

アシユマは肩をすぼめて見せた。

「下らんだと？　私を含めて、私達マスクドは、凡そ、その生き方しか出来なかったのだぞ！？」

ハヤは怒りで、アシユマを睨んでそう言った。

「何でそこまでしてマスクドに忠誠を誓う？　他に選択肢はなかったと？」

アシユマは、そんな事はお構い無しに訊いた。

「そうだ。それは私だって、虫唾が走った事もあつたさ！　だが与えられる荣誉に縋るしか、生き方が見付からなかった！」

ハヤはそうだと言いきった。

そう言っているうちにハヤの頬に涙が伝った。

「それは私だって嫌さ！　自分に嫌気が走ることもある。そんな自分を慰める為にマスクドの掟を何度も諳んじた事もあつたさ。でも、もう嫌だ！！　誰か助けて……」

ハヤの心はとうとう折れてしまった。

「生き方は他にもある。俺についてくれば、活路が見付かるかも知れん。どうだ？ 一緒に来ないか？」

「……………」

ハヤは沈黙した。

どうやら迷っているらしい。

「マスクドに残っても、地獄が待つただけだぞ？」

アシユマは手を差し伸べた。

「私を惑わすな！」

ハヤは、アシユマの手を、払いのけた。

「惑わしてなどいない。お前が言ったあのマスクドの生活と縁を切るチャンスなんだぞ？ さあ、こちら側に来るんだ」

アシユマは心底そう思いハヤを助ける為にそう言った。

「……………」

ハヤはゆっくりだがアシユマに手を差し伸べていた。

アシユマはその手をしっかりと握ってやった。

そしてハヤを立ち上がらせた。

アシユマは、どうやって脱出するか思案した。

魔封じの穴は幾らでも延びている横穴があったからだ。

魔の迷路と言っても良い。

アシユマは辺りを見回した。

「アシユマ、どうやって抜け出せばよいか、分かっているのか？」

「うむ。多分、こっちだろう」

そう言っアアシユマは、すたすたとある方向へと歩いて行った。

「さて、アシユマ。どこへ行く？ そっちの方向で合っているのか？」

「分からん」

「分からんって…………お前そんな無責任な事で大丈夫なのか？」

ハヤは早速不安になった。

この男について言っ大丈夫なのか？

そんな想いが頭をよぎる。

「多分、大丈夫だろう」

「何を根拠に言っている？」

ハヤはますます不安になった。

「感じないか？」

「何を？」

ハヤはこの男は何を言っているのかと思った。

「『気』だ。微かに感じる『気』のある方向へ向かっている」

「『気』？」

「そうだ。樹木などが出している微かな『気』だ。それを辿っている」

「……成る程。確かに冷静になれば……感じられるな」

アシユマとハヤは、その僅かな気を辿って、魔封じの横穴を抜けた。

抜けた場所はどこだか分からない。

が、とても人が来れるような場所ではなかった。

断崖絶壁なのだ。

魔力を封じる力もまだ強かった。

が、アシユマは……

「ウイングを使ってみるか。緩やかな下降なら大丈夫そうだ」

そう言った。

「ばかな！ こんな所でウイングなんか使ってみろ！ 地面に激突するぞ！」

「大丈夫だ。俺の鬼虎は多次元平行宇宙から、エネルギーを無限に補給できる。二人で降りるくらいならば大丈夫だろう」

「二人？ お前……まさか、私を抱えて降りるなどと、言うんじやなかるうな」

「そのつもりだが？」

「さっきまで敵だった奴に、抱えられて降りられるか！」

それ以前にそんな事をされるのが恥かしかった。

男に抱かれるなどと言う事がこれまでの人生の中でなかったからである。

「こだわる奴だな。良いから一緒に来い」

「下に激突して死ぬのは嫌だ！」

「それくらいじゃ死なんだろう、マスクドは。そもそもマスクドに弱点つてあるのか？」

「首と胴体が切り離されると死ぬ。若しくは自分の持つ『鬼』に、呼び掛けられなくなると死ぬ……はっ！ 貴様この事を私から聞きだす為に、わざと救い出すような事を言っ……」

真面目にハヤはそう思った。

「ない。なにげに聞いたただけだ」

アシュマはやれやれと言った感じで言った。

「しかし鬼虎ならば、私を置いて豎穴から脱出できたのでは？ 今、重要な事を知って、私を、ここに置いていく事も考えられる」

「疑り深い奴だな。良いから来い」

アシュマはそう言うと、ハヤを強引に抱き寄せた。

「なっ、何を……！！ 放せ」

アシュマは構わずハヤを抱き寄せ、呪文を唱え始めた。

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイング」

一瞬アシュマの背に翼のイメージが、浮かび上がる。

アシュマのは、蝙蝠の翼のイメージで、禍々しい印象を与えた。

アシュマはゆっくりと崖を降りていった。

「矢張り、ゆっくり下降するのがやっとか」

アシユマは呟いた。

「驚くべき念の力だな。わたしでは、こうはいかない」

ハヤはそう言った。

最早恥かしいという概念は、ハヤの頭から消えていた。

二人はゆっくり下降し、地面にたどり着いた。

「これからどうするのだ？」

ハヤは訪ねた。

「ここで、念を放出し続ければ、紅龍号が拾ってくれる」

「それならば、もう少しここから離れた方が、効果的じゃないか？」

「同感だ」

暫くして二人は、紅龍号のサイコレーダーに引っ掛り、救出される事になる。

アシユマにとって、衝撃的なニュースが、待っているとも知らずに。

第一節 キュポアのキス

「アーチエルが……!!」

「そうだ。連れ去られた。……済まない。アシユマ君」

紅龍号のブリッジでアルステイーンが頭を下げた。

アルステイーン・ノリトレア

「お師匠、あれは仕方なかったんだ。その幼子が人質に取られちゃったんだ」

ガンロクがそういった。

「アリサが……」

アシユマは衝撃を受けていた。

アリサと言うのは黒龍号の整備スタッフの、アリシアナ・コクレト軍曹と、飛行士のダン・コクレト少尉の娘アリサの事である。

「済まぬ」

そう言っって頭を下げたのはハヤだった。

「本当だぜ。全くマスケドってのは、ロクな事をしねえぜ」

「よせ。オルバニアン。彼女のせいではない」

「なんで、そんな女のことを庇うんだよ、アシユマ！」

「アシユマ……」

ハヤは感動に似た感情と共に涙に頬をぬらしていた。

「言葉のとおりだ。悪いのはアリサに直接手を出した奴だ。だれだ？」

「……確かロシと言ったかな？ あっという間の出来事だったぜ。

皆金縛りにでもあったかのように動けなかったぜ」

（発気の術か？）

アシユマはそう思った。

「一種の催眠術です。圧倒的な気の流れで、相手を催眠状態に落とし入れ、身体を金縛り状態にするのです」

と、ハヤは言った。

(矢張りな)

アシユマは思った。

そして、ロシと言う男かなり遣うと見た。

「それよりも」

そうアシユマは言って、エドス前王の前に来た。

「義親父殿のじやまの。相すまぬ事をした。自分の不甲斐なさのせいで、アーチエルを奪われてしまった」

そう言ってアシユマは頭こぶしを垂たれた。

「婿殿よ、そなたのせいではない。悪いのはそのロシと言う奴じゃ」

そう、エドス、レキシタニア前王は言った。

「済まない。同じマスケドとして、恥かしい所業だ。許して欲しいとは言わないが、謝罪の言葉は述べさせてくれ。この通りだ」

辺りは妙な雰囲気になった。

アシユマがエドスに謝るのは分かる。

が、マスケドの女……ハヤが謝るとは、誰も想像だに、していなかったのである。

「皆、なに怪訝な顔をしている？ マスケドは誇り高き集団だ。こちらに非があれば謝る。それがマスケドだ」

「じゃあ、この間のノリトレアでの狼藉はどうなるんだよ！？ あれは非難されて、然るべき行為じゃなかったのかよ!？」

オルバニアンが思わず叫んだ。

当然の怒りである。

「マスケドは、主の命には絶対服従だ。それが例えどんな事でも…

…」

そう言ってハヤは顔を歪めた。

「今は、様々なしからみから解き放たれようと、もがいているようですね？」

アルステインはそう言った。

「それにしても救いなのは、義親父殿と義兄上とキュポアが無事なのが何よりだ」

アシユマは言った。

キユポアはその言葉にどきりとしたが、以前のような高揚感は何れず、逆に罪悪感めいた気持ちになった。

本人は何故だろうと思ひ、その原因がハルマにある事に気が付いた。

エスタ・ワナックスが突然アシユマを見つめていたと思ったら、声を押し殺して泣き始めた。

アシユマが何事かと思ひそばに寄り、

「どうした？ 大丈夫か？ 先程の戦闘でどこか怪我でもしたか？」
そう訊いた。

それに対しエスタ・ワナックスは

「いえ、大丈夫です。それにしても無事でよう御座いました」と、言った。

アシユマは何故無事だと、泣かれるのか理由が、分からなかった。アシユマはそれを口に出して言った。

「何故泣かれる？ 理由が分からんと。」

エスタ・ワナックスは答えに窮し、今度は顔を耳たぶまで真っ赤にして、

「私は……不器用な女ですから」

そう言つて、ベッドルームのほうへ走つて行つて、しまった。

男と偽つていた頃のエスタは、そこらにいる男娼なんかよりも、男つぷりは良いし、美形でもあつた。

それが、女と分かるや、妙な色気が辺りに漂ひ始めたのは、事実であつた。

それはこの女主人も同じで、きりつとした顔つきが醸し出す色香と言つものは、えもいわれぬものがあつた。

その、女主が言った。

「どうやら、エスタは武道家として貴方様を尊敬するあまりに、いざ本物を目の前にしてお慕いするように、なつてしまつたようなの

です」

アシユマは、その言葉に明らかに困惑をしながら、
「迷惑だ。困る」

はつきり言った。

救いなのは、この場にエスタ・ワナックスがいないことだろう。

女主人のサリアナはこの言葉に反発を覚え、

「敵の女には心を許すのですか？ 奥方を差し置いて」

そう皮肉を言った。

それに対してアシユマも、負けじと言い放った。

「それこそ迷惑だ。詮索は無しにしてもらおう。俺が愛しているのは、アーチエルただ一人である。他のどの女でもない」

その言葉を聞いたとき、ハヤは少しうなだれた。

そしてこの言葉を聞いた時、キュポアは自分で、傷つくのだろう
な自分は。

そう思った自分がいたが、もう一人の自分が、いや、そんなに傷
つく事はなかったな。

冷静に自己分析をした。

「どうしました？ ぼーっとして？ 何か、考え事ですか？」

ハルマがキュポアを見つめて言った。

キュポアにとっては、こちらのほうが心臓に悪かった。

「な・なにを急に！？ はー。はー。はー。心臓に悪いわい」

「？ なぜ心臓に悪いのですか？」

「いいのじゃ。よけいな詮索じゃ」

「これは失礼しました」

ハルマがおどけて言った。

紅龍号はそのままレキソタニアへと帰国の途に着いた。

アルステイン一行は王宮に戻ってきた。

主だった者が王宮の執務室に集まった。

アルステイーンは王宮に帰るや否や態度を改め、

「爺！ ムラサキ！ いるか？」

そう言った。

「はっ！ ここに」

「後手後手に回るのはこれで仕舞いだ。爺。ムラサキ。やつらの本拠地を探つてまいるのだ。急げ。時間は無いぞ。出来るか？」

「お任せあれ。若」

準備万端で、アベニ爺は言った。

アルステイーンは苦笑いをし、

「若はもう卒業だろう？ 爺」

そう言うと、アベニは大真面目な顔で

「拙者にとつて若は若で御座います。では御免。行くぞムラサキ」

「はい、お爺殿」

今度は、アベニが苦笑いをした。

まるでこんな公の場で『おじじどの』はなかるうと思つたからである。

「では、言つて参ります」

軽装備でアベニが出て行つた。

「爺やはあの装備で大丈夫でしょうかね？」

アルステイーンが心配そうに言う。

「大丈夫だろう」

アシユマが太鼓判を押した。

「アルステイーン。いよいよ、ビート・バーンズ諸島に行くのだな？」

アシユマはそう訊いた。

「うむ。先に言つた通り、後手後手に回るのは、もうこれで仕舞いにしたい。アーチエル様もお救いせねばならんし、バヴェルも破壊せねばならん。やることは山積している」

「そうだな」

アシュマは一言だけそう言った。

「よお、この姉ちゃんの処理はどうするんだい？」

オルバニアンが切り出した。

この『姉ちゃん』とは、言わずと知れたハヤのことである。

ハヤは、皆を目の前にして

「恥を忍んで生きて行くつもりは無い。私を殺したければ、首を切り落とせ。そうすれば二度と再生できん」

そう言い放った。

「あの時……アルステインを殺そうと都に来た時には、お前は積極的に、人を殺めていなかったと思ったが？」

アシュマが訊く。

「確かに人は殺めていなかったが、道義的責任と言うモノがある」

「真面目だな。皆、どうだろう？ この、ハヤを仲間にするのは。

腕は確かだ。この俺が保障する」

「貴重なマスクドの情報源だしね」

アルミナがそう言った。

彼女の場合、他意はない。

「皆は、私をそういう眼で見ているのか。分かった。そういうつもりなら、私はこの件から降りる」

ハヤは怒りを顕あらわにした。

「降りてどうするつもりだ？」

リイナが訊いた。

「野をさすらい、死するまで」

「まて。早まるな。お前の力が必要だ」

アシュマがハヤを引き止めた。

「アシュマ……」

ハヤが感極まった声を出した。

「実際にはどういう作戦になるんでしょうか？」
レンヌが訊いた。

「今、アベニとムラサキに敵の本拠地を捜してもらっているが、多分、少数精鋭の正面突破策をとると思う」

アシユマが答えた。

「なぜですか？ 危険ではないですか」

「相手はあのマスクドだ。下手に大人数で行っても死体が増えるばかりだ」

「少数精鋭とは、どの少数を指すのだ？」

リイナが訊いた。

「基本的にここにいるメンバーを考えている。近日中にアベニとムラサキが帰ってくると思う。それまでに、各自、参加不参加を考えておいてくれ」

アシユマがそう言った。

夜、王宮のテラスにて。

リイナとレンヌの二人の会話をしていた。

「レンヌ、聴いて。今度の作戦は危険だわ。貴方は不参加を表明して」

「リイナ。それは出来ないよ。皆、必死に戦っているんだ。僕だけ抜けるなんて事は、出来ないよ。それに僕には『ヘブンスソード』」

がある。リイナこそ女の子なんだ。不参加を表明したほうが良いよ」

「馬鹿な事を。私はイレギュラーメンバーだぞ？ 普通の人間ではないんだ。レンヌこそ参加を取りやめるんだ」

「僕にとってはリイナは普通の女の子だよ。危険なものは危険なんだ。危ない事はしないほうが良いよ。僕は自分が死ぬより、リイナが死んでしまうことのほうが、とても悲しいよ」

「ああ、レンヌ……」

リイナはレンヌの、

『普通の女の子』

と、言うフレーズに『酔った』。

今まで、自分がイレギュラーナンバーである事に、引け目を感じていたからだ。

二人はお互いの唇を近づけて重ね合わせた。

一方別のテラスでは、キュポアとハルマが同じ問答をしていた。
「キュポアさん、今回の作戦は危険すぎます。参加を見合わせてくれませんか？」

「ハルマ、何を馬鹿な事を言っておるのじゃ？　そういうお主はどうなんじゃ？　一体何が出来る？　『ブラックホール』以外、魔法を見た事がないぞ？」

「僕は今ある魔法は全て諳んじる事が出来ます。キュポアさんこそ何が出来ます？」

「うっ！　『ガーディアン』が召喚できるわい」

「でも、あれは恐ろしく念を消費すると聞いています。もって六分、禁呪のガーディアン召喚なら三分しか持たないと聞いていますが？」

「うっっ……！」

「さあ、どうです。ふふふ……」

「嫌な含み笑いをするのう。わらわは召喚魔法だけじゃないぞえ。対魔導機兵用のライフルを扱えるぞえ」

「それでは、敵に致命傷は、与えられませんね。牽制ぐらいには使えるかも……？」

「何でお主は、わらわの特技を、ことごとく否定するのじゃ！　うっっ……」

キュポアは泣き顔になってきた。

「わ・わらわはこれでも魔法が使えるぞ……！」

「僕も使えます。ブラックホールまでも。相当な念者でないと使えません。それに加えてキュポアさんの念者としての力は未知数です」

「お主、ほんとやな事ばかり言うのう。わらわはこれでも超特級念者ぞえ！　念者としては眼を見張るモノがあるわい！　そんな意地

悪ばかり言うハルマには、回復魔法掛けてやらんぞ!？」

「大丈夫ですよ。今言った通り僕も超特級の念者です。きつと凄い回復量の魔法が使えるでしょう」

「ハルマのばかッ!!」

「僕は馬鹿でも構いません。でもこれだけは言っておきます。次の戦闘は激しいものが予想されるでしょう。中には死人が出るかもしれない。その中に貴女を入れたくないんですよ。僕は!」

「やっぱり馬鹿じゃ。お主は。誰が好き好んでお主を戦場で死なせるものかえ。わらわはお主に死んで欲しくないから……」

「キユポアさん……」

「ハルマ……」

二人は互いを抱擁し合い存在を確かめ合った。

「なに？ オロとマスクドの本拠地攻撃作戦に参加したい？」

サリアナはエスタに訊き直した。

聞き間違いかと思ったからである。

「はい……」

エスタは答えた。

「何故じゃ？ 矢張りアシュマ殿の為か？」

「……………」

「そうなのじゃな？」

「……………はい」

「そうまでしても、アシュマ殿はお前に、振り向いてはくれんぞ？」

何せアシュマ殿が愛してやまぬアーチエル殿がいるでな」

「女の意地に御座いますれば」

「相分かった。そこまで言うのならば、出陣を許可しよう。ただし、これだけは言っておく。死ぬな。分かったな？」

「は」

エスタが腰を曲げて主に誓った。

王宮の中ではちょっとした騒動が起こっていた。

ノリトレアの王、アルステイーンが出陣する、しないで騒ぎになつていたからだ。

「王よ！ 他の我侭で、多少の事なら、許しませぬぞ。ですが、それだけはなりませぬぞ！」

「そうよ、ヨディ。貴方はもう王なのだからもう少し落ち着いて！ 内務大臣と王の後エファールがアルステイーンを諫めていた。」

「貴方はもう、王なのよ？ その貴方が戦死でもしたら、この国は大混乱に陥るわ。大体、指揮官は後方に、どん、と、構えているものよ。前線に出たりなんかはしないわ」

「ああ、もう面倒臭いなあ！ だから僕は、こんなかたつ苦しい生活、前々から嫌だつたんだ！！」

「あなた。残されたものの気持ちを考えた事、ある？ 無いでしょう？ あつたらそんな事、言わないものね」

「うつつ……」

アルステイーンは急に首根つこをつかまれた様なそんな圧迫感を覚えた。

「そんな事を言つたつて僕は行くぞ！」

「ああた！」

「はっ、はい！」

「私を愛してはいないわけ？」

「う……あ、愛しています……」

「愛していたら、出陣なんて出来ないわよねえ？」

アルステイーンは窮地に追い込まれた。

「……考えさせてください」

これが、アルステイーンに出来る精一杯の抵抗だった。

「おらは出陣するだ」

「ガンロクさん」

宮廷内の広間の一角でガンロクとアンが話していた。

「どうやらガンロクの出陣に関してちょっとした揉め事があるらしい。」

「ガンロクさん、どうして貴方が出陣しなければならないの？」

「お師匠に何か有れば、アンさんは悲しがるだろう。おらは、アンさんの悲しむ顔を見たくねえだ。だから、おらは、お師匠の盾になりに行くだ」

「ガンロクさん。その理屈は何か間違っているわ。自分を犠牲にする事が、必ずしも良いわけでは無いわ。それに私はガンロクさんに、死んでなんか欲しくない」

「じゃ、お師匠が死んでもいいだか？」

「それは……」

「じゃあ、そういうことだ」

「……………」

アンは言葉に詰まったまま、そこに立ち尽くしていた。

数日後アベニとムラサキが無事に帰ってきた。

勿論、敵の本拠地の情報を、持って帰ってきたのである。

そして持ち帰ってきた答えは

「コイ島」

と言う島だった。

そこが敵の本拠地……すなわちバヴェルがある地であり、アーチエルが囚われている地でもある。

「どうやらアーチエルは、丁寧に扱われているらしく、陵辱されたり暴行を受けたりと言う事は無いらしい。」

しかもバヴェルの実験には、抵抗しているらしい。

そのつど猿面のマスクドがアーチエルを説得して、カプセルの中

へ入っていくという。

あのバヴェルに対しては、強固なまでに抵抗感を見せるアーチエ
ルが、ただ素直にカプセルの中へ入っていくとは、思えない。
きつと何か脅されているか、騙されているかと推測された。

このままでは、早晚バヴェルの復活が、現実のものとなってしま
うであろう。

アーチエルの救出が急務とされた。

「敵本拠地は、ビート・バーンス諸島、コイ島！」

アベニがそう宣言した。

「ならば、決戦の地はそこぞー！」

アルステインはそう受けた。

「いざ、決戦の地へ赴かん！」

「貴方はここで留守番でしょ？」

エファールが釘を刺した。

「はい……」

「私と、ヨディでここを死守します。皆さんは安心して戦ってきて
ください。帰ってくる場所は確保してますから。決してイーハンに
指一本この国土に触れさせる事は無いでしょう」

後のエファールがそう宣言した。

アシュマは、決戦の地に赴く人選をした。

オルバニアンと、アルミナ、ジーク、ガンロクの破壊力は外せな
い。

ハルマの多彩な魔法と、レンヌの召喚魔法へブンスソードも外せ
ない。

後はリイナの機動力と、キュポアの回復魔法、ミカの依り代とし
ての力も外せない。

依り代につける者としては紅龍号のエンジン要員を当てれば良いだろう。

問題はエスタとハヤだ。

このところ、この二人は、アシユマの視線が有る無いに関わらず、ライバル視をしているようだ。

これでは、いざ、戦闘になったら、命を落としかねない。

アシユマは二人を呼びつけ今回の不参加を勧めた。

が、二人とも頑として聞かなかった。

「死ぬぞ？ 構わんのか？」

アシユマは言った。

「私は戦うぞ。……お前の為に」

エスタが言った。

尤も言葉の残り半分はか細く消え入るように喋ったが。

「私はもう、戻れない。この生き方しか出来ない……」

ハヤが沈痛な面持ちで言った。

「何も戦うだけが生き方ではあるまい。他の生き方も模索してみよ」

「他の生き方などあるものか！ 戦う事がマスクドの生きる道」

「そのマスクドからはもう離れる」

「しかし……」

「私は付いてゆくぞ？ かまわんだらうな？」

エスタが言った。

「駄目だ」

「なぜだ!？」

「死ぬぞ？」

「お主の為に、死ぬなら構わん」

「そのような考え方はやめろ」

「しかし」

「しかしは無い!」

「……それでも私は、お前の為に戦う」

「私も戦うしか、道は無い」

ハヤも追隨した。

「どうなっても知らんぞ？」

アシユマはそう言うに留まった。

次の日いよいよ発進の段となった。

「これから敵の本陣、ビートバーンズ諸島に向けて発進する。発進したが最後、もう元には戻れない。いわば、死出の旅路と言ってもよい。ここで、行くのを思いとどまるのもよし。あくまでマスクドとの戦いに、赴くのもよし。選択は諸君に任せる。残りたいものは今、この場で宣言してくれ。誰も咎めはせん」

暫くしても、誰も何も言わなかった。

それは、皆がマスクドとの戦いに赴く意を決したということだった。

「いいんだな？ みんな？」

それぞれが、それぞれの、頭を頷かせた。

「済まない。みんな」

アシユマが頭を垂れた。

「別に済まなくなんかねえよ。アシユマみんな自分の意思だぜい」
オルバニアンがアシユマを補って助けた。

「そうよ、アシユマ。頭を上げて」

アルミナがアシユマにそう告げる。

「わかった。それでは、発進する。後の事は頼むぞ。アルステイン」

「分かりました。アシユマ君。思い切って戦ってきてください」

アルステインはそう言って、アシユマ達を送り出した。

「とりあえず、起動だけはしておくか」

ロシは、カプセルの中のアーチェルに向かって、酷薄な笑みを浮

かべそう言った。

カプセルとは、勿論、バヴェルのコクピットカプセルの事である。そんな事を知ってか知らずか、カプセルの中のアーチエルは、安らかな寝息を立てて眠っていた。

ここはオロのサイコ・フライヤーの中。

大きなベッドと周りには作戦を発令できる施設が整えられていた。『マイマスター。これからテストを兼ねて、バヴェル第一塔を起動してみようかと思う。宜しいか？』

ロシが無線でオロに連絡を入れてきた。

『マイマスターと呼ばれたこの男、オロは、側にしな垂れかかるテイシユラをはべらせて、

「うむ。よかる。そろそろ全世界に余の力を見せ付ける良い頃合だ」そう言った。

カメラ・モニタを通して一瞬ロシとテイシユラの視線が合わさるが、それも一瞬。

ロシが視線を外し、バヴェル起動の号令を発しようと、もう一つのカプセルに乗り込んだ。

バヴェル一塔に付きコクピット二つと言うのは、ノリトレアに埋まっていた、バヴェルと同じである。

コクピット周りには高さ二百メートルにわたって防波堤が築かれてコクピットが水に濡れる事は無い。

『ザザよ、これから起動実験を、してみようかと思う』

二号塔にいるザザに、ロシは伝えた。

『ロシよ、それは良いが、衝撃で、二号塔が、海へと沈んでいかないか？』

『それは尤もだ。ザザ。ならば共振起動を行ってみよう』

『共振起動？』

『ぶつつけ本番だが、上手く行くとは思っ』

『よし、やってみよう』

『力場、臨界に達します』

ミヤが報告を入れる。

「さあ、アーチエル姫。バヴェルの起動を」

ロシは、眠っているアーチエルに向かって、呼びかけた。

眠っている筈のアーチエルは、眉根を寄せて、抵抗の姿勢を見せた。

「起動キー始動！ 共振起動開始！」

アーチエルは、更に苦しげに、眉根を寄せた。

苦痛に身悶え、汗を掻いていた。

「多層積層型圧縮魔導石、回路接続。多次元平行空間よりの力場の獲得。加速度的力場開放……元々バヴェルにエナジアなる怪しい微生物など要らんだ。多層積層型圧縮魔導石の最初のひとかけらにエネルギーを与えてやればよい。後は加速度的に火が点いて行きバヴェルは起動する。……さて、これでお姫様の役目はなくなっただけだが、アシユマとの対決の切り札となってもらうか？ それとも、もう必要ないかな？ ハヤとの戦いで死んでいるならばな」

ロシは無慈悲にもそう言ったのけた。

バヴェルは徐々に唸りを上げその胴体構造のリングを回転させて行った。

海は煮立ち、大地は揺れ、津波を起こし二機のバヴェルは起動し、空中に浮かび上がった。

「素晴らしい。見事な光景だ。これがわたしの物とは……」

オロが感慨深げに言った。

『一旦、バヴェルを待機状態にしましょう』

ロシからオロへ無線が入る。

「何故だ？ 何か問題でもあるのか？」

『はい。今まで眠っていたバヴェルです。構造的に脆い部分があってもおかしくありません。今から自己修復機能をかけます。その為一時的に待機状態にします』

そう言って、バヴェルは再び海を煮立たせ、津波を起こしながら海の中へ、その姿を隠した。

「分かった。記録班。これまでの映像は上手く撮れたか？」
『はい。オ口様。問題ありません』
「ならばこれらの映像をすぐさま全世界に配信せよ」

一方、紅龍号。

アルステインから無線が入る。

『アシユマ君いますか!?!』

「いる。アルステイン。どうした? そんなに慌てて」

『チャンネル4を見てください』

「チャンネル4?」

アシユマは言われたとおりチャンネル4にテレビの画像を合わせる。
そして、驚いた。

「アルステイン……これは」

『そう。バヴェルだ。それも二機だ。我々の予想を裏切ってね』

「早く何とかしないといけないな。これは」

「何とかと言っても、姉様はどうするのじゃ? 怪獣?」

キユポアが横から割って入る。

アシユマは何かを思案顔だ。

「のう! 怪獣!」

キユポアは更に食い下がる。

「とりあえず、ビート・バーンズ諸島には行こう」

「怪獣!」

「今度の戦いは、バヴェルが絡んでいる。尋常の勝負とはなるまい。皆の命を俺にくれ。いざとなったら、アーチエルは見放す。皆もそうしてくれ。そしていざとなったら俺の事も見放してくれて構わん。その代わり皆の命を俺にくれ。この通りだ」

「怪獣!!!」

キユポアが、悲鳴に近い声をあげた。

普段のアシユマなら、自分一人で出撃してでも、皆を守ろうとしたらだろ。

だが今度は、

「皆の命を俺にくれ」

とまで言い切った。

それほどまでに厳しい戦いが予想された。

「怪獣……」

キュポアはもう、何も言えなかった。

「アシユマよう。よしてくんな。みんな覚悟の上だぜい。頭を上げてくんな」

オルバニアンがアシユマに語りかける。

「そうよ。でなければ皆この場にいないわ」

アルミナがアシユマにそう言った。

「でもな、怪獣。誰も、姉様を見放したりもしなければ、怪獣の事も、見放したりはせんぞ？」

キュポアが言っただけだ。

「有難う、キュポア」

アシユマがキュポアに礼を言った。

以前のキュポアならここで、胸ときめくモノがあったが、今は胸ときめくものは何もなかった。

その代わり

「何の、敬愛する義兄様にこさまと姉様の為じゃ」

と、言っただけだ。

バヴェルは二塔とも、その身を海の中に沈め、今はコックピットが水面より上に覗かせているのみとなった。

コイ島は津波の直撃をもろに受けて木々が薙ぎ倒され、動植物は波に流され島の形は変わってしまった。

それでも、まだ平坦な場所を見つけて、オロは自分のサイコ・フ

ライヤーを地面に下ろした。

オロはその場に降り立ち、

「水濡れた荒野だな」

ぼそりと言った。

「オロ様！ 急ぎ機内にお戻り下さい！ 敵機です！」

「敵機だと？ そんなに急ぐ事があるのか？ どこに敵機が来ている？」

「もう、目の前にまで来ています」

「なんだと！？ そうか！ ステルスカ！」

「オロ様はお下がりがり下さい。この場を決戦の地とします」

ザザが言った。

「うむ。後は任せる」

キュポアがモニターでオロを見つける。

そして叫んだ。

「オロじゃ！！ ああ、逃げてしまう！ 何とかならんのか！？」

オロはサイコ・フライヤーに乗り込む。

そしてサイコ・フライヤーは浮き上がった。

「あまりお焦りにならぬほうがよう御座います。キュポアさん」

「しかしハルマ！ ああ、逃げてしまう。そうじゃプラズマキャノンを一発お見舞いしてやる！」

キュポアは砲座に付くと照準を合わせた。

「行くぞ！」

キュポアはそう言うと発射トリガーを引いた。

プラズマの固まりは見事にオロのサイコ・フライヤーに命中したかに見えた。

が。プラズマの固まりは弾かれて掻き消えてしまった。

「くそっ！ なんじゃあれは？」

「シールドですよ。キュポアさん」

「シールドか。かなり良質の念者が乗っておるようじゃの」
「そのようですね」
「……なんじゃ、あそこにおるのは？ 牛の頭をしておるぞ？」
キュポアは地面に眼を転じるとそこには牛頭牛足の魔人が居た。
「ザザだ」
アシユマはそう呟いた。
「ザザ？ じゃあ、あれがマスクドなる者の頭目であるか」
「そういうことになりますね」
ハルマが追隨した。
「その、『頭目』から無線が入っているわよ」
通信席のアルミナが言った。
「『この地を決戦の場としたい。そちらの意向は如何か？』ですって。どうする？」
「勿論こつちとしてはどこでもOKだ！ 良いよな？ アシユマ」
と、オルバニアンが言った。
「よかるう。周りに警戒しつつ紅龍を着陸、何時でも発進できるようにして戦闘要員は待機。敵の本拠地だ。何があるか分からん気を付けるよ？」
「気をつけるといっても怪獣。波に浚さらわれて何も無いぞ」
「それでも、気をつけたほうが良いって事ですよ」
ハルマが補って言った。
「では出るぞ！」
アシユマが言った。
紅龍の後部ハッチが開く。
「行くわよ！」
気を吐いたのがハヤだった。
アシユマの為に。
そしてマスクドの因縁と決別する為に。
「先に行かせは、しないわ！」
語ったのは、エスタだった。

「こちらアシュマの為に、気を吐いた。

二人はお互いに意識し合い、それが刺激となっているようだ。

「二人とも熱くなるな。クレバーに行け」

アシュマが二人に注意を喚起した。

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイング!!」

アシュマがウイングを唱えて敵陣に先行した。

それを後からオルバニアン、アルミナ、ジーク、ガンロクが地を走り続く。

敵陣では犬頭の魔人ザギが召喚魔法の呪文を唱えようとしていた。

「来たれ悪鬼よ鬼神の如く

その手に心臓掴み取り

血の渴きを癒さん為に

敵の血頭杯呑み乾さん

血肉を食らい飢え満たせ

出でよ悪鬼

ゴブリン!!」

忽ち多数の悪鬼が召喚され紅龍に襲い掛かる。

こちら紅龍ではミカが召喚魔法を唱えようとしていた。

「びよびよびよ。

僕リトルチキン。

可愛い？ 可愛い？

可愛いって言わなきゃいじけるぞー

いじけるぞーいじけるぞー

それでもほっといたらふえてやるー

リトルチキンー！！」

多数のひよこの縫いぐるみ状の生き物（？）が召喚されゴブリンとぶつかり合った。

リトルチキンはこれと言って攻撃方法を持っているわけではない。

ただ敵に斬られれば二匹三匹に増える。

数がこのリトルチキンの武器なのだ。

忽ちリトルチキンの数は増え、敵は身動きが取れなくなった。

そこへ鬼神の表情で、ゴンドラ上のハルマが、呪文を掛ける。

「幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ

汝の顔に笑みは無し、

未来永劫繰り返される

神の罰をその身に知らん。

サンダーストライク！！」

キュポアはその表情を見てぞくりとした。

こんなに恐ろしい表情のハルマを、見た事がなかったからだ。

同時にこの表情に、何故か親しさも覚えた。

何故か？

アシユマの作る表情と、何処か彷彿とさせたからだ。

大量のゴブリンが死滅した。

それでも、ザキはゴブリンの召喚をやめない。

こちらも数で勝負しようと言うのだ。

アシユマは敵の雑魚も味方をも無視をして、一気に敵本陣、アー

チエルのいるバヴェルへと向かっていた。

だが、空中を飛ぶゴブリンに、行く手を阻まれて、思うように先へ進めなかった。

地上でも乱戦模様となっていた。

リイナが、両手に鉈のような魔導石製のククリを振り回し、ゴブリンを葬れば、レンヌが召喚魔法、ヘブンスソードでフォローをする。

だが、どうもリイナの動きに、いつもの精彩さが見られない。

ゴブリンのような雑魚の敵でも、苦戦する事さえあった。

「リイナ、どうしたんだ!？」

レンヌが思わず大声で訊いていた。

インカムが、それぞれに付いているにも拘らず、にである

「うるさい。大丈夫だ。黙ってみている」

リイナがそう答える。

これに、レンヌは怒りを覚えた。

「『うるさい』とはなんだよ！折角人が心配しているのに!」

「うるさい！他に気をとられていると殺られるぞ」

「なっ……」

レンヌは言葉を失った。

確かに喧嘩などしている暇は無いのだ。

しかし、リイナご自慢の機動力が、まるで見られない。

「リイナ、君は下がって!」

レンヌがそう言う。

「なんだと?」

「君特有のスピードが失われつつある! どうしたんだい!？」

「うるさい! 戦闘中に私語は厳禁だ!」

そういうリイナに、何度も命の危難が訪れる。

そして、とうとうリイナの脇腹が深々と斬られた。

「あっっ!」

リイナは小さい悲鳴を上げて、その場でうずくまる。

「リイナ！ アンサラー・オールソード！ コマンド・サークル！
ひよこたち、怪我人だ！ 運ぶのを手伝っておくれ！」
レンヌはすぐさまリイナの護りに入る。

「びよ？ わかったびよ！」

リイナはひよこたちに運ばれ、その脇をレンヌが心配そうに付き
従っていた。

リイナは、戦線を離脱してしまった。

アシユマは、ゴブリン達との戦闘に、いささか苛立ちを覚えてい
た。

ここで、こんな暇をしているわけには、いかないのだ。

アシユマは鬼虎の秘剣、『蛭』を使うことにした。

マスケドとの決戦に、なるべくだったら気を温存したかったが、
仕方が無い。

アシユマは鬼虎に気を充溢させ始めた。

アシユマが鬼虎を一閃させる。

すると気弾が一斉に円弧を描いて飛び散り、ゴブリンたちを刺し
貫いて行った。

しかし、その中で一際大きな影が、『蛭』を物ともせず、アシ
ユマの行く手を立ちふさがった。

「ザザか……」

「いかにも」

リイナは紅龍号でキュポアの手当てを受けていた。

「聖なる契約を交わし者達よ、

聴けよ、汝らの魂は救われん。

見よ、汝らの肉体は癒されん。

聖なる癒し、神の御手。
ヒーリングオール!!」

リイナの傷口が癒されていく。

「一応、応急処置じゃ。だがもう戦うのは控えたほうが良いな」
キュポアが言った。

「ヒーリングオールなんだろ？ 傷口は塞がったはずだ。まだ戦える」

リイナはこんな体になったにもかかわらず、まだ戦おうとしていた。

「駄目じゃ。身体が重たかろう。体力が治療でもって行かれているのじゃ。戦うのは無理じゃ。大人しく養生せい」

キュポアはリイナを諭した。

「リイナ。君の分まで僕が戦ってきてあげるよ。外の事は心配せず、ゆっくり休んでおくれ」

レン又はリイナに優しく声を掛けた。

「くっ……!!」

リイナは小さく声を発し、向うを向き、どうやら泣いているようだった。

オルバニアンがゴブリン共を大逸鉄で薙ぎ払っていた。

「ち！ こんな事ならバルカン砲を持つてくるんだったぜ」

オルバニアンが愚痴を言う。

「ぼやかない、ぼやかない。弾が切れたらお仕舞いでしょ？ そうしたら『大逸鉄を持つてくりゃ良かったぜ』って言うに決まってるんだから」

、アルミナが言った。

「二人とも、敵が来るぞ」

ジークが注意を促した。

ガンロクは無言で三尺を超える魔導石製の大鉈を二刀に振り回していた。

ハヤとエスタは何故かペアになって戦っていた。

だが、ペアと言ってもフォーローしあう関係ではない。

互いに得物の数を競う、ハンターのようだった。

そんなはずは無いのだが、まるで勝者にはアシユマの愛を、独占できるが如くに。

そこへ一つの鉄球が飛んできた。

咄嗟に避ける二人。

マスケドのラキだ。

「いつから敵に寝返ったんだい？ ハヤ」

「ねっ、姉さん……」

ハヤとラキはどうやら姉妹のようだ。

「好きな男でも出来たのかい？ 健気だねえ」

「そっ、そんなんじゃ」

「おや？ 凶星みたいだねえ」

「隙あり！」

脇からエスタが、ラキに斬りつけた。

「甘いよ！」

ラキは腰に差していた鎌を手にしエスタの攻撃を弾いた。

そして鉄球を呼び戻し振り回し始めた。

「そんな……！！」

今の呼吸の攻撃に、絶対の自信を持っていただけに、エスタの落胆は大きかった。

「落胆している暇は無いわよ。二人で攻撃しないと、勝てない相手よ」

ハヤがエスタを叱咤した。

「おや？ 私に勝つ気にいる？ 私に勝った事の無いおまえが？」

私に？ ハッ！ 笑わせるねえ」

「今よ！」

ハヤが有頂天のラキの隙を突いて、二手に分かれた。

「チッ！」

ラキは舌打ちをした後、鉄球をハヤに投げつけた。

ハヤは巧みにそれを避けると、そのままの勢いで突っ込んできた。

「いつものパターンだねえ。お前はいつもそこで、私の鎌にやられるんだよ」

「いつもはね」

横手の死角からエスタが突きを入れて来た。

念導境界面の強さから言って、ほおっておいても攻撃は効かない筈なのに、この攻撃にラキは焦った。

逆に優秀な剣士だからこそ、焦りだったし、反応だったろう。

ラキはエスタの突きを弾いた。

今度はその隙を突いてハヤがラキに突きを入れてきた。

いつもより一拍多い攻撃の筈だ。

ハヤの攻撃は見事凶に当たり、ラキの心臓を貫いた。

「かはっ！」

「しまった！」

何故かハヤはそう言った……。

「アシユマよ。いつぞやの借りを返すぞ」

魔人ザザが牛槌鬼うしつちごを両手に持ちながらそう言った。

「貴様に貸しを作った覚えは無い」

アシユマがそう言い放った。

「では、参る！」

ザザが槌を振るって、アシユマに襲い掛かった。

アシユマはそれを避け、居合い宜しくザザに斬りかかった。

アシユマの鬼虎は、ザザの腹部を存分になぎ払った筈だった。

が、矢張り、ザザの念導境界面に鬼虎の刃は阻まれて、ザザを斬る事は叶わなかった。

「以前より気を張ったのにな」

アシユマは言った。

「それはこちらと同じ事。斬られたくは無いでな」

ザザもそう受けた。

そしてザザは再び槌を大きく振りかぶり、アシユマ目掛けて振り下ろした。

アシユマはいったん間合いの外に出て、それを避けた。

「秘剣、裏・閃光一刀・崩し」

アシユマがぼそりと呟いた。

アシユマが同時に鬼虎に気を充溢させる。

「む？」

ザザはそれに警戒の色を示した。

前回はそれでやられた。

「今回はやられるわけにはいかんな」

ザザは牛槌鬼を構えなおしてアシユマの攻撃に備えた。

アシユマは以前の様に、隙だらけのザザを、そこに見出すことは出来なかった。

そこにいたのは、達人の域に達した剣士だった。

(これは厄介な……)

アシユマは密かに舌打ちした。

そついうザザもアシユマに一分の隙も見出せず、困惑の体であった。

ザザもアシユマの事を当代随一の剣士と認めざるを得なかった。

両者は睨み合ったまま、暫しの間、動く事がなかった。

ゴブリン共が二人の戦いに割って入る。

アシユマを襲ったのだ。

それをアシユマは鬼虎を、二閃三閃させて真っ二つにした。

そこに出来たアシユマの隙に、ザザが割り込んだのは自明の理だ

った。

アシユマは動きを止めなかった。動きを止めると、ますます敵の思っ壺になるからだ。

ただ、アシユマの無理な動きと、ザザの理に乗っ取った動きには、明らかに、違いがあり、アシユマが存分に、ザザの攻撃を脇腹に食らったのに対し、アシユマの攻撃はザザの肩口を傷付ける程度に止まった。

だがザザが不思議に思ったのは、今のザザの攻撃でアシユマは、はじけ飛ぶ筈だった。

が、それはアシユマを痛打するに止まり、ザザの思った以上の効果は見られなかった。

却って肩口を斬られたザザのほうで、ダメージが大きいと言えた。表面上は。

アシユマはダメージを受けていた。

肋骨に。

内臓に。

故に動きに、精彩を欠いていた。

(成る程)

これはザザの看破されるところとなり、更に激しく攻撃を受けていた。

(まずい！ このまま攻撃を受けていては)

アシユマは焦りを感じていた。

このままではジリ貧だ。

アシユマはそうに思っていた。

「砂漠で水を求むる者よ

汝は今、癒されん。

極地で火を求むる者よ

汝は今癒されん

求むる癒し今与えられん

ヒーリングスファイア！」

アシユマはこの呪文で、一時しのぎを行った。

「むっ？」

ザザは不思議に思った。

自分の知らない、呪文だったからだ。

「私の知らない呪文だな」

「呪文も進化しているって事さ」

アシユマは徐々に癒され動きも精彩さを取り戻して行った。

アシユマは納刀した。

「奥義、流星。貴様には俺の太刀筋が読めない」

アシユマの新しい秘剣だ。

奥義と言った通り一剣が万剣になり万剣が一剣に帰る。

奥義『無想活殺』で得た境地を別の観点から編み出した技だ。

そしてそれはアシユマの全く言った通りで、どの太刀筋の動きにも対応できる構えの色を匂わせていた為、逆に太刀筋が読めないと
も言えた。

もし仮にザザが一つの太刀筋を読んだとすれば、それは微妙ながら
身体の動きに表れ、アシユマはそれを読み別の太刀筋で攻撃して
くる。

また仮にザザがどの太刀筋も読まなかった場合、アシユマは得意
の抜刀でザザを撃てば良い。

ザザが全ての太刀筋を読もうとした場合、その場合は不可能と言
えた。

アシユマの太刀筋は変幻自在、無限であるので全ての予測は不可
能なのだ。

「むっ」

ザザは唸った。

この技は相手が達人であればあるほど、読みが出来ないのだ。

ザザはここに来て、アシユマにとって一番厄介な構えの色を、見

せた。

それは、相抜け。

つまり相打ちの色を、見せたからである。

これならばどの太刀が来ても相手を屠る事が出来る。

アシユマは成る程と思った。

その時ザザの頭に装着されたインカムに、ロシからの連絡が入る。

『ザザよ。聞こえているか？』

「聞こえているが、今、手は放せない」

『ザザよ。これからバヴェルを再起動させる。これで一気にケリをつける』

「何？ バヴェルを？」

「!?!」

『そうだ。だから戻って来い』

「わかった。アシユマよ。次があるかどうか分からんが、さらばだ。貸しをもう一つ付けておいてくれ」

「まて！ 何をする気だ？」

「それはお前のあずかり知らぬ事」

ザザはアシユマの追撃に気を配りつつ戦線を離脱した。

「みんな！ 聞こえるか！？ 敵はバヴェルを起動するつもりだ！

急いで紅龍号に戻りこの島から離れるんだ！」

「なんじゃと!?! それはいかん！ 皆、早く戻ってくるのじゃ！」

キユポアが皆に号令を掛けた。

ラキは心臓を貫かれ致命傷になるかと思われた。

「しまった！」

ハヤはそう言った。

ラキはゆっくりハヤの剣を引き抜き

「『猪球鬼』よ、汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力を以って汝の主を癒すべし」

ハヤは恐怖のあまり、後退さった。

ラキの報復を恐れての事である。

『ラキ！ バヴェルを起動させる。戻って来い』

その時、ロシからの無線が、ラキのインカムに入った。

「うるさいよ！ ロシ！ あたしやこれからいいとこなのさ！ 邪魔しないでくれ！」

『ラキよ、命令に逆らうとどうなるか、それが分からぬお前でもあ
るまい』

「ち！ わかったよ。命拾いをしたね？ ハヤ」

「……………」

ハヤは黙って状勢を見守るしかなかった。

『みんな！ 聞こえるか！？ 敵はバヴェルを起動するつもりだ！

！ 急いで紅龍号に戻り、この島から離れるんだ！！』

ハヤやエスタのインカムに、アシユマの声が入ってきた。

暫くして、再びバヴェルが起動した。

海は煮立ち津波を起こし、大地は裂け、大いに揺らし、破壊の権
化、バヴェルがその姿を、眼の前に晒した。

紅龍号では、アシユマを除く全員が揃っていた。

「アシユマは？ アシユマはどうした？」

最後に帰ってきた、オルバニアンが皆に聞いた。

「怪獣は、バヴェルのところじゃ」

キュポアが画面に指差し、そう言った。

「さて、逃げましょう」

ハルマが無情にもそういった。

「さて、ハルマ。お前はアシユマを見捨てて、逃げようってのか！
？」

オルバニアンが言った。

「はい。それがアシユマさんの意思ですから。敵はバヴェルまで持

ち出してきています。ここは逃げるしかありません」

「しかし……」

オルバニアンが食い下がった。

が、

「駄目です。コクレト少尉、反転百八十度。全速で逃げてください」
冷たく言い放った。

紅龍は風にまかれる木の葉のように、翻弄されながら反転し逃げて行った。

二機のバヴェルは、雲を呼び、雷を呼び、嵐を呼んで、天変地異の様相をその場に、作り上げた。

海面は未だに泡立ち津波の余韻が残り大地は揺れ、そして裂けそこに海水が混じりこみ水蒸気爆発を起こしていた。

そんな巨大なバヴェルの前に一人のちっぽけな人間が立ちただかる。

アシユマだ。

バヴェルは巨大なプラズマ放電を仕掛けてきた。

アシユマも負けじと巨大な雷いかずちを作り上げ投げつけた。

巨大な雷同士は空中で、激しく干渉し合った。

次に大口径のビーム砲を、アシユマに向けてきた。

こいつは確か、かなり厄介な相手だったと、アシユマは覚えている。

あの時は、自身が念導境界面となって、砲撃をかわした筈だ。

あれは、全てのものは根底で同一である、と言う境地に立ってこそなりえた業わざだった。

六百六十六基のビーム砲が一齐にアシユマに向かって放たれた。

今度はその境地に立てるかだろうか？

駄目だった。

アシユマは念導境界面で、六百六十六億のビームを『防いで』し

まった。

その代わり素早く動いて的を絞らせなかった。しかし全てのビームを、防いだわけではない。

中にはアシユマの念導境界面を突き破って僅かに漏れてプラズマ化したビームもあった。

アシユマは段々満身創痍となっていた。

「くそ！ ちょこまかと」

ロシは悪態をついた。

そのうちアシユマは何とか、アーチエルのいるコクピットへとたどり着いた。

アシユマは防ぎきれなかったビームのプラズマで、あちこちに火傷を作っていた。

「アーチエル。やって来たよ。今助けるからね」

アシユマは優しくアーチエルに語りかけると、コクピットのカヴアーを引き剥がし始めた。

「やめるんだな。アシユマ君」

頭上から声が聞こえてきた。

マスクドのナンバー2、ロシだ。

武器はどうやら刀のようだ。

「目障りなんだよ、君は。我々にとって」

「好きでなつたわけではない」

「ここで舞台から降りてもらおうか？」

「嫌……と言ったらどうするね？」

「力ずくでも降りてもらおうかね」

「ならば、来い」

「では行かして貰おう」

ロシが言う。

アシユマは素早く納刀して居合い腰に構えた。

なんと対するロシも居合いの形で来た。

勝負は一瞬で決すると思われた。

バヴェルの裂け目から

「バチッ」

と、音がした。

二人が勝負を決する機会としては十分すぎるほどだった。

二人は空中をすべり各々の刀を鞘走らせた。

二条の閃光が走り交錯した。

二振りの刀は空中で火花を散らして互いの勢いを殺した。

二人は空中で鏝迫り合いとなり、下手に身動きが取れなくなった。が、アシュマはロシにいなされてしまう。

その時に、アシュマは背を斬られてしまった。

それが致命傷にならなかったのは、アシュマの勘と腕があったからであろう。

しかし、

「どうした？ バヴェルを破壊する鬼を持つ者が、その程度の腕と鬼が泣くぞ？」

ロシは言い放った。

「砂漠で水を求むる者よ

汝は今、癒されん。

極地で火を求むる者よ

汝は今癒されん

求むる癒し今与えられん

ヒーリングスフィア！」

アシュマは今日二度目の、ヒーリングスフィアを掛けた。が、またそこで隙が出来る。

「どうした？ 隙だらけだぞ？」

ロシが容赦なくアシュマを攻め立てる。

アシュマは防戦一方だ。

「ほらほら？ どうしたどうした？」

「……………」

ロシは尚も、アシユマを攻め立てる。
アシユマもなまじ見切る事が出来るため、致命傷に至らないのである。

アシユマは徐々に切り刻まれ、満身創痍だ。

「そろそろとどめを刺すか」

ロシはそう言いアシユマに斬りつけた。

ロシ必殺の真っ向唐竹割りの太刀だ。

その必殺の太刀をアシユマは、いなした。

ロシは多少驚いた様だ。

「ほう。これは驚いた。これを、いなすとは」

ロシはアシユマを、また攻め立て始めた。

が、ロシの攻撃は徐々にいなされ、外され、かわされ始めた。

アシユマは、ロシの攻撃を見切り始めたのである。

逆にアシユマの攻撃が、ロシを押し始めた。

「……………」

「どうした？ ロシ。口数が減ってきたぞ？」

アシユマがそう言った。

今度はアシユマが攻め立てる。

「くっ、くそ……………」

ロシは決死の一撃を、車に、アシユマに見舞った。

アシユマも必殺の一撃を、車に、ロシに見舞った。

何かが弾けとんだ。

手首と刀のようだ。

「クッ、くそっ！！」

そう叫んだのはロシだった。

ロシは斬り飛ばされた、自分の手首を追って、下へと飛び去ってしまった。

アシユマは、予め鬼虎に気を溜め斬り付けた。

それが功を奏したようだ。

「マスクドのロシか……なかなか侮れない相手だったな」
アシュマはそう呟いた。

だが、そのマスクドとの決着は、まだついていない。

「ふう。さてアーチエルを助けねば」

アシュマは周りに敵のいないことを確かめると、アーチエルを助け上げ抱きしめた。

それで目が覚めたアーチエルは、

「アシュマさま……旦那さま」

と、抱きついて来た。

「さあ、ここから抜け出そう。ここはまだ危ないからね」

「はい」

アシュマはアーチエルと、這う這うの体で、逃げ出すように帰って行った。

夜、ノリトレアのアルステインの居城にて、アシュマ達が、アルステインに事後報告をしていた。

「そうですね。バヴェル復活は、阻止できませんでしたか」

「済まぬ」

「アシュマ君の責任では有りませんよ。それよりも、これからどうするかです」

「どうもこうも俺がもう一度行くしかあるまい」

「アシュマさま！ また一人で！ 危ない事を背負い込もうとして！」

「とは言ってもアーチエル、他に方法があるまい？」

「でも……！！」

「そこら辺のところは、今度ゆっくり話し合ってください。今日のところは休んで」

アルステインが話を終わらせた。

リイナが目覚めたのは、ノリトレアの城の病室のベッドの上だった。

点滴が、痛々しい印象を与えていた。

「リイナ、目が覚めたかい？」

そう言ったのはレンヌだった。

「レンヌ……」

「お医者様が驚いていたよ。これならもう明日から自由に出来るって。傷は痕にも残らないそうだよ。すごいね。魔法って」

「私は……何も出来なかった」

「そんな事無いよ！ リイナはよく頑張ったよ！ ベストを尽くしたよ！」

「学校のお遊戯のような勉強とは違う。結果が全てなんだ。私のプライドはポロポロだ……」

「そんな事言うもんじゃないよ。リイナ。命があるだけでも良しとしなきゃあ」

「みんなの足を引っ張ってでもか？」

「リイナ……」

レンヌの大声にリイナは思わずびくつとした。

「……ごめん、大声なんか出して」

「いや、私も悪かった。分かっていたんだ。感謝もしている。特にレンヌ。お前には。私は、もう、イレギュラーナンバーとしての寿命を終えて、普通の人間に戻るのだろう。皆にはまた、迷惑を掛ける」

「人間に戻るのかい？ そんな事があるなんて……」

「正確に言えば、少し違うのだから。能力が人間並みに『落ちる』と、言う事なんだ」

「それでも、リイナはリイナだよ。僕の大好きなリイナさ」

「レンヌ……」

リイナは眼から、大粒の涙を流した。

「リイナ……」

二人はゆっくり近付き、やがてお互いの唇を重ね合わせた。

キュポアは剣と魔法の違いはあれど、昼間のハルマの戦闘にアシユマを彷彿とさせる何かを見た。

それは凄まじき、敵への容赦ない、攻撃だったのかもしれない。

今は、そのハルマとテラスに来て、夜景を見ている。

「流石に冬じゃ。冷えるのう」

指にはあと息を吹きかけた。

その時ハルマがコートを掛けそのコートごとキュポアを抱きしめた。

キュポアはハルマのその行いに、動悸が早くなるのを感じた。

「キュポアさん。キスがしたいです」

ハルマはいきなりそう言った。

「え？」

キュポアは我が耳を疑った。

ハルマがこんな大胆な事を言うとは思わなかった。

「昼間の戦闘で分かりました。人間いつ死ぬか分からないと。そうなった時に、想い人に想いも伝えられず死んで行くのは、不幸なのではないかと……」

「想い人……」

キュポアも、ハルマの事を憎からず想っている。

むしろ、好意さえ抱いている。

愛していると言っても、良いかも知れない。

ハルマの唇が近付いてくる。

眼を閉じるキュポア。

そして、キス。

涙が頬を伝う。

始め、それは歓喜の涙かと思った。

が、それは歓喜とは違い、激しい罪悪感だと気付くのに、時間は掛からなかった。

様子がおかしいキュポアに、ハルマが訊く。

「どうしたんですか？ キュポアさん？」

「ハルマ、済まぬ。今のはわらわのファーストキスではないのじゃ」

「なんですか。そんな事ぐらい。大丈夫ですよ」

「わらわは……わらわは、お主を怪獣の代わり、にしているのかも知れぬ……」

するとハルマは、キュポアの頬を両手で優しく包み、二度目のキスをした。

内心驚くキュポア。

「そう言つて、泣くつて事は、そうじゃ『ない』つて事ですよ、キュポアさん。だから泣かないで。僕の愛しき人よ」

キュポアは、胸のつかえが取れたように、ハルマに抱きついて、大声で、泣いた。

ハルマはそんなキュポアを、優しく抱きしめた。

そしてキュポアは、今度は自分から三度目のキスをした。

第二節 マスケド強襲

アルステインは今回の騒動の顛末を正式な外交ルートを通じ厳しく抗議すると共に説明と、釈明を求めた。

だが国元連を通じる事は、しなかった。

オロを追い詰める事を、したくはなかったからだ。

オロの暴発を恐れたから。

だが、オロが次にしたことは何か。

アヘイビアへの、宣戦布告だった。

二機のバヴェルは大洋を渡り、アヘイビア大陸に上陸した。

一機はオロ邸の上空に、一機はゆっくりとアヘイビアの大統領府を目指した。

アヘイビア艦隊も出撃をした。

意地も面子も無い、ただジョージ・サバンナ、アヘイビア大統領が助かりたいが為の出撃だった。

その大統領はどうしたか？

逃げた。

一人で。

保養地へ。

愛人を伴って。

艦隊要員は皆不安がった。

「あの、フラインググロツクの完成形だぞ？ 勝てるのか？」

尤もな不安である。

それでも彼等は出撃せねばならなかった。

無能な大統領の命によって。

アヘイビア艦隊は出撃した。

明らかに勝算の無い戦いに。

バヴェルとアヘイビア艦隊は、対峙した。

アヘイビア艦隊は先手を取り、全艦魔導砲の発射体勢を取った。

「全艦機関限界、魔導砲発射態勢整いました」

副官が司令に進言する。

「よし。全艦魔導砲発射！」

魔導砲が発射され光の筋が、バヴェルに延びて行った。延びて行く。

何処までも。

だが、バヴェルの念導境界面に全て跳ね返された。

「無駄な事を」

猿頭の魔人グチが言った。

「そろそろ攻撃するか」

羊頭の魔人ミヤが、そう言った。

「少し遊ぶか」

グチはオートモードを外してマニュアルモードにした。

一機のビーム砲が艦艇を狙う。

「それ」

と、言う掛け声と共にビーム砲のトリガーを引いた。

一筋の光が伸びる。

光は旗艦を貫き爆発をさせた。

また照準を合わせてビーム砲を放つ。

マニュアルでも寸分違わずビームの光は艦艇を貫き爆発させた。

「ふむ。意外と面白いな。キキッ」

「俺にも少し遊ばせる」

ミヤがそう言い出した。

「好きにしる。キキッ」

アヘイビアの艦艇は、二人の魔人の遊戯に、なす術もなく瓦解して行った。

アヘイビア艦隊は全滅した。

バヴェルはその余勢を駆ってアヘイビアの首都ガーファを目指し

た。

人々は我先に逃げ出し、その様は正に民族大移動の様相を呈していた。

しかし、アヘイビア国軍は逃げるわけには行かない。

魔導機兵の部隊と軍用車両の部隊がバヴェルの前に敢然と立ちただかった。

だが規模がまるで違う。

まるで、像と蟻である。

バヴェルの登頂部分は雲の上に出て見えない。

それでも万単位で展開している魔導機兵が、雲霞の如くたち込め、バヴェルの周りを取り囲んでいた。

「こいつらは鬱陶しいな」

「一気に殺るか？」

「そうだな」

アヘイビアの魔導機兵は魔導機兵としては初めて最新鋭のプラズマキャノンを装備した物だった。

複座式で一人がプラズマキャノン用の念を練っていた。

魔導機兵が各々プラズマキャノンを発射する。

しかし、それはバヴェルにとって全く効かず、梨の礫だった。

ミヤとグチは無慈悲にもそれらの魔導機兵を一気に落す算段を決めた。

バヴェルの表面に電光が走る。

バヴェルの表面に取り付いていた魔導機兵達は、誘虫灯に群がる虫の如く電光により焼けて落ちて行った。

残るはアヘイビア陸軍だが、装備がすでに旧世紀の物となっていた。

戦車による攻撃は先程も書いたが、それこそ梨の礫で砲撃が届くものすらなかった。

が、驚くべきは自走砲で、径が五十センチの弾を発射する大仰なものだった。

物理攻撃では恐らく最強であろう。

しかし所詮は自走砲。

バヴェルに敵うべくもなくバヴェルの気圧に圧されて皆吹き飛ばんでしまった。

これで、ガーファを、ひいては大統領府を守るものは何も……誰もいなくなってしまった。

「脆いな」

羊頭の魔人ミヤは呟いた。

「所詮『人間』の作るものなんて、いつの時代もこんなモンだ。神人さまの作られたこのバヴェル以外はな」

猿頭の魔人グチがしめくくった。

バヴェルは大統領府の上に止まった。

そして、アヘイビア政府に無条件降伏を迫った。

アヘイビア政府はなす術も無く、それを呑んだ。

オロは結局、またもアヘイビアに勝ってしまった。

今度は占領政策を採るようだ。

これには国元連・世界中、共に怒るべき暴挙だった。

直ちに国元連安保理が開かれ、直ちにオロ・エバス国に非難決議案を採択した。

そのオロ・エバスはなんとマスクド達を引き連れて国元連本部へとやって来た。

ロシが露払いをし、両脇をザザとラキが詰め、後衛をミヤ、グチ、ザキが勤め、その中心にオロがいた。

オロは、今、正にオロについて会議がなされている国元連総会に乗り込んだ。

そしてミヤ、グチ、ザキの三人にこう命令をした。

「我々以外のここにいる全ての者に等しく死を」と。

虐殺が始まった。

各国の元老院議員が殺される。

それを、警備する警備員も殺される。

色々な事をサポートするスタッフも殺される。

ミヤの槍が唸る。

グチの二刀が唸る。

ザキの剣が唸る。

その度にあちらこちらで悲鳴が上がり血飛沫が飛ぶ。

血飛沫を上げるそこは地獄絵図だった。

これはオロのテレビクルーによって全世界に放送された。

その中でオロはマスクド共に守られながら、議長席に向かって歩んで行った。

先んじて、オロのクルーが、議長席を拭き清め、カメラクルーがオロを撮る。

「世界の諸君。余がオロ・エバスだ。これで分かったと思うが、余が世界の支配者であり統治者だ。不平を言う輩もいよう。そう言う者はいつでも構わん。我が館に掛かって来るがよい。我がマスクドとバヴェルがそなたたちをいつでも歓迎しよう。差し当っては全世界に対し宣戦布告と行こうじゃないか。先ずはアヘイビアは落とすたわけだし、次はノルブル王国などと言うのは、如何かな？ その後順を追って征服して行こう。これでどうか？ 諸君」

この放送は全世界に流され、忽ち、パニックを起こす事となった。順序の早い遅いはあるけれども、いずれ自分たちの住む国があるバヴェルに蹂躪されると言うのだ。

人々は逃げ場を求めて、パニックになった。

放送が終わり、そっとそばに控えていたティシュラが、

「大変立派で御座いました」

そう言った。

それに対しオロは

「うむ」

そう言ったのみであった。

果たしてこの流血劇はオロの意思なのか、はたまたティシユラの意思なのか……？

ただ、全世界は、バヴェルのその威力に恐怖をたし、オロの言動にも恐怖した。

国元連は臨時の本部をノルブル王国に置き、緊急国元連安保理が開かれた。

その席上で、バヴェルに対する脅威を排除する為に、国元連平和維持軍が組織された。

だがその中に、ノリトレア軍の姿は無かった。

イーハンの軍の姿も無かった。

それもそうで、ノリトレアの軍組織は、イーハンの、政情不安定による暴発の備えとして、軍を割いていたのだ。

自国の軍隊を割ける状態になかったのである。

オロの計算どおりだった。

それは、世間の非難を浴びたが、ノリトレアの国王アルステインは、意に介さなかった。

その代わり、ノリトレアはアシユマ以下若干名をPKFに送り出す事となった。

国元連平和維持軍（PKF）の内訳は以下の通りとなった。

ノルブル王国艦隊。

ドラスティス共和国艦隊。

レボトミノ連邦共和国艦隊。

ノーツ連邦艦隊。

クーロン人民共和国艦隊。

リスパダハル共和国艦隊。

そして国際警察軍艦隊。

以上となった。

国際警察と言えばドグワント・ネルゼイ警部が思い起こされるが、今回はデスクワークを処理する為、出撃するには至らなかった。

それよりかは、ノリトレアの新しい戦闘艇『青龍号』の、お披露目があった。

今回の青龍号はかなりの大所帯を飲み込める。

まず、エンジンであるが大型戦艦にも積める大型の純正魔導石を三機おき、それぞれに六人ずつエンジンスタッフがついて念を込める。

これから発せられる念導フィールドを攻撃に使ってもよいし、航行に使ってもよい。

勿論防御に使っても構わないわけだ。

武装はこれまでのものと比べ物にならないほど強力になった。

それは艦首プラスマキャノン／魔導砲切り替え砲塔がこのサイズの艦艇にしては始めて実装された事である。

勿論、艦のサイズと言うモノがある。

威力も、艦のサイズに比例するわけだが、それでも、魔導砲が撃てるというのは頼もしい限りだ。

その他に可動式のレールキャノンなどお馴染みの装備もそのままで嬉しい限りだ。

また、艦隊の旗艦機能を持たせてあるので電子機器が所狭しと並んでいた。

また、魔導機兵の格納スペースも五機分と増えた。

今回武装の為に犠牲になった部分がある。

居住性だ。特にベッド周りが簡素化された。

防音設備はそのままだがベッドは一回り小さくなった。

その分、個人のブース数を四十人ほどまでに、増やしたわけだが、ガンロクなどは、その巨体さ故に、ベッドブースに入りきらず、

脚をはみ出させて寝ていたが。

さて、その艦隊発進である。

アルステインは発進にあたり、アシュマにこの作戦についてい
く者の人選を任せた。

アシュマは連れて行く者としてオルバニアン、アルミナ、ガンロ
クのみを連れて行くことにした。

すると、アーチエルが割って入り、

「わたくしも連れて行っていただかなければ、アシュマさまの出撃、
許すわけには参りません！」

と、言い出した。

「遊びではないのだぞ？」

そうアシュマが言えば、

「わたくしとて真剣に御座います」

と、言い出す始末だ。

アシュマは少しの間答の後、仕方なくアーチエルは参戦を諦めた。
追記だがサクラコは、一国の家老の娘なので、ノリトレアで保護
をした。

また、サリアナ・タウルも、戦力外と言う事が出撃を見合わせた。

各国の艦隊がノルブル王国、上空に集まっていた。

これからバヴェルへ向けて発進する。

この戦いに敗れば即、死が待っている。

敗れるわけには、行かなかった。

「全艦発進！」

各国の艦隊が次々と出撃していく。

最後の艦が発進した時、空は戦艦で被い尽くされていた。

隠れる所も何も無い、大洋の上で、バヴェルはその動きを止めていた。

地の利を得る為だ。

隠れるモノが無ければ無いほどバヴェルにとって有利に働くからだ。

各国艦隊は、バヴェルの射程ギリギリのところまで、立ち止まった。そこに陣を張ったのだ。

バヴェルを操る、グチとミヤは不審に思った。

グチとミヤは、バヴェルを進行させた。

するとその分、艦隊は後退した。

グチとミヤは更に不信に、思った。

そして、バヴェルを停止させた。

すると、艦隊も停止をした。

その時アシユマはどこに居たか？

彼はバヴェルのはるか上空、地上二十キロメートルにいて、鬼虎にエネルギーを集中させていた。

艦隊とアシユマの動きは連携していたのである。

例の七賢人の月基地を壊滅させたエネルギーの奔流だが今回は月基地を壊滅させるほどのエネルギーを溜めている余裕は無かった。

一瞬で勝負を決めなければ艦隊は全滅の憂き目を見る。

アシユマは一瞬で、高温のプラズマの塊を作り、できるだけエネルギーを高め、そしてそれをバヴェルに投げつけた。

「高熱源体接近！ この熱量は……こちらの念導境界面を突き破るぞ！」

ミヤが叫んだ。

「どこからだ！？」

グチが叫んだ。

「上だ！ コクピット直撃コースだ！」

「重力レンズ起動だ！ 『漆黒の門、裁きの扉』 でかわしてやる」
アシュマの光球は、『漆黒の門、裁きの扉』の中へと吸い込まれてしまった。

それ以後はうんともすんとも言わない。

バヴェルのエネルギーとして吸収されてしまったのだろうか？

バヴェルは数分の停止の後、百八十度回頭をして去って行きかけた。

（今だ！ 勝機は今しかない）

アシュマはそう思いプラズマ光球を作り始めた。

が、オルバニアンの、

『アシュマ、戻ってきてくれ。とりあえず十分だ！』
の一言に出鼻を挫かれた。

「さて、オルバニアン今が勝機だ。今、プラズマ光球を浴びせれば勝てる！」

『駄目だ！ 取り敢えず戻ってくれ！』

「オルバニアン……分かった。これから戻る」

そう言って、アシュマは渋々、青龍号へと戻って行った。

「オルバニアン！ 何故止めた！？」

アシュマは、青龍号に戻ってくるなり、オルバニアンに向けて叫んだ。

「アシュマ。今あそこで、プラズマ光球でバヴェルに勝ったとしよう。しかしバヴェルの破片はどうなる？」

「破片？」

「海上に大量に降り注ぎ、近隣の国家に大津波を引き起こすぜ。ノリトレアでも、例外ではないぜ」

「………済まん。俺が浅はかだった。しかし、どうやってバヴェルを破壊しようと言っただ？」

「わかんねえや。アシュマに、鬼虎の力を解放してもらっ事になるかも知れねえ」

「それは構わんが……」

「今回の艦隊戦で、少しは時間が稼げたはず。帰ってバヴェルに関して検証しようぜ」

「そうだな」

アシユマ達は、一路ノリトレアに帰っていった。

今回この作戦に連携した各国の首脳や、軍の幹部は、今更ながらアシユマ・アトーの恐ろしさに、身を震わせた。

そして今回は、つくづく敵に回らなかった事を喜んだ。

「高温のプラズマ火球に、恐れをなして逃げ帰ってきたと？」

「ザザがミヤとグチに詰問していた。」

「はっ、それが……」

「それが何だ？」

「アシユマの放ったプラズマ火球は、予想よりもはるかに高エネルギーで、一度目の火球は何とか凌いだものの、二度目は防ぎきれなかったのか……」

「貴様は一体何なんだ？」

「は？」

「貴様は一体何なんだと訊いている」

「と申されますと……？」

「パン、パン！」

「ザザはミヤとグチに張り手をかました。」

「貴様らは誇り高きマスケットではなかったのか!? なぜバヴェルを出て、アシユマを直接叩こうと思わなかったッ!？」

「!?!」

「これは真に以って迂闊に御座いました」

「ミヤが自分の迂闊さを恥じた。」

「グチは手を握り拳を震わせていた。」

「二度目は無いぞ? いいな」

「はっ!」

「はっ！」

「真に以ってその通りだ。よくも私に恥を掻かせてくれたな」

オロが階段の上から降りてきて、マスクと共に言葉を浴びせかけた。

「これは、マイ・マスター……」

「なぜ、失敗した？」

「は。アシユマ・アトーの手によって……」

「また、アシユマ・アトーか。何とかならんのか」

「は……」

「ま、仕方あるまい」

「は」

「私はこれから『寝』る。今晚は私の眠りを妨げるな。いいな」

と、言いつつオロはティシユラと共に寢所に向かった。

「ふん！ 傀儡くわいが。一体何を言いだすかと思えば。……精々ティシユラの性技に溺れているがよい」

ロシが吐き棄てた。

「ロシよ、めったな事を言うものではない」

ザザがロシをなだめる。

「壁に耳あり障子に目あり……か？ ザザよ」

「そう言う事だ。ではわれらも寝ることにしよう。主なことは、私とロシで考えておく。よいな？」

「ロシ、アタシと一緒に寝ないかい？」

ラキがロシを誘った。

「いや、俺はザザと寝る。寂しかったら館の者を適当に見繕って寝るが良い」

ロシはザザと共に寢所に向かった。

「あんな牛頭あたまのどこが良いんだい？ けっ！」

ラキは吐き棄てた。

「じゃあ、俺とどうだい？」

ザキがラキを誘った。

「アタシや動物とは相手にしないのさ」

「何だと!? どういう意味だ!?!」

「ははは。悪かったよ。アタシや、今晚のおかずを見繕ってくるよ。あんたらも、そうおし」

ラキはそう言って、その場から消えて行った。

ザザとロシは抱きつ抱かれつした後、一つ褥に入っていた。

そしてこれからの方針を決めるべく、検討し始めた。

「マスターは余程、アルステインなる者の存在が、気になるようだ。ザザよ」

「そのようだ。そんなに目障りならば一つ所にいて貰おうではないか。ロシよ」

「いよいよあの、カードを切るのか」

「そうだ。イーハンと言うカードを」

ザザは不敵にもそういった。

「アシユマはどうする?」

「なに、我らマスクドが出張ればよいではないか。それが本来の役目と言うもの。なあ、ザザよ」

「そうであったな。布陣はどうする?」

「ザザ、我ら全員でアシユマを攻めようではないか? 我らでアシユマを処理するのだ」

「大丈夫か? ロシよ。この間は後れをとったそうじゃないか?」

「あれは、油断があったせいよ。今度は違う。アシユマを最大級の敵として迎え撃つ」

「そうか? それならよいが。最愛のものを亡くすのは心苦しいだな」

「嬉しい事を言ってくれる。ザザよ」

「ロシ……」

また二人は床の中で蠢き始めた。

その夜、イーハン軍事政権は、ノリトレアに宣戦布告をした。
ノリトレアにとつて、最悪のシナリオである。

これで、アルステイーンは動く事が出来なくなつた。
これにバヴェルの侵攻が重なると眼も当てられない。

「まいった……………」

これが、アルステイーンの、正直な感想だつた。

「これが敵の思惑なんでしょうなあ」

再びアルステイーンは、漏らした。

「その思惑に乗るのかよ？」

オルバニアンが言う。

「私は国民を守る義務と言うモノがありますからねえ。仕方ありません」

「気にするな。今度はわらわ達が何とかしてこよう！」

キュポアがどんと胸を叩いた。

「わらわつて…………… 出撃するんですか？」

ハルマが訊いた。

「勿論じゃ」

「だめだ！」

アシユマが言った。

「駄目とはなんじゃ！ 生きるも死ぬも、われらは一つではなかつたのか？」

「うっ……………」

アシユマの言葉が詰まつた。

「そうです。アシユマさま。わたくしたちは一心同体です！ いつでも一緒に無ければ嫌です！」

アーチエルが叫んだ。

「そつだぜアシユマ。ここまで来たら一蓮托生。命はお前に預けるぜ」

オルバニアンが締めた。

その夜、アシユマは、ノリトレアの王宮の床の中で悩んでいた。あのプラズマ火球を見た以上、マスクドたちは先ず、アシユマを狙ってくるだろう。

それも近い将来にだ。

それは良い。

それは良いが、果たして、全ての数の敵を、こなしきれんだろうか？

敵は恐らく総力を結集してやってくるだろう。

それに引き換えこちらの手駒は、まず、オルバニアンにアルミナ。それにガンロク。

ここまでは順当だろう。

しかし、果たして彼らマスクド達に、オルバニアン等の攻撃が通用するのか？

強力な念導境界面を持つ彼らに対してそれは、甚だ疑問視するしかない。

オルバニアンたちには悪いが。

ここで、アーチエルが眼を覚ましアシユマに声を掛けてきた。

「旦那さま？ まだお悩みですか？ 皆で行くと決心したではありませんか。さあ、今日はもう寝て明日以降に備えましょう？」

アーチエルがアシユマを軽くなだめる。

「それとも私が手駒の内では役不足ですか？」

アーチエルが悪戯っぽく、続けて言う。

「アーチエルは俺の大事な大事な妻だから、手駒にしたくは無いのさ」

「まあ、アシユマさま……アーチエルは嬉しく存じます」

アーチエルはアシユマに身体を摺り寄せた。

「こちら。アーチエル」

「いかが致しました？ 悩んでいないでもう寝ましょ？」
「……そうするか」
アシユマは釈然としないものを感じながらも、寝ることにした。
だが、今ここには、アーチエルと言う、温かい存在がいる。
その晩、アシユマはアーチエルを抱いて、寝た。

ノリトレアの王宮で、各々にあてがわれた部屋で、ハルマは窓から見える月を眺めていた。

愛しいキュポアも、同じ月を眺めているだろうか？

そんな事を考えていた。

その時、トントンと軽くノックする音が聞こえてきた。

「どなたですか？」

ハルマは尋ねる。

「わ、わらわじゃ」

「キュ、キュポアさん!？」

「早く、あけてたも。人が来る」

「は、はい」

ハルマは慌ててドアを開き、キュポアを招き入れた。

「どうしたんですか？ こんな夜更けに？」

「ははは。……話がしたかったのじゃ」

「話？ 話なら明日、出来るじゃないですか？ 何で今頃？」

「その、明日があるかどうか、分からないから、今、来たのではないか」

「あ……」

「思い出が……思い出が欲しいのじゃ」

「!」

ハルマはキュポアの言わんとするところが分かった。

キュポアはハルマに抱かれに来たのだ。

「……わらわの我儘じゃ。嫌だったら捨て置いて欲しい……」

かといって、今だ、この年齢。
未成年である。

抱くわけにはいかなかった。

「キュポアさん。貴女の想いは痛いほど分かります。ですが、そんな刹那的で宜しいのでしょうか？ 私達は自分たちの未来の為、全力を尽くすべきではないでしょうか？ キュポアさん、思い出が欲しいのは分かります。僕とても同じ気持ちです。が、今ここでその想いに耽るわけには……」

「わかった。みなまで言うな。もうハルマよ。わらわが思い違いをしていたようだ。良くぞ言ってくれた。流石はわらわのハルマじゃ。思い出作りはまたにする。じゃがこれだけは許せよ」

キュポアはハルマの頬にキスをした。

「では、戻る」

「はい」

そうハルマは言った。

ハルマは、心の中に何か温かい物を、感じていた。

アンはとある部屋の前に来ていた。

アシユマの部屋かと思ったが、そうではなかった。

なんとガンロクの部屋の前に来ていたのだ。

アンはドアをノックしようかどうか迷っていた。

やはり自室に戻ろうかと思った時に、部屋の中からガンロクの

「アンさんか？」

そう言う声が聞こえてきた。

ガンロクは気配だけで、誰が部屋の外に佇んでいるかを判別した。アンは驚きうるたえたが、

「え、ええ」

と、辛うじて答えた。

「アンさん。人が来ると噂になるだ。帰ったほうがイイだよ」

とガンロクがそう言った。

「……………」

「……アンさん？」

「……死なないで下さい……………」

「……アンさん？」

「……………それだけです。こんな夜更けに御免なさい」

アンは小走りにガンロクの部屋の前から去った。

「アンさん……………」

ガンロクはアンの言葉に戸惑いを覚えた。

(アンさん……………。一体どういうつもりで……………)

今のガンロクには分かるまい。

これが女の意地と言う物かもしれなかった。

そしてマスクドたちが再びノリトレアの地を踏んだ。

今度はマルル広場に陣を広げた。

その上、更にアシュマを名指しし、その到着を待った。

アシュマは皆に先行し、マスクドが待ち受けるマルル広場に舞い降りた。

「待っていたぞ。アシュマ・アトー。さて勝負だ」

「ザザはそう言った。」

「勝負？　ただ俺と勝負する為にここに来たのか？」

「元よりそのつもりだが？　尤もお前を倒した後は、アルステインに、死んでもらうかな」

「そう簡単に行くかな？」

「そうは思っていない。が全力でいかしてもらおう」

「ならば俺も全力で戦うでしょう」

アシュマは鬼虎をゆっくり振り抜いて下段に構えた。

「誰も手出しはするな」

「ザザはそう言ってその槌を右の車に構えた。」

二人はじりじりと間合いを詰めて行った。

そして一足一刀の間合いまで来て、二人は間合いを詰めるのを中断した。

その頃になってやっと、アーチエル達が到着した。

アーチエル達は、アシユマとザザが睨み合いになっていることに気が付いた。

オルバニアンは、それが二人の生死の間仕切りの境を斬ると、分かっていたながらも、敢えて、

「アシユマ！ 助勢するぜ」

そう言い、逸鉄を構えた。

だが、アシユマは、

「助太刀無用！」

と、言い放った。

勿論ザザはこのやり取りを好機と捉え、生死の間仕切りを切つて来た。

そして槌を車輪に回してきた。

アシユマはその槌を紙一重でかわし、下段からザザの小手を斬りに行った。

「甘い！」

ザザはアシユマの刀をかわした。

アシユマは上へ流れた刀を反転し、もう一步踏み込み上段からの攻撃を送ってきた。

それはザザの肩口を狙った、計算された攻撃だった。

アシユマの剣は肩口に直撃した。

が、それは火花を散らし、ザザの念導境界面で弾かれてしまった。

「甘かったな」

ザザは槌を振り替えしアシユマを狙ってきた。

ザザの攻撃は大振りで、アシユマにとってはその攻撃は読みやすいものだった。

アシユマはザザの攻撃を難なく避けた。

そして素早く納刀し、

「秘剣、流星」

と、ぼそりと言い、抜刀の体勢を取った。

「またもや、その技で来るか。ならば我は相抜けで、行かさせてもらおう」

「そう簡単に相抜け出きるかな？ 流星は相手に太刀筋を読ませない技であるのと同時に、相手の太刀筋を読む技でもある。貴様の太刀筋は見切った。恐れるものは最早何も無い」

「なに？」

「試してみるか？」

「無論だ。そんなはずは無い」

ザザはこれまでに無いほどの速度で槌を振り下ろしてきた。

それは渾身の一撃だった。

アシユマも踏み込み抜刀した。

鬼虎はザザの胸を狙い、そして存分に薙いだ。

今度は火花を散らし鬼虎がザザの念導境界面を食い破ってザザの胸を斬り裂いた。

「うおっ！」

ザザは呻いてよろよろと前のめりに倒れかけた。

「『牛槌鬼』よ、汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し……」

この時、ザザは後ろの首筋に衝撃を覚える。

それは刀による斬撃だった。

首を半分切り裂かれても尚こちらを振り向きザザは衝撃を覚えた。

なんと、自分の首を斬り裂いたのは最愛の男、ロシではないか。

「う……う……」

最早呻く事しかできないザザに対してロシがはいた言葉は

「ザザ。あんたのやり方は、ちまちまして、見てられん」

と、にべも、ないものだった。

ロシはそのまま首をねじ斬り、ザザの頭をアシユマの前に転がした。

「今まで敵として一目置いていたが、その言動許せぬモノがある！
！」

「ならばどうする？ 鬼を持つ者よ」

「しれた事！ お前を倒して武人ザザへの弔いとする」

「愚かな。いくぞ皆の者。数に頼んで畳んでしまえ！」

「アシュマ。今度こそ助勢するぜ？ 駄目だって言っても聞かねえ
からな」

オルバニアンが言った。

「好きにしろ。援護は出来んぞ？」

「覚悟のうえだい」

「あら？ アタシもよ？」

アルミナが言う。

「あら？ わたくしも旦那さまの助勢を致しますわ」

アーチエルが言う。

そして

「わらわもいるぞ」

キュポアがいい、

「魔法なら任せてください」

ハルマが言う。

「最強召喚術ならお任せ下さい」

レンヌが言い

「私達はひよこ達を出すわ」

ミカとリイナが言い、

「後衛は任せろ」

ジークが言い、ガンロクもそれに習って頷いていた。

そして、

「アタシはそう簡単にやられはしないよ」

エスタは言い、

「皆さんに恨みはありませんが、これも運命。堪忍してください」
ハヤは言った。

「どうだ？ ロシ。これだけの粒ぞろいの人間がいるんだ。大人しく諦めて首を差し出すんだな」

「粒ぞろいだと？ 烏合の衆の間違いじゃないのか？」

そう言ってる間にロシは不思議な事をしていた。

自分の武器にザザの槌を吸収……そう、正に吸収していたのだ

「アンプリファイ！」

ミカを中心にアーチェル、キュポア、リイナがダイヤモンドシフトを敷き魔力増幅魔法アンプリファイを唱えようとしていた。

「我は貝殻。耳を傾けよ 潮騒の音がする

我は貝殻。耳を傾けよ 遠い異国の音がする

我は貝殻。眼を見張れ 美しき紅の色

我は貝殻。眼を見張れ 我は螺鈿になるものなり

我、今此処に汝を大きくせしめん

アンプリファイ！！」

一瞬法螺貝のイメージが浮かび上がりアンプリファイが効いた事を示した。

そして、

「びよびよびよ。

僕リトルチキン。

可愛い？ 可愛い？

可愛いって言わなきゃいじけるぞー

いじけるぞーいじけるぞー

それでもほっといたらふえてやるー

リトルチキン！！」

お得意のリトルチキンを召喚した。

このリトルチキン、ダメージを受けると二つ三つと分裂する。

また、大量に召喚する為、相手は身動きが取れなくなる。
事実、ザキなどは、

「また、その召喚魔法か！」
と、憤っていた。

しかし敵もさる者、ザキが、

「来たれ悪鬼よ鬼神の如く

その手に心臓掴み取り

血の渴きを癒さん為に

敵の血頭杯呑み乾さん

血肉を食らい飢え満たせ

出でよ悪鬼

ゴブリン！」

ゴブリンを召喚した。

しかしアシュマはリトルチキンの援護(?)を受けて、ロシに一
気に迫らんとした。

そして抜刀一閃ゴブリンどもを斬り伏せロシの目の前に来た。

が、一人孤立するアシュマの前に、ミヤとグチ、そしてラキが立
ちはだかった。

「俺の前に立ちはだかるか！ 今の俺は機嫌が悪い。死にたく無く
ばそこをどけっ！」

アシュマは言い放った。

一方目を転じてみれば、ハルマがサンダーラストライクでゴブリン
共を焼き払い、レンヌは召喚へブズソードで血飛沫を上げている。

アルミナやオルバニアンは大剣でゴブリン共を肉塊にして行った。

アシュマは獅子奮迅の働きでゴブリン共を斬り裂いていたが、中
々ロシに近づけなくて焦りを覚えていた。

そこへ、アシュマの両脇にハヤとエスタが付いた。

ハヤは、

「アシユマの敵にならなくて良かった」

そう言い、エスタは

「アシユマ様の備えになれて本望」

そう言った。

「お前たち……油断はするな。敵の備えは堅牢だぞ」

エスタは、

「死ぬ前に言っておきたい。私の本名はユキ・ワナックス。貴方には知っておいて貰いたかった」

「不吉な事を言うな。来るぞ！」

やって来たのは召喚魔法を詠唱中のはずのザキだった。

「私達が露払いをするわ。アシユマはロシを狙って！」

そうハヤが言った。

「分かった」

アシユマがロシへと、突進する。

その前にラキたちが立ちはだかる。

更に露払いとしてユキとハヤ、続いて

「待たせたな。アシユマ！」

オルバニアンらがやって来た。

その時、剣を合わせる、ハヤとラキ。

「いい加減眼を覚ましな。あんな男にのぼせ上がって。アイツはアタイたちの獲物なんだよ!？」

「姉さんこそ眼を覚まして。ロシはザザをも殺して権力を握ろうとする卑劣漢なのよ？」

「それでも、そこにいるアシユマよりはましだねえ」

ラキは言い放った。

「姉さん！」

二人は剣と鎌をを一合二合と合わせた。

二人の腕は互角かに見えた。

しかし、ラキの鉄球がハヤを襲う。

「あうっ！」

ラキの鉄球はハヤの腹部に当たり、ハヤは吹き飛ばされた。

ラキは右手の鎌をハヤの首筋へと狙ってきた。

「ああっ！」

ハヤはもう駄目かと悲鳴を上げた。

ラキがハヤに馬乗りになる。

しかし、そこに何かが閃いて、ラキの首と胴を両断した。

アシユマの鬼虎だ。

アシユマが後ろからラキの首を落としたのだ。

「あ……」

ハヤは間一髪の所で命を拾った。

「卑怯だとも、お前の姉殺しだとも、罵ってくれて構わん。だが、

ああでもしなければ、お前が殺られていた」

アシユマは言い訳をした。

「誰が罵るものですか。命拾いをしました」

ハヤが言った。

「そう言ってもらえると、助かる」

アシユマが応える。

「姉さん……」

ハヤは何かしら感慨深げだったが、アシユマの

「まだ来るぞ。油断をするな」

の一声で我に返った。

その時、ラキの武器がロシの手元に飛んで行って、またもやロシの武器に吸収された。

ハルマ達は苦戦していた。

ゴブリン達にである。

そしてその数にである。

サンダーストライクでゴブリンを焼きまくるが、後から後から湧いてくるようでキリが無かった。

「ええい。全くキリが無い！」

ハルマは切れかけていた。

「ハルマ！ 焦るでない！ わらわ達もおる！」

キュポアが叫んだ。

「ミカ！ サイクロンスラツシャーじゃ！」

「分かったわ。みんな、さがって！」

ミカは皆に注意を促した。

そして、

「風切る翼、銀翼よ。

気高き心、天かける。

汝に問おうその心

風切る翼、剣とならん

サイクロンスラツシャー！！」

呪文を唱えた。

アンプリファイで増幅された呪文は、無数の鎌いたちとなり効率よくゴブリン共を斬り刻んで行った。

「皆で戦うのじゃ。一人で先走るでない！」

「キュポア……はい。分かりました」

その時キュポアたちの死角を衝いてゴブリン共が襲い掛かった。

「！ きゃあつー！！」

キュポアたちが悲鳴を上げた。

「アンサラー、デュランダル！ ディフェンダー！」

レンヌのヘブンスソードを操る呪文が聞こえて来た。

すぐさま『デュランダル』と『ディフェンダー』がゴブリンの群れを斬り刻んだ。

「レンヌ……」

リイナが甘い吐息を吐きつつレンヌの名を呼んだ。

「皆で戦うのでしたね」

レンヌが言った。

「……そうよ。その通りよ」

リイナがそう答えた。

眼を転じると、中には魔法の耐性が出来ていて主に肉弾戦中心と
いった感じの大型のゴブリンがいた。

そういうモノには、ガンロクがあたった。

そのゴブリンは、手に刃の部分だけで二メートルはあろうかと言
う、幅広のツヴァイハンダーを持ち、ガンロクとにらみ合いを続け
た。

そのゴブリンは不意に動きガンロクの意表をついた。

ゴブリンは八双からの撃ち下ろしを、ガンロクの頭上に見舞って
きた。

ガンロクは咄嗟に頭上で鉈を交差させて剣を受け止めた。

ゴブリンは力に任せてガンロクを押し潰そうとした。

はじめ、体勢はゴブリンが力押しして優勢だった。

ガンロクの脳裏にアンの笑顔が浮かぶ。

ここでやられるわけには行かない。

ガンロクはそう思い、渾身の力を込めた。

「グググググウ!?」

「ふうううっ!!」

何とガンロクは力に対して力で体勢をひっくり返してしまった。

そしてそこからが力だけではない、技のガンロクの一面を見せた。

右腕の大鉈で相手の剣を抑えつつ左腕の大鉈でゴブリンの胸を鎧

ごと斬り裂き、そのままゴブリンの体を右腕の鉈を傾いでいなし、

背後に回って、振り向いた所を頭頂から鳩尾までを真っ向唐竹割り

に斬り裂いた。

「ふうーっ！」

ガンロクは一息ついた。

「ガンロクさん！ 後ろ！」

アーチエルが叫んだ。

ガンロクの後ろには二丁三匹のゴブリンが今にも襲い掛かろうとしていた。

が、ガンロクは後ろも見ずに、大鉈を振り回しゴブリン共を斬り裂いた。

「流石はガンロクさん」

キユポアが褒めた。

「いや、油断したべ。さて……」

ガンロクは、そのままゴブリン共を狩りに行った。

一方『エスタ』のユキは、ザキと刃を交えていた。

ユキは守勢一方で分が悪かった。

このままではまずい。

そう思ったユキはある一つの結論に達した。

それは相抜けである。

自分の命を賭して相手の命を貰い受ける、兵法の極意の一つである。

ザキが剣を袈裟に落としてくる。

ユキはその瞬間を待った。

相抜けするその瞬間を。

が、

「馬鹿な真似はよせ！」

アシユマに止められた。

どうやらアシユマには、自分が何をしようとしていたか、看破されたらしい。

無論、ザキの剣はアシユマが受け止めた。

「どれ、マスケドの実力とやらを拝ませてもらおうか」

「その口ぶり、我を侮るか。我を侮るとは許せん」

「ならばどうする？」

「その罪、万死に値する。死するがよい！」

アシユマとザキは会話を交わした。

アシユマとザキは罅迫り合いをし、力は拮抗しているかに見えた。その脇からユキがザキの首を狙った。

が、ザキの念導境界面により刀は弾かれてしまった。

これがあるからアシユマは、

『馬鹿な真似はよせ』

ユキに言ったのだ。

「無理せず、ゴブリンどもを蹴散らしてくれ！」

アシユマはユキにそう言った。

「分かった。そうさせてもらう」

ユキはゴブリン共を蹴散らし始めた。

アシユマとザキは罅迫り合いを続けていたが、それをアシユマが鬼虎を斜めに傾いでザキをいなした。

ザキはたたらを踏み二、三步よろよると歩を進めた。

そこへアシユマがザキの背中へ袈裟に刀を送り込んできた。

アシユマの鬼虎は火花を散らし見事ザキの背中を斬り割った。

「ぐわっ！」

ザキは叫び声をあげてこちらを振り向いた。

そして、

「『犬牙鬼』よ、汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力を以って汝の主を癒すべし」

ザキのその言葉と共にザキはその傷口が塞がれた。

「矢張り首と身体を斬り離さなければだめか」

アシユマはそう呟いた。

「油断したか。今度はそうは行かんぞ」

ザキはそう言い刀を構えなおした。

「油断だと思っっているのか？」

「それ以外に何かがある？ 我はマスクド。誰にも負けはしない」

「ならば試しているか？」

「何？」

アシユマは殺気を放った。

ザキはその本能に従って、身体が動かなくなった。

恐怖しているのだ。

「馬鹿な。何故動かん。この我が、恐怖しているというのか？」

「そうだ。ザキと言ったな。お前に待っているのは死のみ」

アシユマは刀を下段に付けた。

「秘剣、流星」

アシユマはぼそりと呟いた。

「流星の真髄は無限の太刀筋を匂わせること。最早お前に、我が太刀筋を、見切ることは出来ぬ」

ザキはそのお言葉通り、無限に見えるアシユマの太刀筋に、迷い戸惑った。

ザキは、静かに佇むアシユマの振る舞いに恐怖し、とつとつ耐え切れず自らアシユマに斬り付けた。

アシユマはザキの刃を掻い潜り、火花を散らしながらザキの胴を抜いた。

そして後ろにまわり込み、今度は首を刎ねた。

ザキが死んだ。

すると、ザキの手から剣が離れ、遠くロシの手元へと飛んで行った。

それから、召喚されていたゴブリンたちが消えて行った。

ロシはいつの間にか、アシユマ達より遠く陣取っていたが、分が悪くなったロシ達は、

「これは形勢が悪い。ここは一度引くぞ、グチ、ミヤ！」

そう言った。

「さて、逃げるか！」

アシユマが言ったが、ロシ達は地上から浮き上がり、引く気配を見せた。

「逃げるとは、人聞きが悪い事を言う。いったん引くだけだ。次は無いと思え。アシユマ・アトー！」

ロシはそう言いながら、自分の武器にザキの武器を吸収させていた。

アシユマはロシを追おうとしたが、

「深追いは止めた方が良い」

ハヤが止めた。

「ロシよ覚えておけ。次が無いのはお前のほうだと」

「ははは。果たしてそうかな？」

そう言いながらロシ達は、飛んで行って消えてしまった。

アシユマ達は、事の一部始終をアルステインに報告した。

「そうですか。マスクドのザザが死にましたか」

アルステインがなにやら感慨深げに言った。

「その他には私の姉……ラキが死亡しました。後はザキと言うマスクドが死亡しました」

ハヤが言った。

「これで、マスクド達の人数は、半減したという事ですね」

「……はい」

「これからも襲ってくると思いますか？」

「分かりません。ただ、ロシと言う男は狡猾で、何を考えているか、分からない所が在りますので……」

ハヤがそう言う。

「そうですか。油断はなりませんね……」

アルステインは自分が狙われている事も忘れて、他人事のように言った。

「それよりもアルステイン、イーハンの方はどうなったんだよ？」

オルバニアンが尋ねる。

「イーハンとは既に戦端が開かれています。先ず敵はイルドリアの港を押さえるつもりの方です」

アルステインは答える。

「戦況はどうなんですか？」

「今のところは五分と言った所でしょうか」

「応援に行こうか？」

「いえ、今のところは大丈夫でしょう。それよりも半減したとはいえ、マスケットの動きが気になります。バヴェルも敵の手中にあることですし……当面はそちらの方を優先して下さい」

「分かったぜ」

「でも、敵の手中にバヴェルがあるというのは、心が晴れ晴れとせんな」

キュポアはぼそりと呟いた。

「仕方ありませんよ。それより大事なものはこれからどうするかです」
ハルマが言う。

「どうするかと言われてもハルマよ、この一件、怪獣がいなければどうにもならんぞ」

言ってキュポアは、ハルマのほうを振り返った。

ハルマはいつも通りの優しい笑顔をキュポアに投げかけていた。

キュポアは、先日の事が思い出され、思い切り照れた。

そして、下を向いてしまった。

「どうかしましたか？ キュポアさん」

「な・何でもないわい」

「キュポアさん？」

「何でもないったら！」

キュポアは益々照れて、耳まで真っ赤にして俯いてしまった。

「エスタの整備でもしとこうぜ……っつと、言ってもエスタさんのことじゃないぜ。……っつと、ユキさんだったっけな。ややこしくなるぜ」

オルバニアンは言った。

「でも、ユキ・ワナックスといえば、確かイーハンの武芸師範だったはず。なら、サリアナさんも身分を偽っている可能性が……」

アルミナが言った。

「さてよ、伏せといてやろうぜ。今、イーハンは政情不安定だ。ここで、サリアナさんの正体がばれでもしたら、立場どころか、命の危機に、晒されることにもなりかねないぜ。まあ、どんな正体かは分からないけどよ」

「オルバニアン殿、忝い」

サリアナは感謝の意を述べた。

「ただ、待っているのも芸がありませんねえ。爺、少々危険ですがオロの動向が知りたいです。ちよつと行って来てくれませんか？」

アルステインが攻めの言葉を吐く。

「畏まって候。ムラサキ、行くぞ」

「はい、お爺殿」

オロは、バヴェルを二機も発掘したにも拘らず、未だにビートバ
ーンス諸島では発掘作業が行われていた。

それは、ティシユラ・アマンガムのオロへの進言により行われていた事だった。

そこへ、ロシが発掘現場の司令所に帰還を果たす。

「マイマスター。ただ今戻りました」

「ロシではないか？ ザザはどうした？ それに他に二名ほど足りないようだが？」

「は。それが、アシュマ・アトーの手によって……」

「又してもアシュマ・アトーか。あやつはどこまで余の前に立ちはだかるのか？ 忌々しい奴。何とかならんか？ ロシよ」

「は。必ずしやアシュマ・アトーの首を上げて見せます」

「次は無いと思え。ロシよ」

「は」

「もうよい。帰って休め」

「は」

ロシはオロの前から姿を消した。

「ふん。マスケドといえどもアシユマの前では、ただの木偶でしかないのか？」

「御意」

そう答えたのは、ティシユラだった。

「我が意にそえる者は、そなたしかおらん。ティシユラよ」

「有難う存じます。オロ様」

「ところで余は一体何を発掘しておるのだ？」

「無限の知恵で御座います。オロ様」

「無限の力の次は、無限の知恵か……面白い！」

「オロも意外と単純な男よ」

ロシはサイコ・フライヤーの中でそう言った。

オロの屋敷に帰るのだ。

「御意に」

グチが言った。

「我らの意の中にあるとも知らずに……」

それは、コイ島のとある場所から発見された。

何かの箱状のもので、見た目では何の金属か解らない素材で出来ていて、箱は長さ百三十センチメートル、奥行きと高さがそれぞれ八十センチメートル。

装飾が施され地面に直接触れないよう、箱の下部四隅に脚が付けられてあった。

持ち運びの際、箱に手を触れないよう二本の棒が取り付けられ、

これら全てが何かの金属で覆われていた。

「これが無限の知識か……」

まだ、泥のついたその箱にオロは手を触れようとした。

「いけません！ オロ様！」

ティシユラが大声を上げて静止する。

「？ なに？ 手を触れてはならぬというか？」

「はい。危険に御座います」

「どのように危険か」

「感電いたしまする」

「それでは運べぬではないか？ いかが致す」

「棒を通して運びまする」

オロが発掘したもの。

それは、アシユマが破壊したはずの『聖櫃』によく似た箱だった。

これは一体何なのか……？

それに何故、ティシユラが『聖櫃』に直接振れる事の危険性を、

知っていたのか？

「これで全ては整いました。我が主よ、貴方が目指すものは世界の

王に御座います」

側に仕えていたウグラ・ハンがそう進言した。

「なに、世界の王とな」

「はい。今直ぐ、全軍を率いて進軍されるべし」

「進軍か……。相分かった。すぐさま進軍しよう。さてどこから進

軍いたすか……」

「当面は、ノルブル王国等を攻めては、如何でしょうか？」

「うむ。よきに計らえ」

（あれではどちらが主か分からないわ。軍師にいいように使われているだけじゃない。ねえ、お爺様じいちゃん）

（うむ。これは裏があるな。あの者供の身元を洗う必要がありそうじゃ）

物陰に潜んでいたアベニとムラサキがそう言葉を交わした。

第三節 蹂躪のバヴェル

「ウグラ……ハン……か」

アルステインは呟くようにその名を呼んだ。

「確か三年前のイルドリアの武芸大会での優勝者だったよね？ アシユマ君」

「そのように記憶しているが？」

アシユマがそう言う。

「意外とポピュラーな人だったのね？」

ムラサキが言う。

「だが、それ以外の事は全くの謎だ。何も知られていないのと同じ」

アシユマはそう切り替えた。

「それにティシュラ・アマンガムなる人物、こちらは本当に全くの謎だ」

「そうね。美人だし」

ムラサキが言った。

「見た様子では、オロはその二人に、上手く操られているように見え申した」

言ったのはアベニ爺だった。

「この二人がキーマンね」

ムラサキがそう断じる。

「それで御座るな……引き続き調べてみるで御座るよ。行くぞムラサキ！」

「お爺様、少し休みましょうよ。帰ってきたばかりではありませんか？」

「これだから、最近の若いもんは。多少の事で音を上げるでない」

「まあ、爺。身体が疲れていてはまともに働く事も敵わぬであろう」
アルステインがそう取り成す。

「若、甘やかされては困り申す」

「流石は、アルステイン様！」

「これ！ お前などが、気安く口を利けるお人などでは、ないのだぞ！」

アベニがムラサキを叱る。

「ははっ！」

ムラサキは平伏したが、

「まあよい。まあよい。その姿勢では辛かろう。楽にせよ」

アルステインに言われ、ムラサキはその場に胡坐をかいた。

「これ！」

アベニは言ったがもう遅い。

腰から根が生えたようにムラサキは胡坐を堪能していた。

「そういえば、奴らは何やら箱の様な物を発掘して喜んでいました」
ムラサキが言った。

「……箱？」

アシュマが訊く。

「はい。箱です。金属製のこれくらいの大さの……無限の知識を得るとも、直接触れると危険とも言っていました」

「……聖櫃か？」

「聖櫃？ かみひと 神人の？」

アルステインがアシュマに訊いた。

「ああ。そう思う」

アシュマはそう言った。

「休みを取ったら、急ぎオ口の元へ戻ってくれ。一刻も早く、彼ら二人が何を考えているかを掴みたい。また、その『箱』の事も気になる。頼む」

アルステインは一介の『草』に対して頭を垂れた。

「若！ そんな事をなされては……！」

「良いのだ。爺よ。その代わり生きて戻ってくるのだぞ。良いな？」

「ははあっ……！」

「いつもは、おチャラけ大王なのに、今日は妙に湿っぽくて、どうしちゃったのよ？ ヨデイ？ それともいつもの人を乗せる演出なのかしら？」

后、エファールはそう言って主のアルステインを見た。

「どちらなのか、ない交ぜになって判別できません」

「そう。優しいものね。貴方は」

エファールが言った。

「分かりませんよ？ 部下の命を顧みない冷血漢かもしれませんよ？ 僕は」

「貴方はそんな人じゃないわ。それは私が一番よく知っているわ」

「ふう。貴女には敵いませんね」

アルステインは言った。

そう言い二人は一つ褥に入った。

「では、発進だ」

オロが全軍に指令を出す。

バヴェルを中心に陣が布かれ進軍が開始された。

行き先は……

「ノルブル王国だ。そこに陣を布いているPKFを蹴散らしてくれよう」

オロは言い切った。

オロはそれをわざわざ放送した。

ノルブル王国ではパニックに襲われていた。

アヘイビアの艦隊を蹴散らし首都ガーファを蹂躪した、あのバヴェルがこちらに向かって来るのである。

ノルブル王国では我先にと人々が首都ロードルブツギから逃げ始めた。

ロシは

「では、わたくしは留守をお守りしましょう」
そう言った。

「うむ。そうしてくれ」

オロはそう言った。

PKFは迎撃体勢を取った。

今回、アシュマら、ノリトレアの面々は、戦闘に関しては、微妙な立場だった。

良い攻撃方法が見つからなかったからだ。

プラズマ攻撃は、地上に被害が出る。

鬼虎の力を解放すれば、どういう被害が出るか分からない。
手詰まりだった……。

オロは自前のサイコ・フライヤーに乗り、バヴェルを伴いノルブル王国に迫った。

もちろんこのサイコ・フライヤーにも旗艦としての装備が整っていた。

ノルブル王国は更にパニック状態に陥り、人々は逃げる所はどこにも無いというのに、右往左往とするばかりだった。

オロの目前にはPKF艦隊がいる。

向うの射程は、まだこちらに届かないはずである。

こちらには六百六十六基のビーム群がある。

それだけでも特筆すべき装備だった。

なにせ威力は魔導砲並み、射程はこちらのほうが長いときている。オロは気だるそうに右手を上げて、そして下ろした。

それが攻撃の合図だった。

始まる大虐殺。

正になぶり殺しだった。

相手は攻撃の手段すら持たないのだ。

そこへ、アシユマ達が乗る青龍号がやって来た。

「ひどい。何もここまでやら無くても……」

アーチェルは口に手をあて涙を流し始めた。

「一つ出来る事があるかもしれない」

アシユマはゴンドラから身を乗り出した。

アシユマは六百六十六億のビーム砲群を思い浮かべた。

バヴェルはイメージスキャナで制御している物。

いわばその武器の細部に至るまで、操縦者の気が張り巡らされている。

アシユマはその気を辿って攻撃しようというのである。

ゆっくりと気を練った。

念の力場を最高潮に高めた。

鬼虎の鯉口からエネルギーが溢れ出た。

「む？」

異変を感じたのはウグラ・ハンだった。

「百八十度回頭！ 全力でこの空域から離脱する！ 逃げ！」

「どうした？ ハンよ？ 何かあったのか？」

「は。気の奔流がやってきます。それも、とてつもない量の気の流れです！」

「アシユマ・アトーか？」

「恐らくは……どうした！？ 離脱逃げよ！」

その時、背後に巨大な閃光が走った。

アシユマ・アトーの秘剣、蛭である。

威力は桁違いだが……。

蛭は見事に、バヴェルの念導境界面を破り、六百六十六基のビーム砲群を破壊した。

バヴェルはもうもうと、煙を上げた。

だが、何事も無かったようにけるつとしている。

各部修復機能が働いて、元通りとは行かないまでも、航行に支障はきたさない程度にまで回復していた。

ただし、構造の複雑な、ビーム砲までは修復できなかった。

一方のアシユマは疲労困憊の体をなしていた。

「化け物か？」

アシユマをして、バヴェルを、そう言わしめていた。

「何言ってるんだい！ 一度は奴と戦って、勝っているんだろ？」

アルミナが叱咤激励を送った。

「……そうだったな」

言ってアシユマは立ち上がった。

側にアーチエルが寄り添う。

「兎に角いったんここは退いたほうが良いな。他の国の艦隊もそうしている」

「どこに退いているんだ？」

「まって……ドラスティス共和国まで退くみたいよ」

アルミナが聞き取った。

「ノルブル王国は見放されたのじゃなあ」

キュポアが意味深に、そして感慨深げに言う。

「まだまだ、バヴェルにはプラズマ放電もあれば、『漆黒の門、裁きの扉』もありますしね」

ハルマが言った。

「結局の所、ノルブル王国は、降伏せざるを得まい」

キュポアが断じた。

アシユマ達も、ドラスティス共和国にまで、退くしかなかった。

オロは気だるそうに、再びロードルブリギに進軍を合図した

ノルブル王国に上陸したバヴェルは、プラズマ放電で辺りを焼き

払い、蹴散らしながら首都ロードルブリギを目指した。

バヴェルの通った後は、正に読んで字の如く、正に草木が一本も生えていなかったと言う。

これでは、虐殺だと各国は非難したが、オロには梨の礫だった。

首都ロードルブリギに来た時、バヴェルは『漆黒の門、裁きの扉』を使用してロードルブリギを正に更地にしてしまった。

首都機能を失ったノルブル王国に、オロの帝国は無条件降伏を提示した。

ノルブル王国はそれを、泣く泣く呑んだ。

ロードルブリギの跡地を眺めながら、オロはいった。

「この地に我が別宅を建てるのも悪くないな」

そういつたと言う。

「はい……」

ティシユラはオロに従った。

PKFの軍事作戦本部にアシユマ達が招待されていた。
オブザーバーとしての待遇だが、要はアシユマの鬼虎目当てだった。

「ミスター・アト……オントラの威力だが……」

「ミスター・アト……オントラの防御力は……」

「ミスター・アト……貴方は一度バヴェルを破壊しているがらしいが今回はどうか？」

まるで、アシユマの事を当てにしているのが見え見えである。

アーチェルはアシユマの隣にいて、非常に不機嫌だった。

一時は対立した事もある国が、混じっているのにである。

それが掌を返したように、アシユマに擦り寄り、取り入ろうとしている。

どうせ、この一件が終われば、今度はアシユマを危険視してくるに違いない。

それが、アーチエルにとって許されざるべきことだった。

アシユマもそれが分かっていたから、アーチエルの好きさせておいたし、自分も一歩引いたところで答えていた。

「あまり、鬼虎の力に過信しないほうがいい」と。

PKFはドラスティス共和国の首都エミールの前に陣をおいた。背水の陣である。

先陣は青龍号。

即ちアシユマである。

遙か彼方からバヴェルの一号塔がプラズマ放電をしながらやってくる。

その道筋には人っ子一人としていなかった。

予め退避していたのである。

「ミスター・アトー。攻撃を開始してくれたまえ」
「軽く言ってくれる」

アシユマはそこで、軽く溜息を吐いた。

アシユマは鬼虎に気を溜め、鯉口からは光が眩く漏れ出した。

アシユマ、お得意の、蛭を放とうとしていたのである。

各艦からどよめきが起こる。

アシユマは満を持して、鬼虎を引き放った。

蛭が幾万幾億の糸となって、バヴェルを襲う。

が、アシユマの攻撃は、バヴェルの念導境界面で、光となりプラズマの一部と化して同化してしまった。

全く持って、アシユマのお株を奪われた感じだった。

前回通じた攻撃が、今回は効かない。

アシユマは動じなかったが、各国のお偉い方は衝撃を隠せなかつ

た。

アシユマは、サイコフライヤーから飛び上がって、プラズマ光球を作り始めた。

が、バヴェルが目前と迫っていたので即席だったが。

それでもかなりの量のエネルギーのはずだ。

「アシユマ！ そいつを撃つのか！？ 無茶すぎる！」

オルバニアンが悲鳴を上げる。

アシユマは、何も聞こえなかった振りをして、プラズマの塊をバヴェルに投げつけた。

これは、多少効果があったようで、バヴェルの念導境界面で防ぎきれなかった物は、バチバチとバヴェルの表面を舐めた。

だがその程度だった。

バヴェルは、以前より強力な念導境界面を張っているようだった。

「だめだ。オルバニアン。打つ手無しだ。PKFにも下がらせる」

「あたりまえだ！ あんな無茶しやがって！ みんなとつくに逃げているよ。尤もドラスティス共和国の連中は、首都を死守するつもりらしいがな」

「やめておくように伝えてくれ。まあ、全滅するような事は避けておいて欲しいがな」

ドラスティス共和国の首都エミールは、それは美しい町だった。

芸術の都とまで評された。

その都が、無残にも、バヴェルの『漆黒の門、裁きの扉』で粉碎され、根こそぎ吸い込んでいかれた。

ドラスティスの国民も、艦隊の乗組員も、皆、涙に暮れた。

そして怨嗟の声を上げ、いつか復讐する事を心に誓った。

それは、先にノルブル王国の首都ロードルブリギを蹂躪された、ノルブル王国国民も同じ気持ちだったろう。

だが、その艦隊自体は、どこと無く浮き足立っていて、艦隊の隊

形が乱れていた。

艦隊はとりあえずレボトミノ連邦共和国の首都、アルゲートの上空に陣取った。

いま、バヴェルに出張られでもしたら、この艦隊は一たまりも無いだろう。

そこへ、一艘のサイコフライヤーが、やって来た。

そしてオープンチャンネルで、全艦艇に訴えかけた。

「この艦隊の責任者は誰か」と。

形ばかりの責任者なら、ノルブル王国の旗艦に鎮座ましましている將軍閣下、と、言う事になるのであるが、いまや実質的な統括者は、青龍号のオルバニアンと言うことにでもなるうか？

事実そういう形で、謎のサイコ・フライヤーに返信された。

するとそのサイコ・フライヤーから、オルバニアンにとっては懐かしい声が、聞こえてきた。

『久しぶりだな。オルバニアン君』

「お、オツちゃんじゃねえか！」

オルバニアンが『オツちゃん』と呼んだ人物、その人こそは不世出のカリスマ政治家、そして生粋の用兵家、ルー・ウィロン、その人であった。

『苦戦しているようだの』

「苦戦も何もねえぜ。全くこつちの攻撃を受け付けねえわ、力でこり押しして来るわで眼も当てられねえわ」

「よし、よし。ここは一つ、わしが出張ってみようかの。時間が無い。各国のお歴々には無条件で従ってもらうぞ。わしの行く通りにすれば必ず勝てる！ 心配するな」

このカリスマ政治家に言われると、負けている物も、勝てる気がしてくるから、不思議な物である。

さて、そのバヴェルであるが、プラズマ放電をしながら、こちらに近づいてきていた。

こちらは青龍号を中心に縦横に展開しバヴェルを中心に等間隔に陣を張っていた。

そしてアシユマは、鬼虎にプラズマの光球を蓄えていた。

一方、各艦隊は魔導砲をいつでも撃てるように、していた。

「ミヤよ奴ら何か変だぞ？」

グチは不安げにそう言った。

「気にするな？ 最初にこそ後れはとつたが、やつらに何が出来よう？ アシユマのプラズマ火球でさえ防いだのだぞ？ 怖れる物は何も無い」

「そ、そうだったな」

「全艦に告ぐ！ チャンスは一度きりだ。バヴェルのコクピット目掛けて全艦で集中砲火を浴びせる。二度目は無い。いいな？ ではカウントをとる。十、九、八……」

各艦が最後の照準合わせをする。

「五、四、三……」

アシユマが鬼虎を構えた。

「二、一、零！ 全艦発射！」

ルー・ウィロンの号令で一斉に魔導砲が放たれた。

勿論アシユマのプラズマ火球も放たれた。

「い、いかん！ この熱量は……！！」

グチがそう言ったがもう遅かった。

アシユマのプラズマ火球と魔導砲群は、バヴェルの念導境界面の一点を貫きバヴェルの

コクピットを蒸発させてしまった。

「やった！」

皆、歓声を上げた。

バヴェルに勝ったのだ。

そのバヴェルはと言うと、綺麗にコクピット部分のみを焼いて、後は無傷だった。

「喜ぶのはまだ早い！ オロ艦隊がまだ残っている！」
ルー・ウィロンが叱咤激励をした。

だが、バヴェルを失ったことで浮き足立ったオロの艦隊と、バヴェルを無効化することに成功したPKF艦隊とでは、士気に相当の開きがあった。

それは戦闘に大きく響き、オロの艦隊は次々と艦艇を失って行った。

「これはいかん。全艦この空域から離脱！ 敵は待つてくれんぞ！
急げ」

ウグラ・ハンが命令を出した。

オロはと言うと、

「余のバヴェルが……破れる訳が……」
ぶつぶつとなにやら言っているのみだった。

「か、勝った！ 勝ったぜ！」

「勝ったわ！」

オルバニアンとアルミナは抱き合って喜んだ。

「勝ったわい！！」

キュポアもハルマに抱きついていた。

皆が皆、喜んでいた。

だが、一つ問題が残った。

残されたバヴェルである。

これをどうするかが問題となった。

これを、現場の判断と言うことで、ルー・ウィロンが、ノリトレアに曳航する事に決めてしまった。

理由はこうだ。

世界一の技術立国であるノリトレアに、分析をしてもらって、こちらの意のままに動かし、オロに対抗しようと言つものである。

直ぐに国際世論が反対の意を表したが、ルー・ウィロンが、「では如何にしてオロに対抗するのか!？」

そう決め込んで国際世論を封じ込めてしまった。

ルー・ウィロンは、ああは言つたが、アシュマらはそれに反対した。

(オルバニアンとアルミナは態度を保留した)

特に反対したのが、アーチエルだった。

「人の世に破壊しか呼ばない物を、後生大事に持つてきて何をするのですか？」

と、言う剣幕で話した。

ルー・ウィロンは

「貴女がアーチエル様ですな？ お初にお目にかかる。ルー・ウィロンです」

挨拶を済ませた後、

「バヴェルはもう一機あるのです。今のバヴェルを抜きにして、如何にして戦うのですかな？ それとも愛しい愛しいアシュマ殿を前面に押し出して、バヴェルと戦わせるのですかな？」

ルーがそう言つた時、アーチエルはジレンマに落ち込んで、黙つてしまった。

尤も、その直ぐ後にアシュマが、

「俺はそれでも構わんがな」

そう言つた。

それを聞いたアーチエルが、

「アシュマさま！ それだけはなりません！」
悲鳴を上げた。

「なんとも夫婦仲の良い事じゃ。はっ、はっ、はっ」

ルー・ウィロンがそう話して、お茶を濁してお仕舞いにされてしまった。

「これでは、全人類を粛清するには、時間が掛かってしまうわ」
ティシユラが言った。

「うむ。だが向うのバヴェルは攻撃手段が半減されている。それに対してこちらのバヴェルは全くの無傷。加えてパイロットはあの口シだ。こちらに勝ち目はあっても、向うにはあるまい？」

ウグラ・ハンが受ける。

「しかし、われらがこう言う関係だと、オロにばれたらどうする？」

そう、今二人は、一つ褥に入っているのだ。

「大丈夫よ。いまオロは薬でぐっすり。ばれようが無いわ」

「ふ、大胆な女だ……」

（人類を粛清するとは、そっちのほうが大胆だわい。恐らくその為のバヴェル発掘だったはず。こ奴等が、こんな事を考えているとはな。きつとこ奴等だけの考えではないはず。恐らく後ろ盾があるに違いない。しかし何故の人類粛清か？ これは帰って若の意見を聞かねばなるまい）

そう考えていたのは天井裏に潜んでいたアベニだった。

いま、ムラサキと二人して行動していた。

（ムラサキ。大体の裏は取れた。帰るぞ）

（すごい……あんな事して……ああ、こうして……）

（ムラサキ）

（あ、くわえ込んだ……）

（ムラサキ！）

（あ、お爺様）

（おじじさまではない！帰るぞ）

（はっ、はい……）

「と、言った次第にて、帰ってきた所存」

アベニは、ムラサキと共に、今、ノリトレアの宮殿にいた。

「それにしても、バヴェルがここにあるとは驚き入った次第。言葉も無いで御座る」

「いや、色々あってね。ねえ？ アシユマ君」

とは、アルステイン。

今、謁見の間にいるのはアルステイン、エファール、アシユマ、アベニ、ムラサキの五人だけである。

「……全人類の粛清ねえ。どう思う？ アシユマ君」
アルステインがアシユマに訊いた。

「言葉どおりの意味だろう。そしてやつらの最終目標は恐らく神人の復活。そうなるとやつらの背後にいる者は七賢人だろう」

「また、七賢人？ いい加減にして欲しいわ」

エファールが怒りの声をあげた。

「まあ、そう怒るなエファ。七賢人がいるとなると、矢張り人類の粛清と言うのは、あながち嘘でもあるまい」

「怒るなですって？ これが怒らずに済むこと!？」

ルー・ウィロンはクーロンの現政権に関わらない事を声明した。

二度と元の独裁政権には戻らないと。

その代わりその用兵の類稀なる才により、国元連の名の下、ルー・ウィロンを臨時PKF司令長官に任じた。

ルー・ウィロンは、ノリトレアの王宮の客間に通されていた。

オルバニアン達はルー・ウィロンを訪ねた。

表敬訪問としなかつたのは、政治臭を嫌ったからだ。

そんなオルバニアンの第一声は、

「生きてたんだなあ。オツちゃん。俺は嬉しいぜ」
だった。

アルミナがあわてて、

「なんて口を利いているのよオルバニアン！」
そう言った。

「はっはっはっ。相変わらずじゃの奥方殿。大丈夫じゃ、オルバニアン君。これこの通りちゃんと生きておる。それにアーチエル様、先日は失礼を致しました。そちらの方がキュポア・アップルトン様ですな？」

「おお、わらわの事も知っておるとは、流石一国の宰相を務めていただだけの事は、あるのう」

「ははは。有難う存じます。そちらの方は……」

ルー・ウィロンはハルマの方を見た。

「あ、わたくしは、ハルマ・イコナと申しまして、キュポア王女のご学友を務めさせてもらっています」

ハルマは素早く言った。

ルー・ウィロンは暫くハルマを見ていたが、何か得心がいったのか、

「ハルマ君と言うのかね。宜しく」

そう言った。

「は、はい」

ハルマはそう言うに止まった。

次に挨拶をしたのがレン又王子だった。

「お初にお目にかかります。レン又と申します。こちらが僕の婚約者でリイナ・アナンと申します」

「若いのにしっかりしてらっしゃる。ご婚約者の方まで一緒に」
「有難う存じます」

そう言ったのはリイナだった。

そして、サクラコ、ミカ、ジーク、アン、ガンロクと挨拶をして、最後に挨拶をしたのが、アシュマだった。

「アシュマ・アトーだ。宜しく」

「ルー・ウィロンだ。……うーむ……流石にオーラが違う……」

「政治家にもなれる……とか？」

「そうかも知れんが、それには収まりきれん、何かを持っている」「
「おいおい、オツちゃん。政治家に向いているのは、俺じゃなかったのかよ？」

オルバニアンが言った。

「勿論そうだ。今でも私は、君が私の下で、政治家としての修行を積んでくれる事を、望んでいるよ」

「あ、自分で言っというてなんだけど、それやっぱパス」

「分かってているよ。さあ、皆さんこちらにおいでなさい。ささやかながら宴の用意がしてある」

「やった！」

「こら、オルバニアンったら！」

皆の笑いを受けて宴が始まった……。

オロは自分の館に帰ってきていた。

自分の執務室に居座り怒りを顔にしていた。

「余のバヴェルが敵の手に堕ちてしまったぞ！ どうするのだ！？」

「まことに以って仕様の無いことにて」

ウグラ・ハンが頭を垂れる。

「なにが『仕様の無いこと』だ！ 無能者め！」

「は。申し訳ありません。で、次の策ですが……」

「何？ この期に及んで次の策とな？」

「はい。まずは敵の手に堕ちたバヴェルに対しては、こちらのバヴェルを以ってして当るのが、得策でしょう」

「何が得策だ！ 子供でも分かる事ではないか！ 愚か者め！」

「は。しかしこの策をしつかりとおかないと、次の策が動き出せませぬ」

「？ それは何だ」

「バヴェルが敵の意のままに動き出す前に、敵の技術者を殺害する

が良いでしょう」

「なんと、暗殺せよと申すか！」

「はい」

「しかし、アシュマが、黙っておるまい。彼奴めを何とかせねば、計画は頓挫するであろう」

「それには、ロシを以って、当たらせます」

「失敗続きの名ばかりのマスクドにか？」

その言葉は、部屋の角に控えていたロシの自尊心を、深く抉った。良いか、ロシよ。貴様はアシュマ・アトーを抑えておくのだ。良いな？」

ウグラ・ハンはロシに言った。

「は……」

ロシは言うに止まった。

「最後のマスクドだ。大切に扱わんな。なあ、ウグラ・ハン」
オロは最大級の皮肉を二人に浴びせた。

「バヴェルを鹵獲ろかくしたのならば、動かせるようにしなければなりませんな」
ノリトレアの内務大臣はこう切り出した。

「確かに使えればこれ程、心強い物は無いが……」

アルステインはそこで言い淀んだ。

それもそうである。

アーチエルがどれ程バヴェルに触れたくないか、それを知っている者の内の一人であるから。

案の定、アーチエルは

「バヴェルの研究にだけは、加担しとう御座いませぬ」
そう言った。

アシュマも、

「これだけは勘弁してやってくれ。その分俺が働こう」

と、言った。

したが、彼女は

「それも困り者で御座います。旦那さま」
そう言ったものだった。

ノリトレアの技術者がバヴェルのコクピット周りを調べていた。
もの見事に融けているので、どついう構造だったかそこから調
べなければならぬ。

その為、大変手間が要ると、技術主任の者はそう言った。

アシユマがアルステインに、

「技術者に護衛をつけんと危ないな」
そう言った。

「地上八千メートル超でも危ないですか？」

「危ないな。俺が敵だったらそこを突いて来る」

八千メートル超と言うのはバヴェルのコクピットがある位置であ
る。

バヴェルのサイズは底辺直径四キロメートル、頂きの直径は二キ
ロメートル、高さに至っては八キロメートルと巨大な物だった。

バヴェルのコクピットは、その頂きにある。

技術者はそこでバヴェルの分析に当たっているのであった。

ここでの仕事の成果如何によつては、バヴェルを制御できるかど
うかに掛かってくるのだ。

その地上より八千メートルも高い高地で作業し研究する技術者の
命が危ないと、アシユマは言っているのだ。

「で、護衛はいかがします？」

アルステインが尋ねた。

「俺が行こう」

アシュマが言った。

「俺も行こう」

オルバニアンが言い出だした。

「アシュマだけじゃ見てらんねえや」

「なら私も行くわ」

アルミナも言った。

「もちろんわたくしも行きます。妻ですから」

アーチエルが言った。

「アーチエル、お前は駄目だよ」

そうアシュマが言った。

「なぜですか？ わたくしでは頼りないか？」

「そうではない。あのマスクド……ロシといったか？ ……にアー

チエルを虜にされたら俺は何も出来ん」

「アシュマさまに、そのように言って欲しくはありません」

「なぜ？」

「それはわたくし以外の者ならば、人質になっても構わないと、言

っているのと同じ事になりませんか？」

「そう言う訳では無いが……」

「一緒に御座います。どうぞ、わたくしだけを特別扱いしないで……」

……

「アーチエル……」

「夫婦の争いは他でやってもらおう。わらわもそう言う事なら護衛

方に加わるぞ」

キュポアが言った。

「キュポアさん！」

ハルマが声音を大きくした。

「止めるなよ、ハルマ」

「うっっ。止めても駄目なようですね」

「わかっておるではないか」

そして結局フルメンバーが護衛に加わる事となった。

「アシユマが融けたバヴェルのコクピット周りを飛んで辺りを警戒していた。」

下では融けた部分を切り取り、分析している技術者の姿があった。皆、酸素ボンベを付けている。

八千メートルの高地なのである。

空気が薄く寒いのだ。

アシユマはともかく、他の者はどうなのだろうか？

念導境界面を持つ者は大方大丈夫のようだった。

バヴェルの周りにはPKF艦隊が、警戒に当たっていた。

そしてロシの乗ったサイコフライヤーがその遙か上空に密んできた。

「者供、今回の目的は、敵バヴェルの技術者の殺害にある。他の護衛の者には目もくれるな」

ロシは総勢千体のマシンナリービーイングに向けて言葉を発した。

ロシの乗ったサイコフライヤーは、下部ハッチを開き、ロシ達の飛び込みを早くと促していた。

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイングー！」

ロシはウイングを唱えて、そして飛んだ。

千体のマシンナリービーイングも背中中のサイコ・フライヤーを起動させ次々飛び込んでいく。

目標のバヴエルは目前だ。

「……来る……」

アシユマは呟いた。

「え？ 何ですって？」

近くにいたレンヌが聞きなおした。

「来る！ 上だ！ 皆！ 戦闘準備だ！」

アシユマが叫んだ。

皆、臨戦態勢になり、敵が来るのを待った。

そしてそれは来た。

総勢千体のマシンナリービーイングが。

「皆さんこちらに来て、固まってください！」

アーチエルが叫んだ。

技術者たちはアーチエルの下に集まった。

「聖なる女神タテトラム

聖なる盟約に従い、

汝をして我に光の加護を与えたまえ

汝、我を護りたまえ。

シールド！！ バイ、サウザンド！！」

アーチエルの周りに、光の膜が出来る。

これで、アーチエルとその技術者は、敵の攻撃から身を守られた。当面は。

敵も何も知らないわけではない。

シールド破りの攻撃を仕掛けてくる。

その度にシールドは薄皮を、剥ぐ様に一枚一枚破られていく。

その防御も完璧ではないのだ。

敵は上空からロケットランチャーを撃ちだした。

これは、魔導石の砲弾を打ち出すもので、シールドを破るのに、非常に効率のいい武器だった。

敵は明らかに技術者を狙っていた。

その降下してくる敵に、オルバニアンの七、六二ミリ魔導石念封弾バルカン砲が火を噴く。

「オラ、オラ、オラア！ 蜂の巣になりたい奴はどいつだア!？」

こう言うときのオルバニアンのバルカン砲は非常に頼もしい。

敵を次々と打ち落としていく。

そこへハルマがやって来て

「幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ

汝の顔に笑みは無し、

未来永劫繰り返される

神の罰をその身に知らん。

サンダーストライク!！」

そう呪文を唱えた。

だが、敵のマシンナリービーイングは、絶縁処理をしているらしく一向に堪えない。

「へへん！ 魔法が万能だと思ったら大間違いだぜ！」

オルバニアンが得意そうに言った。

ハルマは少しむっとして呪文を唱えようとしていた。

「むりむり。無理すんなって」

オルバニアンが揶揄する。

それには無視してハルマが

「風切る翼、銀翼よ。

気高き心、天かける。

汝に問おうその心

風切る翼、剣とならん

サイクロンスラッシャー!!」

そう唱えた。

無数の真空の刃が敵を切り裂く。

ハルマがにやりとオルバニアンに向かって笑いかける。

「けっ！」

オルバニアンが悪態をついた。

「キュポアちゃん、リイナ、三人で魔力を倍化させるのよ」

ミカが言った。

「分かったわい」

キュポアがミカの手を取り繋ぐ。

「分かった」

リイナもミカの手を取る。

「風切る翼、銀翼よ。

気高き心、天かける。

汝に問おうその心

風切る翼、剣とならん

サイクロンスラッシャー」

無数の銀の刃が敵を切り刻んでいく。

アシユマも構えをとった。

鬼虎秘剣、蛩を使うつもりでいた。

だが、

「アシユマ！ 貴様の相手はこの俺よ」

頭上から声が掛かった。

それはマスクドのロシだった。

ハヤは、こちらの味方についているので、ロシには、マスクドと

しては『最後の』と形容してもいいかもしれない。

その最後のマスクドが、プライドを掛けて、アシユマに挑もうとしていた。

アシユマとロシはにらみ合いを続け微動だにしなかった。

敵方のマシンナリービーイングは忠実に技術者を狙ってきてるし、味方のほうはその敵に対して手一杯だったのでアシユマのほうには目もくれなかった。

ハヤは、剣を振りぬき、『気』圧で頭上の敵を、切り刻んでいた。敵は頭上にいることの有利さ、が必ずしもそうでない事を認識した。

(本当は有利なのだが……)

そして、ついに地上戦へと戦いの場を移行した。

だが、それは空中への攻撃手段を持たないアルミナやガンロク、ユキなどにとっては好都合だった。

「さあ、いままで働けなかった分、バシバシ働くよ！」

アルミナはロンリーストラライフを構えた。

「じゃあ、俺も『逸鉄』を頼みにするか」

「あら？ 『大逸鉄』じゃないの？」

「あれはボスキャラ用。こいつら雑魚には『逸鉄』で十分！ さあ、行くぞ！」

「どつちでもいいわ！ あたしゃブン回してたたっ斬れりゃ、それでいいのよ！」

そうしてアルミナは、今まで活躍できなかったフラストレーションを吐き出すように、ロンリーストラライフを文字通りブン回し、血煙を上げていた。

今まで活躍できなかったのは、アルミナだけではなかった。

ユキもその一人で、敵が頭上に浮かんでいる時は、何も出来ずにやきもきしていた。

それを吹き飛ばすが如く、無銘の豪刀を振り回しては、血飛沫をあげていた。

ハヤがそれを見て、

「あなた、人間のくせに中々やるじゃないの？」

揶揄して見せた。

「誰かさんに負けて、アシユマ様を盗られたくないものでね」「負けじとユキも言い返す。

「ほう、アシユマ『様』ときたよ。いくらアピールしても、こちらに振り向いちゃくれないけどね」

「それでもいいの!」

「実は私もさ」

そして、二人の周りには血風が舞い踊った。

ガンロクにもやっと仕事の番がやって来た。

ミカとキュポアとハルマとリイナの護衛だ。

ガンロクはその刃渡り三尺の鉈を煌かせるたび、襲ってくるマシンナリービーイングを斬り刻んでいた。

アシユマは、ロシとにらみ合いをしていた。
が、

「大分、マシンナリービーイングの数が、減って来ているじゃないか？ 大丈夫なのか？ ロシよ？」

アシユマは言った。

「最後に俺一人が残っていればいいのよ」

ロシは八双に構えてそう言い放った。

アシユマは居合いに構えて、

「最後に残れるかどうか……だな」
そう呟いた。

「何だと？」

その言葉に、ロシはいたく自尊心を傷付けられたようで、興奮した体を見せた。

「おのれ！ 言うに事欠いて、そこらの雑魚と一緒にしたな!？」

「俺にとっては、大して代わらんがな」

「何!!！」

ロシは自制心を失って、斬りかかって来た。

アシユマはそれを狙っていたのである。

ロシは八双から斬り付けた。

アシユマはロシの攻撃を掻い潜り、鬼虎を引き抜きロシの胸を抜いた。

しかし、アシユマの鬼虎は、ロシの胸を斬る事が出来なかった。

そこで初めてロシは、アシユマの計略に気が付いた。

「心理戦とはな。恐れ入ったよ。しかし私の念導境界面を抜く事は、出来なかったようだな」

「残念とは思ってないさ」

「？」

「お前の念導境界面の強さは分かった。次は斬る」
アシユマは言い切った。

「もう、油断はせん。そう簡単に斬れると思うな」

ロシは言った。

二人は再び膠着状態に陥った。

その周りでは戦いが繰り広げられていた。

「アンサラー、デュランダル！ エクスキャリバー！」

レンヌのヘブンスソードが敵を切り裂いていた。

レンヌのヘブンスソードは召喚された六本の剣がレンヌの意のまま

まに動く。

攻防一体のその動きは達人級だ。

次々と敵を斬り裂いて行く。

そのレンヌが、アシユマとロシがにらみ合っているのを、見つける。

その時レンヌはこう思った。

召喚された六本の剣は、本来この世の物ならぬ物。

それならば、ロシの念導境界面をすり抜けるのは、容易なのではないかと。

論理的な根拠は無い。

ふと、勘でそう思ったただけだ。

「アンサラー！ エクスキャリバー！ デュランダル！ ソード・オブ・クサナギ！」

レンヌはロシに向かって剣に命令した。

剣はロシに向かい今にも襲わんとした。

「ちいつー！！」

ロシは刀を二閃三閃させ剣を打ち落とすとした。

その隙をアシユマが見逃すはずが無かった。

アシユマは下段の構えから斬り上げて来た。

ロシはそれを辛うじてはずして交わす。

「アンサラー！ グラム！ フラガラック！」

レンヌが追い討ちを掛けるように剣を操る。

「ちー！」

ロシは悪態をついた。

ロシは巧みにレンヌの攻撃を避け、アシユマの反転して頭上を狙

って落ちて来る鬼虎をもかわした。

「！」

アシユマは驚きを禁じえなかった。

それはアシユマ必殺の、上下段、二段構えの攻撃だったからである。

それをロシはレンヌの攻撃を含めアシュマの攻撃をも避けて見せた。

「……！」

アシュマは腹部に灼熱感を覚えた。

ロシはアシュマの攻撃をかわしただけでなく、鬼虎を掻い潜りアシュマの腹部を撫で斬ったのだ。

「うっ！」

「刀術において、常に自分が優位であると思うなよ？ アシュマ・アトー！」

傷はかなり深いものだった。

「アシュマさま！」

アーチェルが叫ぶ。

「聖なる契約を交わし者達よ、

聴けよ、汝らの魂は救われん。

見よ、汝らの肉体は癒されん。

聖なる癒し、神の御手。

ヒーリングオール！！！」

アシュマは苦しげにしながらも何とか呪文を唱えた。

忽ち傷口は塞がった。

塞がりはしたが、どうもアシュマの動きが鈍い。

ロシの立て続けの攻撃に、合わせるのがやっとなのだ。

「ふはははは！ 勝てる！ 勝てるぞ！！ アシュマ・アトーに！！！」

「アンサラー！！ オール・ソード！！ コマンド、アタック！！」
レンヌが全ての剣を用いてロシに攻撃をし掛けた。

そのロシは全ての剣をへし折ってしまった。

「ああっ！」

驚いたのはレンヌだ。

事実この世のものならぬ六本の剣だ。
折れるわけが無い。

茫然自失となっているレンヌにロシが、
「目障りな奴！」
気弾を撃った。

レンヌは動けない。
レンヌに危機が迫る。

「レンヌ！」
リイナが叫ぶ。

そこへアシユマがやって来てレンヌを突き飛ばした。
そして、アシユマはロシの気弾に、胸を貫かれた。

「がっ！ がはっ！」
アシユマは胸を掻きむしり膝をついた。

「聖なる契約を交わし者達よ、
聴けよ、汝らの魂は救われん。
見よ、汝らの肉体は癒されん。

聖なる癒し、神の御手。
ヒーリングオール……」

呪文を唱えるアシユマの声は弱々しい。
アシユマの呪文だけでは再生が追いつかないのだ。

「砂漠で水を求むる者よ
汝は今、癒されん。

極地で火を求むる者よ
汝は今癒されん
求むる癒し今与えられん
ヒーリングスフィア」

辛うじてアシユマは呪文を唱えた。

「どうした？ 鬼虎の平行宇宙からもたらされるエネルギーが、魔力を無尽蔵に与えてくれるのではなかったのか？ ははっ！ 尤も、そのエネルギーも呪文次第で縛られては無限の力を発揮出来んか！」

「……………」

アシユマは黙ったままうずくまっていた。

「アシユマさまあ！」

アーチエルが叫ぶ。

が、その場を離れるわけには行かない。

「アシユマさまあ！！！」

アーチエルの叫びが虚しく木霊する。

ロシがアシユマに刀を振り下ろす。

その時アシユマの刀が閃いた。

ロシの刀を頭上で弾き飛ばし、返す刀でロシの胸を深々と切り裂いていた

「秘剣、流星」

アシユマがぼそりと呟いた。

生死の狭間を超え一刀が万剣に成り万剣が一刀に帰る。

アシユマの『流星』が秘剣たる所以である。

「うぐっ！」

ロシは呻いた。

そして、

「『天馬鬼』よ、汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力を以って汝の主を癒すべし」

そう唱えた。

忽ちロシは傷を癒され元通りになった。

「ははは。残念だったな。アシユマ・アトー」

「そうでもないさ。これで貴様を斬る自信がついた。次は無いぞ。

ロシ」

「……………」

「さて、どうする？」

「……退却する。お前たち俺を護衛しろ。帰るぞ！」

ロシは残りのマシンナリービーイングを引き連れて帰ってしまった。

そう言ってもマシンナリービーイングも総勢の二割を切っていた。その中で無傷のマシンナリービーイングはどれ程いただろう……。

「よう御座いました。アシユマさま！」

アーチエルは、作戦行動が終わるか終わらぬかの間に、アシユマに抱きついて来てこう言ったものだった。

「アシユマさま。もう無茶はしないで下さりませ」

「無茶も何もあれが仕事だ」

「そんな仕事辞めてください」

「辞められないのは、重々承知だろう？」

「今日、アシユマさまは斬られました」

「剣士同士の戦いだ。そういうこともある」

「嫌です。そういうのは……」

「アーチエル、有難う。俺の事を気遣ってくれて。さあ、戻ろう」

「そういう事を言っているのではなくて……」

アーチエルはアシユマに頭を優しく撫でられながら、サイコ・フライヤーへと向かって行った。

それは技術者専用の送迎用のサイコ・フライヤーだった。

このときが一番無防備で危ない所だとアシユマは思っていた。

そしてそれは現実が起こった。

去るかに見えて隠れていたロシの部隊がサイコ・フライヤーを襲ったのだ。

万事休す！

その時巨大な念導境界面が現れて敵の攻撃を防いだ。

同時にサイコ・フライヤーの外装が剥がれ落ち、中から現れたのは青龍号だった。

青龍号の魔導砲に火が点る。

「どんぴしゃだったぜ、アシユマ。眼の前だ」

そう言ったのはオルバニアンだった。

「速攻でかたをつける！ 皆、気をつけてくれ！」

オルバニアンは言った後、魔導砲を撃った。

サイコ・フライヤーを狙い、襲撃しようとしていた敵は、魔導砲の前に塵と化した。

ロシを除いては。

「おのれ！ アシユマめ！ 次は見ている！ 眼に物見せてくれん！」

ロシはそう吐き棄てると、どこかへ飛んで行ってしまった。

アシユマ達が宮殿に戻ってきた。

宮殿に戻る途中でアシユマはアーチエルの鬼虎による本格的な再生治療を施された。

が、アシユマは依然として疲労困憊の体をなしていた。

ここまで、アシユマが疲労するのは珍しい。

それ程あのロシと言う者は強敵で、アシユマに匹敵する相手だという事がうかがい知れた。

その夜アシユマとアーチエルはノリトレアの宮殿の客間で休みを取っていた。

アーチエルは寝付けない風であった。

バヴェルの研究に自分も参加しようかどうか迷っていたのである。それは勿論、アシユマを含め、皆を守る為に取りうと言っ、心積

もりからである。

「アーチエル。眠れないのか？」

アシユマが優しく声を掛けてきた。

「……………はい、少々……………。でもお気になさらないで下さい。直ぐに休みます。アシユマさまもお休みを」

「何か、悩みがあるように思えるが？」

「……………アシユマさまは何でもお見通しなのですね。……………わたくし、バヴェルの研究に参加しようかと思っています」

アシユマは驚いた。

アーチエル自らが、そんな事を言おうとは、思っていなかったからである。

「いいのか？ あんなに嫌がっていたものを」

「私の参加で、皆の命が守られるならば。でも条件が御座います」

「どんな？」

「敵のバヴェルに勝ったならば、残ったバヴェルを完全廃棄する事。研究結果を後世に残さない事」

「そうだな」

「では、もう休みますね。明日も早いですし。お休みなさいませ。

アシユマさま」

「お休み。アーチエル」

第四節 バヴェル対バヴェル

「アーチエルを殺害すれば敵方のバヴェル再生計画は頓挫致します」
オロの館、その執務室でロシは、オロにそう言った。

「アーチエルを殺害するという事か？」

「御意」

ロシはそう言って頭をたれた。

「果たして出来るのか？ この間の失敗の二の舞になりはしないか？」

「大丈夫に御座います」

「もう、千体ものマシンナリービーイングを、貸し付けたりはしないぞ？」

「オロ様、何でも高性能のマシンナリービーイングを開発しているようで……」

「何のことだ？」

「強い念導境界面を持ち、魔法に強く、達人級の武術をインプットされた、ハイレベルなマシンナリービーイングの事にございます」

ロシは底光りする妖しい目つきで、オロを見つめた。

「知らない。そんな事は」

オロはあくまでも、知らぬ振りを通した。

「オロ様。貸してあげてみてくださいな。そこまで言う、ロシ殿の覚悟が見とう御座います」

ティシユラはオロにそう呟いた。

「ふむ。それもまた一興……そういうことが」

「御意」

ティシユラがそう言った。

「ウグラ。そちはどう思う？」

「中々面白い趣向かとは、存じます」

ウグラ・ハンはオロを見上げた。

「また大規模な戦闘になるわけか。良かろう。マシンナリービーイング十体を、お前に貸し与えよう」

オロはそう言ってみせた。

「有り難き幸せ」

ロシが通り一遍の言葉を発した。

が、オロはその事が気にはならなかったようだ。

ただ、

「マシンナリービーイングも、安い物ではないからな。大事に扱え」とは言った。

「アシユマはいかがする？」

ウグラ・ハンが聞く

「私の武器、天馬鬼はこれまで死亡したマスクドの武器を、インジエクシヨンしております。鬼虎など眼中にありません。アシユマに關しても同様に御座います。必ずしも奴が強いかと言ったら、そういう訳ではありません」

ロシは自信の程を見せた。

「なるほど」

オロは妙に納得した。

「ああ、ロシ。世界の王になって欲しいのは、本当は貴方。オロでもウグラでも七賢人でも無いわ」

「神人は？」

ロシは言ってみせた。

「あんな過去の遺物、ほっておくわ。ああロシ……」

二人は一つ褥に入りながら愛し合っていた。

「本当はウグラに王になって欲しいんじゃないのか？」

ロシは皮肉を言ってみた。

「いや。そんなひどいこと、言わないで」

ティシユラはロシに甘えて見せた。

「くくく……男を乗せるのが上手い女だ。嫌いではないぞ」
「ああ、ロシ……」

バヴェルの基礎研究はノリトレアの宮殿内部で行われた。
主にアーチエルによる、バヴェルの起動と制御に関するものだった。

どうやら、バヴェルの起動は、アーチエルが素直に応じれば、起動するというものだった。

それにはアーチエルの脳波を、バヴェル側に伝える何かが必要だったが。

制御に関しても同様だった。

当面としては既出二項目に関してイメージスキャナで代用しようと言っ事になった。

「お疲れ様でしたあ」

アーチエルは、今日の仕事を終えた。

帰り支度をして職員に帰りの挨拶をする。

「お疲れ様です」

職員も挨拶をして帰る。

研究施設の入り口で、アシユマがアーチエルを待っていた。

「アシユマさま、お待たせ致しました」

そう言ってアーチエルはアシユマの腕を取る。

「いや、それ程でもない」

アシユマはアーチエルの護衛役として、側に就いていた。

「やっぱり、愛する妻の事が気になります？」

そう言っつてアーチエルはアシユマの腕に絡み付いてきた。

「あ、いや……その……」

「あ、照れてますね？」

「いや……」

アシユマは耳まで真っ赤だ。

「可愛い」

アーチエルはそう言ってアシユマの頬にキスをした。

「！ くら」

アシユマは、照れ隠した、一応怒ってはみはした。

「きゃっ！」

が、アーチエルに、反省のそぶりは一向に見られなかった。

(まあ、それでもよかる。緊張するよりは)

アシユマは、そう思ってアーチエルの後をゆっくりと歩いていった。

キュポアはアーチエルを迎えに、ハルマと一緒に廊下を歩いていた。

一緒に食事をしようと言うのだ。

「姉様と食事するのは久しぶりじゃのう」

キュポアが言う。

「そうですね」

ハルマもそう返した。

「怪獣とも久しぶりじゃのう」

「嬉しそうですね」

「なんじゃ、ハルマは嬉しそうじゃないのう……は、はぁん。わかった。妬いておるのじゃな？」

「や、妬いていませんよ」

「嘘じゃな？ 動揺が見えるぞ？」

「キュポアさん！」

「嘘じゃ、嘘じゃ。わらわが好きなのは、お主一人だけじゃ」

そう言ってキュポアはハルマの頬にキスをした。

「！ キュポアさん、周りの目が……」

「周りの目など気にするな。わらわだけを見て欲しい」

「キユポアさん」

「まあ」

「きゃっ！」

キユポアはよそ見をしていた為、人にぶつかりそうになった。

「相すめぬ。怪我はないかえ……なんじゃ、アンとガンロクではな
いか」

「キユポア様。それにハルマ様も」

「なんじゃ、ガンロクも食事か？ アンを伴って。角に置けないの
う」

キユポアがそう揶揄すると、ガンロクとアンは照れに照れまくっ
て、真っ赤になってしまった。

「レンヌ。そう何日も落ち込んだままでいるな」

レンヌは召喚魔法へブンスソードの六本の剣をへし折られて、自
分の心も折れようとしていた。

それをリイナが心配した。

レンヌもまた心配をしていた。

その間、何度も召喚を試みた。

が、結局駄目だった。

へし折られた六本の剣。

へブンスソードは二度と召喚されぬのではないだろうか？

レンヌはそれを恐れ落ち込みもしていた。

『リイナ、いる？』

ドア越しにミカの声がする。

「ミカか。どうした？」

『うん。食事一緒にどうかなって……』

「わかった。少し待っててくれ。レンヌ行こう」

「僕はいいよ。リイナ。皆と行っておいで」

「それはいかん。たまには外の空気を吸いに行くぞ」

「あ、リ、リイナ……！」

暫くしてレンヌはリイナに引き摺られるようにして部屋から出てきた。

迎えに来ていたのはミカだった。

廊下の向うから騒音が聞こえてきた。

「騒々しいですね」

レンヌが言う。

「あれは……剣戟の音だ」

リイナが断じた。

アルステイーンは執務室に内務大臣と共にいた。

「なぜ、侵入を許した!？」

「どうやら賊が侵入しているらしい。」

その賊はかなり強くて味方の兵を次々となぎ倒して行っているらしい。

「王よ、ここは危のう御座います。安全な場所へ……」

内務大臣はそう言った。

「いや、僕も出る! 誰ぞ武器をもて!」

「いけません! 王よ、避難して下さい!」

「いつもアシユマ君等には危ない目をさせて、自分はこのうのと安全な場所にいる。そんな事にはもう飽いた」

「王よ! 王とはそういうものです。どうぞお下がりを!」

「王なんてクソ食らえだ!」

「アルステイーン王! 貴方様が死ねばノリトレア八千万の民はいかがすればよいのですか!? 民主共和制を敷く夢はいかがなされるのですか!？」

内務大臣はアルステイーンを諫めた。

「……………」

「王には王の、兵には兵の仕事と言うモノが御座います。お辛いでしょうがここはお退き下さい」

「……相分かった。余が間違っていた」

「王は後方にて指揮をしてください」

「そうしよう」

「アシュマ―！」

アシュマに声を掛けたのはリイナだった。

どうやらアシュマを見つけたらしい。

「リイナ」

「城内で戦闘が行われている」

「戦闘？」

「アシュマはどこだ？ アーチエルはどこだ!？」

ロシがマシンナリービーイング数体を引き連れて、城内を我が物顔で闊歩かつぽしていた。

「あれか……。敵はロシか……。狙いはバヴェル……。アーチエルと言った所か。アーチエル、君はアルスティーンの所まで逃げるんだ。いいね」

「嫌です。アシュマさま。離れ離れになるなんて」

「敵の標的は、アーチエル、君だろう。アーチエル、ここには危険だ。アルスティーンの所へ行くんだ」

「そんな、アシュマさま……。いやです！ そんな事」

「だめだ！ 行くんだ!」

「……アシュマさま……」

「分かったね？」

「……はい」

「リイナ、アーチエルを連れて、アルスティーンの所まで、連れて

行つてくれないか？」

「それは構わんが、お前一人で大丈夫なのか？」

珍しくリイナは他人の事を心配した風を見せた。

「大丈夫だ」

アシユマはそう言った。

アーチエルは渋々今来た道を、リイナたちと一緒に戻つて行つた。

アシユマはロシの方へ歩んで行つた。

「ほう、お前の方から来るとはな。アシユマ・アトー。お前を倒さぬとアーチエルのところには行けんと言う事が」

ロシが言う。

「矢張り狙いはアーチエルか」

アシユマが呟く。

「そうだ」

ロシがそう言う。

「ならばこの道、通すわけにはいかんな」

「いつまでその口利けるかな？」

「なに？」

「今度のわれらは少数精鋭。ただで済むとは思ふなよ」

(少数精鋭？ 後ろのマシンナリービーイングの事か？)

「行け！」

ロシの言葉が発せられると同時に、マシンナリービーイングどもは疾風の如くアシユマに襲い掛かった。

「む……？ この動きは？」

アシユマが戸惑うのも当然で、このマシンナリービーイング達、結構非凡な刀使いをしてくる。

それもそのはず、マシンナリービーイングの脳髓には、イルドリア武道大会で優勝した経験を持つ、ウグラ・ハンの動きがコピーされてきたのだ。

それが数人いると言うことは、かなりの苦戦を強いられるという事だった。

一人が横に薙いで来る。
それをアシユマが弾いてかわす。
横合いからもう一人が突いて来る。

反撃をさせてもらえないアシユマは、段々守勢へと回って行った。

「幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ

汝の顔に笑みは無し、

未来永劫繰り返される

神の罰をその身に知らん。

サンダーストライク!!」

サンダーストライクの呪文が発動された。

それは、敵のマシンナリービーイングを、焼き尽くした。
呪文を発したのは……ハルマだ。

キュポアが、シールドでハルマを守っている。

が、サンダーストライクを食らっても尚、マシンナリービーイングたちは何事も無かったかのように立ち上がった。

「駄目だ。絶縁処理でもしてるのか？ それならこれで！」

ハルマはまた呪文を唱えようとしていた。

その間の守りはキュポアのシールドとガンロクの鉞だった。

「風切る翼、銀翼よ。

気高き心、天かける。

汝に問おうその心

風切る翼、剣とならん

サイクロンスラッシャー!!」

幾重もの真空の刃が、マシンナリービーイングたちを切り裂く…

… 筈だった。

しかしそれはマシンナリービーイングの目の前で、かき消されてしまった。

「サイクロンスラッシャーも駄目なのか！ ならば！」

「あまねく炎、火の精霊よ。

汝ら、我が命に従い、

集いて、我が敵を焼き滅ぼすべし。

放て、その手で。

ファイヤーボール！！」

ハルマはファイヤーボールを唱えた。

が、これもマシンナリービーイングたちの眼前で、掻き消えてしまった。

「ハルマ！ 無駄だ！ アンチスペルを掛けている！ 魔法は通じないぞ！！」

アシユマがそう叫んだ。

「なんて厄介な」

「ならおらが！」

ガンロクは大銃を二刀に振り回し始めた。

が、マシンナリービーイング数体に囲まれて忽ち窮地に陥る。

「お師匠！ こいつらなんだべ！？ やたら強ええぞ？」

「強いのは当たり前だ。ウグラ・ハンの戦闘データを入れているからな。ウグラ・ハンと言うのが気に食わんが」

ロシが言った。

「だ、誰もお前に聞いてねえべ！」

マシンナリービーイングを、四体ほど引き連れて苦戦するガンロク。

徐々に押し込まれていく。

万事休すだ。

その時、

「じゃーん！！ 隻眼のアルミナことアルミナ・ラ・シアちゃんと

……」

「何にも肩書き無しなの、オルバニアン・マグマイヤーの登場だあ！
！」

「義によりこの戦いに参加する者なりい！」

「オルバニアンは逸鉄を、アルミナはロンリーストライフを持って、
戦闘に参加した。」

「アシュマ、助けがいるか？」

とは、オルバニアン。

「いや、いい。お前たちは先ず、ガンロクを助けてやってくれ」

「そういうアシュマも、大分苦戦しているみたいじゃないか？」

「集中が途切れる！ 言われた事をさっさとやる！」

アシュマが叫んだ。

「おゝこわ」

オルバニアンが肩をすばめる。

アシュマはいつの間にか鬼虎本身と鞘の二刀流になっていた。

敵マシンナリービーイングは、何とかアシュマを包囲しようとしたが、アシュマは巧みに右に左に動いて、包囲をさせなかった。

「が、動きの要で、ロシが気弾を撃ってきて、アシュマの動きを牽制した。」

「ちいっ！」

アシュマはその度に窮地に陥る。

「よし……。そろそろかな？」

ロシが直接戦闘に参加してきた。

とどめを刺す気だろう。

「行くぞー！！ アンサラー！！ エクスキャリバー！！ デュラン

ダルー！！ ソード・オブ・クサナギー！！ コマンド、スラッシュャー

！！！！

「むー！？」

ロシの虚をついて、虚空から飛んできたそれは、召喚へブンスソードの剣だった。

ロシは刀を持つ手を斬り裂かれて、刀を取り落とした。勿論召喚へブンスソードを用いたのはレンヌだった。

「ロシ……」

せめて、ロシに一太刀浴びせようと戻ってきたのである。

ロシは刀を手首ごと切り落とされたにも拘らず、慌てた風は無かった。

「小僧……」

ロシは怒っていた。

こんな陳腐な技に、己の手首を切り落とされたのである。しかも、あんな小僧に。

ロシは、標的をレンヌに変える気配を見せた。

一方のレンヌは、アシユマに助勢する為に、一人で戻って来ていた。

そのレンヌは自ら驚いていた。

てつきりもう使えないと思っていたへブンスソードが、再び召喚できたからである。

「『天馬鬼』よ、汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力を以って汝の主を癒すべし」

ロシがそう言うと、切り離された手首と前腕が触手のような物で繋がれて、手首が吊り上げられて、そして切り口が接合された。

怒りに燃えた眼でロシはレンヌを見ると、レンヌ目掛けて突進した。

しかし、その前にアシユマが立ちはだかった。

「レンヌ！ お前はマシンナリービーイングの相手をしてくれ！」

「はい、分かりました！ アシユマさん！ アンサラー！ オールソード！ コマンド、アタック！」

「全くお前らは、揃いも揃って、目障りな奴ばかりで……！」

まず、アルミナが敵のマシンナリービーイングを斬り裂いた。戦利眼の面目躍如といった所か。

続いてオルバニアンが敵を斬り裂いた。

そしてガンロクが続けざま二体を斬り裂いた。

敵が総崩れになった所で、畳み掛けて攻撃をしていく。

敵マシンナリービーイングは、一人、また一人と倒されて、最早全滅は眼に見えていた。

「ロシよ味方は殆どいないぞ。それでもまだ戦うか？」

アシュマが言った。

「見損なうな。味方なぞいなくとも結構。我一人にてもアーチエルを殺害するのみ」

「そうはさせん」

そしてロシはアシュマ達に包囲された。

「それで包囲したつもりか？」

ロシは素早く納刀し刀に気を集めた。

「！ いかん！ 皆、俺の後ろへ下がれ！！」

アシュマが叫んだ。

そして自らは前に出てロシへ車に斬りかかった。

「ぬ！！」

ロシは低く唸りながら刀を鞘走らせた。

中空でアシュマの鬼虎とロシの天馬鬼が交錯する。

ロシの天馬鬼は発光していた。

鬼虎と交わる所が火花を散らした。

それだけエネルギーを溜めていたという事だろう。

その時、なんと、鬼虎が折れて飛んでいた。

「！！！！」

驚愕するアシュマ。

「これが今までインジェクションを繰り返してきた『天馬鬼』の威力よ！！」

ロシが勝ち誇ったように言う。

「くっ！」

アシユマは悪態をつく。

アシユマは何か罅迫り合いの体制にまでになり、アシユマはロシに追い込まれていった。

「そんなに俺が憎いか？　ロシよ……」

「ああ、殺したいほどにね……」

「それはマスクドとしての本能か？」

「俺とお前にとっては……違っ……なっ……！」

ロシはアシユマを弾き飛ばした。

「くっ！」

「てやあっ……！」

ロシはアシユマに斬りかかった。

アシユマは体勢が整っていない。

ロシはアシユマの頭蓋を斬り割った。

「アシユマ！」

「アシユマさん！」

「怪獣！」

「アシユマ！」

「お師匠！」

「アシユマさん！」

その場にいた皆が声をあげた。

そう、アシユマの頭蓋は斬り割られたかに見えた。

「む！？」

ロシは意外な感触に違和感を覚えた。

手に相手を斬った感触が無かったからだ。

その時アシユマはロシの背後に現れ袈裟にロシを斬った。

なんと折られたはずの鬼虎から刀身が延びていた。

伸びた長さは上寸より三寸五分ほど長かった。

秘剣、物干し竿である。

続いてロシの首を斬り取ろうと刀を横に薙いだがロシはごろりと前へ転がってそれをかわした。

「浅かったか」

アシユマはそう、呟いた。

そう、アシユマは秘剣、空蝉を用いたのだ。

「『天馬鬼』よ、汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力を以って汝の主を癒すべし」

ロシは傷を癒した。

「くそっ！　ここは退かねばならんのか！？」

ロシは悪態を吐く。

「逃がすか！」

アシユマが叫びロシに迫る。

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイングー！」

ロシがウイングを唱えて、天井を次々と破りながら上へと昇って行った。

アシユマは

「逃がすか！」

そう叫んだ時、ハルマが

「アシユマさん、深追いは止めたほうがいいです。手負いの獣は時として信じられないほどの力を発揮します。それに折れたままの鬼虎では……」

そう言った。

それに対してアシユマは納刀しながら、
「そうだな」

鬼虎の折れた切っ先を拾った。
そして、鬼虎を再び抜き、折れた切っ先を鞘に収めて、改めて納刀した。

「アシユマさま大丈夫ですか？」

アーチエルは、今にも泣き出さんばかりの勢いで抱きついてきて、アシユマの体を改め始めた。

「大丈夫だよ。アーチエル。皆が見ている」

「構いませぬ。ああ、アシユマさま」

アーチエルはアシユマに抱きつき、しな垂れかかった。

「全くアーチエルはアシユマ、アシユマと、今回一番頑張ったのはレンヌだぞ？」

リイナは言った。

「いやあ、リイナ。そんな事は……」

レンヌは照れた。

「照れるな。本当の事だ」

「がんばりで言ったらハルマも頑張ったぞ？」

キュポアが言った。

「でも、効かなかったではないか？」

アシユマが無意識に非情な事を言う。

「それでも頑張ったのじゃ！」

「目立ってなかったぞ？」

「それでも頑張ったのじゃ！！ おぬしなんぞは、鬼虎をぽつきり折られてしまったではないか！」

「分かった。分かったハルマも頑張った。これでよかるっ？」

アシユマが折れた。

「当たり前なのじゃ」

「キュポアさん、いいんですよそんな事は」
ハルマも照れた。

半分は恥かしさも入っているだろう。

「アシユマさま。鬼虎が折られたというの言うのは、本当の事なのですか？」

アーチエルが尋ねた。

「まずはアルステインに報告に行こう」

アシユマは言った。

「そうですね……」

アルステインは嘆息した。

「鬼虎が折れてしまうとは」

「これからどうやって、あのロシとか言う奴と、戦うつもりなのじゃ？」

キュポアが危惧した。

「それは問題ない。何とかなる」

「何とかなるでは無いでしょう？」

アーチエルが珍しく食ってかかる。

「アシユマ……。私を殺してくれ」

ハヤが突然言う。

「何を言う？ 突然。殺せるわけがなかるう？」

「私を殺して鬼細鳥を、インジエクシオンしてくれ」

「だから出来んと言っている」

「しかし……」

「しかしは無しだ」

「はい……」

ハヤは言葉をなくした。

「城の警備体制を見直した方が良くないじゃねーか？」

オルバニアンが言った。

「今回のような敵には難しいんじゃないの？ 少数精鋭で、強力無比な敵に正面から来られちゃ……鬼虎も折れたままだし……」
アルミナも言う。

それだけアシュマの鬼虎に頼っていたと言うことなのだろう。
不安なのだ。

「だから、警備方も強力無比に仕上げればいいんじゃないか？」

「何人そんな強い兵を送れるのよ？ 前線に？」

アルミナが更に言う。

「うっっ」

オルバニアンが言葉に詰まる。

「基本的に戦は数で決まりますからね」

ハルマがとどめを刺した。

「お前さん、ヤナ所でヤナ事言ってくるねえ」

オルバニアンが苦笑した。

「それはさて置き、警備の強化は必要かも知れんな」

アシュマがまとめた。

数日経って、アルステインの元に、バヴェルに携わっていた技術者が訪れた。

どうやら、バヴェルを動かせる目処が立ったらしい。

早速アシュマとアーチエルが、アルステインの執務室に呼ばれた。

バヴェルが使用できると聞いた時、アシュマとアーチエルは複雑な想いをした。

それはアルステインにも痛いほど良く分かることだった。

そして問題になったのが、誰がバヴェルを動かすのか？

そう言う事だった。

これには当初アシュマが動かすと言った。

それに対しアーチエルは、

「いけません！ そんな危険な事、アシユマさまにさせられませぬ！」

そう言って猛反発をした。

そんなアーチエルをアシユマ達がなだめすかして、何とかアシユマが乗ることに、了承を得た。

だが……。

アシユマがコックピットに乗って、イメージスキャナを被り、いざバヴェルを動かそうとしても、うんともすんとも動かない。

一同頭を捻ったが、最後に出た言葉は、アーチエルの、

「わたくしが動かしまする」

の、一言だった。

それこそアシユマを始め、主だった面々が猛反発をした。

しかしアーチエルの次の言葉が、皆の頭を更に捻らせた。

「わたくしの他に誰がバヴェルを動かせるでしょう？」

それはアーチエルの言葉通りになり、皆が皆バヴェルに乗り込み試してみたが、矢張り駄目だった。

アーチエルを除いては。

主だった面々は、渋々アーチエルがバヴェルのパイロットになる事を、承知した。

勿論、アーチエルも喜々として、バヴェルのパイロットとなったわけではない。

人類の為だとか、そういった大それた決意からではない。

皆を……アシユマと、身近で愛すべき人々を、守ろうという使命感がそうさせたのである。

そしてアシユマは、アーチエルの護衛と言うことで、アーチエルの側に付くことになった。

『バヴェル』と言う『カ』を手に入れたアシユマ達は、臨時PKF司令長官ルー・ウィロンや、各国の將軍クラスの人間たちと、交

えてこれからの作戦を練った。

その結果、矢張りバヴェルを前面に押し出して、戦うのが得策との結論がでた。

ただ、懸念されるのが敵方は無傷のバヴェル、こちらはビーム砲が無い手負いのバヴェルと言うことだった。

つまりは先日ルー・ウィロンが取った戦法、敵方のバヴェルに対してコックピット一点集中攻撃を行われる可能性があるということだった。

それについてはアーチエルは、

「秘策が御座います。どうか皆さんご安心を」

そう言っていた。

だが大丈夫だろうか？

各国首脳はこの一人の少女（と、言っても既に人妻だが……）に、今ひとつ信用できかねていた。

それはそうだ。

強大な敵との決戦に、この可憐で華奢な少女に全ての命運を掛けるのだ。

不安になるな、と言うほうが無理なのである。

もう一つ別な意味で方策を持つ者がいた。

アシユマだ。

アシユマが考えている事は、いずれ分かることになるだろう。

とり合えずその場合は、ルー・ウィロンが上手く取り成して場を収めた。

オロ邸へ攻め込む作戦決行日は三日後となった。

作戦決行の前日となった。

キュポアは一人テラスにいた。

空には丸い月があった。

キュポアは一人で明日を憂っていた。

自分の姉があのだバヴェルのコアになるのだ。
不安で仕方がなかった。

そこへハルマがやって来た。

「キュポアさん。捜しましたよ」

ハルマが声を掛けた。

「なんじゃ。明日は出陣だというのに、ハルマも不安で寝付けないのかえ？」

「『も』と、言う事はキュポアさんも不安なんですね？」

「ああ。不安じゃ。姉様の事。怪獣の事。皆の事。そしてハルマ、おぬしの事。みな無事で生還して欲しい。そのような事を考えておった」

「そうですか。僕と同じですね」

ハルマはそう言った。

ハルマはそつとキュポアの隣に座った。

そしてキュポアはハルマの手を握ってきた。

「勝てるじゃろうか？」

そう言ったキュポアの手は震えていた。

「勝ちますよ」

そう言ったハルマはキュポアの手に、更に自分の手を乗せた。
まるで、キュポアの不安感を静めるかのように。

「なぜ、勝てるといいきれる？ 向うには無傷のだバヴェルもあれば、マスケドのロシとやらもいる。怪獣はロシとやらが苦手だし、姉様のバヴェルにはビーム砲が無い。不安要素ばかりじゃ。それでも勝てるというのか？」

「勝てますよ。勝つという気持ち信じれば勝てます」

「そんな事で勝てるのか!？」

「勝てますよ。ご安心下さい」

「本当じゃな？ 嘘をついたら許さんぞ？」

「大丈夫ですよ。大船に乗ったつもりでいてください」

ハルマはそう言ってキュポアを安心させようとした。

「分かった。……ハルマ、キスしておくね」

ハルマはキュポアのその言葉を聞いて、心底不安なのだと思っ
た。

「いいですよ」

ハルマはそう言いキュポアの唇に自分の唇を重ね合わせた。

キュポアはうつとりと目を閉じた。

「アシユマさま……自分から操縦者になると言っておきながら、体
の震えが取れませぬ」

アーチエルは今、身体に一糸纏わぬ身で震えながらそう言った。

いま、アシユマとアーチエルは寝室の一つ床の中に寝ていた。

「アーチエル。大丈夫だよ。俺が側にいる」

「ああ、旦那さま……」

アーチエルはアシユマにしがみついていた。

その夜アーチエルはアシユマを求めて来た。

想いを刻み込むかのように。

アシユマももそれを敏感に察したのか、アーチエルを激しく抱い
た。

一夜開けていよいよ連合艦隊とアーチエルのバヴェルが発進する。
青龍号には臨時PKF司令長官のルー・ウィロンが乗り合わせて
いた。

この青龍号から指揮を取るつもりなのだ。

「発進！」

ルー・ウィロンの号令が各艦に伝わる。

各艦はバヴェルの後に続いて発進して行った。

一方、オロの陣営では、蜂の子を突付いたような騒ぎになっていた。

いきなりの敵方のバヴェルの発進である。予想をしていなかったのだ。

だが、ウグラ・ハンは

「敵方のバヴェルが到着するまで十二時間余もある！　しっかりとる！！」

味方を鼓舞した。

「何をしておる！　しっかりせんか！！」

そう叱咤したのはオロだった。

（ほう。以外と言う）

ウグラ・ハンは意外にもそう思った。

それはそうである。

全世界の資産の約五パーセントを持ち、全世界に支社を持ちそれを統括する者である。

これくらいの叱咤激励は出来て、当然と言えば当然だった。

「何をしておるのだ！　迎撃の準備をせい！　ハン！　お前も部署につけ」

「ははっ！」

「ロシはどうした！？」

中々どうして板についている。

オロは総大将として玉座に付いた。

隣にはティシユラ・アママンガムが侍っていた。

玉座はサイコフライヤーに移り、よって、オロとティシユラもそこへ運ばれた。

そのサイコフライヤーはノリトレアの青龍号と同じく旗艦の機能を備えていた。

そしてそこにはウグラ・ハンが控えていた。

「お早いご到着で」

「ビジネスなれば時間が勝負よ」

「なんと、オロ様は戦を商いと 동시에 考えなさる」

「悪いかな？ ビジネスは面白いぞ。特にマネーゲームはな」

「いやはや破天荒な王で……」

「今頃分かったか。で、ウグラ・ハンよ。敵はどう出てくるかな？」

「恐らくバヴェルを前面に押し出しているのこり押し……力技で来るでしょうな」

「そうか。ロシはどうしておる？」

『はっ、ここに……』

ロシはバヴェルのコックピットにいた。

「ほう、席に着いているか。ならばよし。最後のマスクドよ、その働きを余に見せてみよ」

『はっ』

「全軍発進！」

オロの号令が響き渡る。

その頃、連合側側のバヴェル（アーチエルが乗り込んでいるバヴェル）と、各国連合艦隊は大洋の上にいる。

オロの読みどおり、アーチエルのバヴェルが先頭に立っていた。

アーチエルはコックピットにいた。

そしてアシユマはその傍らに『立って』いた。

『アシユマさま。寒く御座いませんか？』

「ああ。平気だ」

『苦しくは御座いません？ 空気薄いでしょうか？』

「大丈夫だよ。アーチエル」

アシユマは努めて優しく言った。

これから始まる決戦を前にして、余計な事で緊張を与えたくなくなつたのである。

尤もアシユマの言ったことは、嘘ではないのだが。

アシユマの念導境界内は、気温も気圧も常に正常な値になつて

いたからである。

『前方に感あり！ 敵バヴェルとオロ艦隊です』
サイコロリーダーを預かるリィナはそう告げた。

「数は如何ほどか？」

ルー長官が落ち着いて聞く。

「バヴェルを除き約二万の敵影です。超超弩級一、超弩級三、戦艦クラスは五十から百ほどです。後は巡洋艦、駆逐艦、多数。空母は六と魔導騎兵は十八万程」

「宜しい。言い回答だ。全艦に伝達。これは勝ち戦であると。数において五倍以上もの開きがあるのと、こちらのバヴェルには、天下無敵のアシユマ殿がついている。これで負けよう筈が無い。勝ち戦じゃ」

全艦隊のいたるところで既に勝ち鬨の声が聞こえてきた。

「さすが、御大将。言う事が違うねえ」

オルバニアンが言った。

「人をその気にさせるとは、こう言うことよ。分かるかなオルバニアン君」

「判る気がする。アルステイーンの時とは少し違うな」

「あのペテン師と一緒にしないでくれたまえ」

「そういえば、作戦会議の時もアルステイーンと一言も喋らなかつたもんねえ」

アルミナが述懐をする。

「奥方殿……」

ルー・ウィロンが困った顔をする。

ちなみにルーが、アルミナの事を呼ぶときは、なぜか『奥方殿』と呼ぶ事が多い。

「犬猿の中なんだな。きつと彼と私の関係は」

ルー・ウィロンが言った。

「どっちが猿よ？」

アルミナが言う。

「そりやずる賢いアルステイーンが猿に決まってるんだろ！」
オルバニアンが決め付けた！

「くしゅん!!」

アルステイーンは大きなくしゃみをした。

「風邪でも引いたかな？ 寒気がする。そういう時は人間湯たんぽ。エファさくんどこにいますかあ？」

「誰が人間湯たんぽじゃい！」

エファールがやって来た。

「ああ、いましたね？ 愛しのエファール！」

「こんな時だけ『愛しの』なんてつけないで頂戴」

「こんな時だからですよ。さあ、寝ましよう。直ぐ寝ましよう。速く寝ましよう」

「貴方のほうから誘ってくるなんて珍しいわね。敵が攻めてきたらどうするの？」

「その時、二人は死ぬ事になるでしょうから、今生の別れにせめて

……」

「作戦指揮はどうするのよ？」

「現場の判断に任せましょ。あのルー・ウィロンもいることだし」

「そうね。そうよね。じゃあ、あたしが人間湯たんぽになったげる。いらっしやい。ヨデイ」

「はっくしゅん!!」

ルー・ウィロンは大きなくしゃみをした。

「誰ぞ我の噂をしているな？」

「はは。そりや、アルステイーンしかいねえよ。おっちゃん」

オルバニアンは青龍号の操縦桿を握りながらそう言った。

「さもありなん」

機内は大爆笑の渦だった。

こうして戦闘前の緊張を解いてゆくのだった。

「さて戦闘準備だ！」

ただし引き締める所は引き締めた。

ここが、ルー・ウィロンの凄い所である。

『向うは楽しそうですわね。アシユマさま』

「そうだな。アーチエル。こちらも楽しもうか？」

『いえ、全てが終わってから楽しみとう御座います』

「そうだな」

アシユマは首肯した。

『アシユマさまは寝かしてくれませぬゆえ、それだけが心配に御座ります』

「そうだったか？」

アシユマは、逆のような気がしてならなかったが、まあそれはどうでも良かった。

「さて、こつちも戦闘準備だ」

『このままで行きますと大洋上のだ真ん中でぶつかりますわね』

「そうだな。さて、オロはどう出てくるかな？」

「感！ 高熱源反応……これは敵バヴェルのビーム砲かと思われま
す！」

リイナが叫んだ。

「陣形縦列隊形。敵のビーム砲をやり過ぎす。その間アシユマ殿に
頑張ってもらおう」

ルー・ウィロンは言った。

元々バヴェルを手負いにしたのもアシユマの秘剣、蛍があったればこそである。

それをもう一度この場で行おうというのである。

アシユマは気を練り場を紡いだ。

鯉口から光が溢れる。

「せいっ!!」

気合と共にアシユマ渾身の光の矢が放たれる。

幾億、幾十億、幾百億もの光の糸はロシの乗るバヴェルへと伸びて行った。

「甘いわっ!!」

ロシが叫ぶ。

アシユマの放った秘剣『蛭』は、敵のバヴェルの念導境界面で凄まじく弾けはしたが、結果としてはバヴェルは無傷だった。

「今度はこちらの番だな」

ロシはそういうと、六百六十六基のビーム砲を発射した。
ルー・ウイロンが行った手と同じ手だ。

勿論狙いはコックピットのアシユマとアーチエルだ。

「アーチエル! 念を上げろ!」

『はい!』

アシユマは折れた鬼虎を横に寝かし防御の体勢を取った。

アシユマの念とアーチエルの念を鬼虎とバヴェルで増幅した。

ビーム砲群はコックピットの手前ではじけて消えた。

「アーチエル、念はそのまま上げておいてくれ。きついだらうがな」
「わかりました。アシユマさま」

アシユマはまた気を練り上げ始めた。

今度はバヴェルの力場を巻き込んだ。

アシユマは敵バヴェルの六百六十六億のビーム砲を思い浮かべた。
まずは『手』からもぎ取ろうというわけである。

「ぬうっ! まだやろうとこのかッ!」

ロシは悪態をついた。

アシユマの折れた鬼虎は光を放ち始めた。

バヴェルの念導境界面をも巻き込んで。

鬼虎は折れつつも、これまでに無い光を放ち始めた。

アシュマは秘剣、裏・閃光一刀・崩しの体勢から、

「せいっ!!!」

と、言う気合と共に発射された光の条は矢となって敵のバヴェルに突き進んだ。

「! いかん! この熱量は……!!」

ロシは叫んだ。

そして光の条は、ロシの念導境界面を突き破り、六百六十六基全てのビーム砲群を破壊した。

自動修復機能が働き延焼は食い止められた。

「おのれ、アシュマめ!」

ロシは悪態を吐き、未だもつもうと煙を上げるバヴェルのコクピットから身を乗り出した。

そして、天馬鬼に光を集めだした。

「貴様のその技、貴様だけの物と思うなよ!」

ロシは巨大なプラズマ火球をバヴェルで増幅して作り上げアシュマとアーチェル目掛けて投げつけた。

アシュマもプラズマ火球を作り上げロシに投げつけた。

中空でプラズマ火球が火花を散らしてぶつかり合った。

はじけたプラズマは海面に落ちて水蒸気を上げた。

「バヴェルを何て使い方をするんだ! それは私のバヴェルだぞ!」

オロの声が拡声器から聞こえてきた。

「方針が変わりましたので。マイ・マスター」

「ロシ!!! ロシ!!! ……くそ!!! 電源を切ったな?」

オロは通信機を投げつけた。

「ご主人様。永の暇を頂きに参りました」
ティシユラが言った。

「な？ 何？」

「御大将。ではこれにて去らば」
ウグラ・ハンが言った。

側にはあの神人バツクアップが、浮いていた。

「ま、まて！ 私を見捨てるのか！！ テイシユラ！ ウグラ・ハン！！」

「貴方との愛し合った日々、中々良う御座いました」

「テイシユラ！」

オロに募る焦燥感。

「テイシユラ！！」

テイシユラとウグラ・ハン、そして神人は脱出用の小型サイコ・フライヤーに乗りエンジンをふかし発進してしまった。

「あのサイコ・フライヤーを撃て！」

「は！？ あれは味方機ですが？」

「うつのだ！ …… ええい私かやる！ 艦首魔導砲用意！」

「ま、魔導砲ですか！？」

「復唱は！？」

「は！ 艦首魔導砲用意！」

「電影クロスゲージ明度二十！ 対ショック対閃光防御！ 十……
九……八」

カウントダウンが続いてゆく。

「一……零！ 発射！！」

オロの乗るサイコ・フライヤーから魔導砲の眩い光が放たれた。

テイシユラの乗るサイコ・フライヤーに、見事に命中したかに見えた。

が、小型のサイコ・フライヤーに似合わず、強力な念導境界面が魔導砲を弾き飛ばした。

「なっ……」

オロは言葉を失った。

テイシユラの乗るサイコ・フライヤーには神人（聖櫃）が乗って

おり、その念導境界面で二人は助かったのだ。
ティシユラの乗るサイコ・フライヤーはバヴェルの頭頂部をめざしそして着いた。

「む？」

ルー・ウィロンはこの一瞬の指揮系統の乱れを、見逃さなかった。
「アシユマ殿、アーチエル殿、機会ですぞ」

「分かった。アーチエル、念を俺に」

「はい」

アーチエルの念とアシユマの念は、互いに絡み合い超巨大なプラズマの槍となった。

「全艦陣形広げ！ 魔導砲発射用意！ 目標、敵バヴェル・コックピット部！」

カウントが始まる。

タイミングが命なのだ。

この戦法は。

「一……零！ 発射！」

「しまった。先手を取られたか！ 神人様！」

傷ついたバヴェルと神人の念が合わさる。

それは巨大な念導境界面となりアシユマのプラズマ火球等を弾き飛ばした。

「ばかな！」

声をあげたのは、ルー・ウィロンである。

「アシユマより入電！」

アルミナが言う。

「アシユマ殿か。何かな？」

『バヴェルは俺のほうで何とか食い止めてみる。そっちは残存艦隊を全滅させてくれ』

アシユマが言ってきた。

何か考えがあるのか？

「分かり申した。全艦に通達！ これより我が艦隊は敵艦隊を粉砕する！ 先ずは右翼から各個撃破する。魔導砲発射用意！ 魔導砲発射の後に魔導機兵各個に発進！」

下方では艦隊による魔導砲の撃ち合いが行われていた。

それとは別に上方では睨み合いが続いていた。

念の総量だけで言えば、ロシ側のほうのバヴェルが勝っていた。

が、ロシが攻撃を戸惑わせていたもの……それは鬼虎だった。

幾ら鬼虎が折れていたとしてもだ。

平行宇宙から無限にエネルギーを引き出せる。

それはこちらの念の量と等しい……もしくは凌駕するものであった。

「ロシよどうするのだ？」

ウグラ・ハンが言う。

「ロシ！」

ティシユラ・アマンガムまでもがロシに縋りつく。

ロシは一つの決断を迫られた。

奥の手を使うか使わないかである。

ロシは決めた。

奥の手を使用することに。

「ズーズーリー、ズーリーズー・リーズー……」

「あれは暗黒系の禁呪の法術！ 魔法か？ 召喚魔法か？」

アシユマは訝しがった。

ロシは呪文を唱え始めた。

それは、アーチエル側のバヴェルのモニターに映し出された。

「集え彼の地に刻印求め

探せ、天の眼この世の秘法

聞け、七つのラツパを吹き鳴らし

血の色、臙脂に緋のマント

馬は蒼ざめ死を司り

淫婦にその身を墮されて

鬼神、悪神、加護を受け

血の刻印の契約に寄りて今、

汝の約束いざ果たさん。

出でよ冥界！

アポカリプス！！」

「何だと！ 十行詩だと！？」

アシユマは驚いた。

十行詩の魔法など見たことも聞いた事もなかったからである。

すると、地の底から湧き出すように世界の色が血に染まったよう

に赤くなり、地上と言わず空と言わず水中と言わず悪鬼・ドラゴン・

魔獣の大群が押し寄せた。

それも、全世界規模で。

ロシはその膨大な念の増幅器にバヴェルを使った。

「これが本来のバヴェルの使用方法だ！」

ロシは得意満面にそういった。

「幾らお前の『蚩』とやらの攻撃でも地の底から湧き出す悪鬼・ド

ラゴンの数には対抗できまい！」

モニター越しにロシが言った。

「ならば貴様を倒すまで！」

アシユマもモニター越しにそういった。

ドラゴンや羽根を持った悪鬼は敵味方問わず艦船を攻撃していた。

それだけではない。

艦艇ほどもある巨大なドラゴンが何十体何百体と艦艇を攻撃して

いた。

勿論、こちらもやられているばかりではないので反撃したが、地

獄の釜のそこが開いたように次から次へと無限に現れる敵に苦慮し

ていた。

アシユマとアーチエルの乗ったバヴェルにも体当たり攻撃を仕掛けてきていた。

こんな攻撃は屁でもないのだが、何万、何千万と来られると流石に辛いものがある。

「アーチエル。直接ロシを叩こうと思う」

『危険です。アシユマさま』

「このままではジリ貧だ。奴への攻撃に掛けてみる」

『掛けてみるって……アシユマさま鬼虎は折れたままではありませぬか!?!』

「何とかなる」

『何とかなるって……アシユマさま……これ以上言っても聞かないのですね?!』

「すまん。アーチエル。行って来る」

「大丈夫ですよ。アーチエル様。我等がおります故」

そこにいたのは、ハヤとユキ・ワナックスだ。

「……お前たち持ち場はどうした?」

「アシユマ様の危難故、馳せ参じました」

ユキが言う。

「言っても聞かぬのだろうか?」

「はい」

今度はハヤが答える。

「では、アーチエル行って来る。」

『行ってらっしゃいます。アシユマさま。後武運を。皆様も』

「相すまぬ」

「では」

「行って参ります」

「ロシ、アシユマがこちらへ来ます!」

ティシユラが焦って言う。

アシユマがユキを抱いて、ハヤはアシユマの側に添って飛んでいた。

『こちら』と言うのはバヴェルの頭頂部の事だ。

ティシユラとウグラ・ハンと神人はバヴェルの頭頂部に機を降ろしていた。

「分かっております」

ロシが言った。

「つゆ払いはワシがさせていたどころ」

ウグラ・ハンがそう言った。

「さて、世界最強の剣士、その腕前はいかほどか？」

アシユマ達はバヴェルの頭頂部、ウグラ・ハンの前に降り立った。

「最初はお前と戦わねばならんと言っわけか」

アシユマが言った。

「そう言う事だ」

ウグラ・ハンがそう応える。

「この戦い回避できぬか？ お互い遺恨があるわけで無し、どちらが死んでも意味は無し……」

「意味はある！ お主は神人様を亡き者にされるだろう。我はその守護者。我等二人が合間見えるのは宿命と見てよい」

「そんなちっぽけな箱一つ守って、何になる？」

「人類の未来が待っている！」

「いまさら、滅びた筈の人間を生き返らせて何とする！ 今ある人類を滅ぼすだけではないか！ それが人類の未来だと！？ 笑わせてくれる。所詮箱は箱。始末に終えぬのならこちらに渡すが良い。

俺が葬ってやるっ」

「おのれ！ 言ったな！？ アシユマ・アトー……」

「さて、アシユマここは私が戦おう。折れた鬼虎では不利であろう。

ここは私が戦っ」

ユキが言う。

「大丈夫なのか？」

アシユマが問う。

「はい。大丈夫に御座ります」

ユキが答える。

「なんだ、女か」

ウグラ・ハンが侮って言う。

「女と思って侮ると、痛い思いをするよ？」

「ふう。女は何処に行ってもうるさいものだ」

そう言っつてウグラ・ハンは刀を抜くと八双に構えた。

対してユキは正眼の構えだ。

二人はゆっくり互いに円弧を描き回った。

互いに隙を伺っているのである。

そのうち、円弧を描く運動は止まり徐々にであるが、間合いを詰めた。

その時アシユマは思った。

この勝負ウグラ・ハンの勝ちであると。

実力の地金が違うのである。

かといって、今更勝負を止めさせるわけにはいかない。

声を掛けた所で、勝負を決するきっかけになるのだ。

間に入っても同じ事だ。

既に互いに一足一刀の間合いに入っていたのだ。

ユキもそれは分かっていた。

分かっつていて、止められるものではなかった。

ユキがウグラ・ハンに戦いを挑んで、勝つ方法はただ一つ。

それは……。

ウグラ・ハンは眼を見張った。

それは相手の女が、何かを覚悟した事が見て取れたからである。

アシユマもそれには気付いていた。

そしてアシユマはそれを危惧した。

それは何の前触れもなく起こった。

ウグラ・ハンが、八双からの斬撃を繰り出してきたのである。

それに対してユキは、それを避けようともせず、ウグラ・ハンの心の臓を目掛けて突いて来た。

ユキは身体を両断され、そのユキは切っ先をウグラ・ハンの心の臓を貫いた。

「う……ぐうっ！」

ウグラ・ハンは断末魔を迎えようとしていた。

「ユキ！」

アシユマはユキの両断された上半身を抱き起こした。

ユキは既に事切れており、その顔は安らかだった。

ユキは剣の奥義の一つである、相抜けをしたのである。

「おのれ……このような女に」

ウグラ・ハンは呟いた。

「それはこちらの台詞だ！」

アシユマは折れた鬼虎でウグラ・ハンの首を刎ねた。

「ユキ……」

アシユマはユキの亡骸を抱いた。

その時だった。

音も気配も掻き消してロシがアシユマの背後から飛んできた。

「アシユマ！」

ハヤが叫ぶ！

これは間に合わないと思ったハヤは、アシユマとロシの間に割って入った。

「ぬう！ 目障りな！」

間髪いれずロシはハヤの首を刎ねてしまった。

「ハヤ！」

アシユマは絶叫した。

自分の不甲斐なさから、二人もの犠牲者を出してしまったのである。

アシユマの悲しみは深かった。

「さあ、お前の武器もインジェクションしてやるっ」

ロシは、ハヤの鬼細鳥を、インジェクションしようとしていた。が、ハヤの鬼細鳥は、ロシの天馬鬼にインジェクションされずに、光となってアシユマの方へと流れていく。

そして鯉口から折れた切っ先が抜け出て、切断面に膠にかわのように鬼虎の本身と切っ先を繋いでいく。

「！」

これには、ロシもアシユマも驚いた。

「な、何故だ！！」

ロシは叫んだ。

アシユマの鬼虎は元の通り一本の刀身に戻った。

「ハヤの俺への想いがなせる業か……」

アシユマはそう呟いた。

「次はお前だ。ロシ。手抜きはせん。覚悟しろ」

「それはこっちの台詞だ」

ロシはゆっくりと佩刀を構えた。

それに対して、アシユマはゆっくりと秘剣、裏・閃光一刀・崩しへ移行した。

「アシユマ……貴様だ。貴様さえいなければ……」

「それをどうにかするのがマスクドの役目だったはずだろ？」

アシユマがロシを揶揄する。

誘っているのだ。

「この……！」

「……………」

最早、アシユマも無言である。

「貴様の秘剣、流星は俺には効かんぞ？ 貴様のその剣は見切った

！」

「いや、お前は流星を見切っていない」

「何だと？」

「一刀が万剣に成り万剣が一刀に帰る。流星が秘剣たる所以よ。変幻自在の剣故、見切れはせぬのだ。見切ったと言い張るのは、そう

思い込もうとしている心の働きに過ぎん。言うなれば、それに固執しているといっても過言ではない」

アシユマは言いきった。

「なん……だと？」

「試してみるか？」

「おおよ！」

アシユマは腰を落とし秘剣、裏・閃光一刀・崩しの構えを見せた。「ほう！そのような構えで来るか。だが我が八双飛燕剣に敵うかな？」

二人はじりじりと間を詰めた。

そして、不意にロシが間合いを詰めてきた。

凄まじい突進力だった。

が、アシユマの太刀捌きはその速度を更に超えた。

「秘剣、流星！！」

アシユマはそう叫んだ。

そして何と火花を散らしてロシの両手首を両断してしまった。

両手首は中空に落ちアポカプリスの呪文も効力を失ったはずだった。

しかし未だそこら中に悪鬼ドラゴンの類は大量にいるし、消え去る気配も無い。

「くくく……。目論見が外れたようだな？ アシユマ・アトーよ」

両手首を失ったはずのロシが勝ち誇ったように言う。

これは一体どういうことか？

『アシユマさま！ 呪文の引継ぎです。誰かが呪文を引き継いでいます』

インカムを通してアーチエルが言った。

「お前か？ 女」

アシユマが問うた。

「何が『私』なのかは分からないけれど、わたし、強い男は好きよ」
そう言って、ティシユラはアシユマの方へ歩み寄ってきた。

「悪いが、俺は女だとして容赦しない主義でな」

アシユマが言った。

「うっ」

言葉に詰まるティシユラ。

それを傍目に見たロシは密かにその場から消え去った。

アシユマは呪文のほうに気をとられ、迂闊にもそれを見逃してしまっただ。

「が、それよりは神人だ。お前なんぞにかまけている暇は無い」
アシユマは言った。

箱はまるで人格があるかのように、動いていた。

逃げるタイミングを捜しているかのようにだった。

「駄目よ！ 神人さまを殺そうなどと、やってはいけない事だわ」

「一度殺している。二度も三度も同じ事だ」

「駄目よ！ 大事なバツクアップなのよ」

「横から一々うるさい。少し黙ってる」

『ピギャー！！』

隙を見つけたのか、奇妙な声をあげて神人は空へと逃げた。

「くそ！ 逃がしてしまった。奴を破壊しなければこの状況は止まらない」

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイング！！」

「済まぬ。ユキ、ハヤ。神人を倒したら必ず弔いにここに戻る」

アシユマもウイングを唱えて神人を追って行った。

残されたティシユラは

「ふふふ。お馬鹿さんねえ」

意味深な言葉を残してバヴェルのコックピットに座った。

「仕方が無いから私が動かしてあげるわ」

「アシユマさま……神人を追って行ったようだけど……」

アーチエルのコックピットのサイコレクターに敵のバヴェルが動き出した事が映しだされた。

「バヴェルが動き出している？ 一体誰が……こちらに向かってきている？」

ティシユラの乗るバヴェルはプラズマ放電をしながら、アーチエルの乗るバヴェルへと近付いていた。

「いけないわ。これは」

アーチエルもまたプラズマ放電で対抗した。

空中では巨大なプラズマの固まり同士がぶつかっていた。

アシユマは神人を追って戦場を駆け巡っていた。

バックアップとはいえ相変わらず動きがすばしっこい。

アシユマは少しずつ距離を開けられていた。

「これはまずいな……」

アシユマはひとりごちると呪文を唱え始めた。

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無

無限の力、その一端を見せん

我を死の淵から救いたまえ

纏え漆黒の羽根

ブースト!!」

アシュマの動きが加速度的に倍化された。

アシュマは神人に追いついた。

「これで最後にしたいものだな」

そしてアシュマは鬼虎を振るった。

それは見事に神人を真つ二つに切り裂き地上へと落としていった。

「とどめを刺しておくか」

アシュマは斬り割った双方の神人に蚩をかまして焼き落とした。

神人は焼け落ちて行った。

しかし、アポカリプスが消える気配は一向に無い。

アシュマは暫し考えた。

「くそ！ あの女か！」

そう結論付けた。

アシュマは悪態をついた。

アシュマは急ぎバヴェルの方へ戻って行った。

バヴェル側では双方のバヴェルが文字通り火花を散らしてぶつかり合っていた。

「アーチエル!!」

アシュマは叫んだ。

『わたしは大丈夫に御座います。それよりもこの状況を早く何とかして……』

「しかし……」

『お急ぎ下さりませ！ 敵味方問わず犠牲者が増えまする!』

「わかった！」

アシュマは敵のバヴェルのコックピットを目指した。

そしてアシュマは敵のバヴェルのコックピットに着いた。

そこではティシユラ・アマンガムが触手まみれになってバヴェル

と一体化していた。

「ああ……気持ち良いわあ。この世にこんな快樂があるなんて……
さあ、バヴェルよ！ アシユマ・アトーも取り込むのよ！」

バヴェルは何千何万と言うケーブルの触手をアシユマ目掛けて伸ばしてきた。

「いかん！」

アシユマはバヴェルから離れた。

「これでは近づけん」

バヴェルからは尚も触手が伸びてきた。

「ええい！ 面倒な！」

アシユマは秘剣、三日月で触手を薙ぎ払った。

「仕方が無い。行くか」

アシユマは呟く。

「鬼虎よ。お前の真の力を我が前に見せよ！」

鬼虎に光が集中しアシユマの周りに黒い膜が出来た。

アシユマはティシユラの乗るバヴェルのコックピットを目指した。
当然触手や鉄ミミズ等がアシユマを襲う。

が、アシユマの黒い結界に触れた物は全てがエネルギーとなりアシユマと一体化してしまった。

ティシユラの乗るコックピットの前までやって来た。

「女。バヴェルの起動を止める。そうすれば命だけは助けてやる」

「止める？ 止めるですって？ こんな快感わった事がないわ。

貴方もわたしと一体化しなさいな。究極の快感が得られるわよ」

「すまんが、そう言ったものには興味がなくてな。バヴェルを止める意思は無いわけだ」

「あるはずが無いわ」

「では、実力行使をさせてもらおう」

「あら？ 出来るのかしら？」

「何？」

「鬼虎の力を行使できるのかしら？ と、訊いているのよ」

ティシユラは意味深な事を言った。

「それは無論……む？」

アシユマは鬼虎に異変を感じた。

念導境界面が掻き消えていたからだ。

「そう、念導境界面が消えているはず。それはバヴェルの念導境界面と、親和しているから。いま、貴方を護るものは何も無いわ」

触手に取り込まれながらティシユラはそう断じた。

アシユマは周りに何かがうごめくを感じていた。

(触手か？ 鉄ミミズか？)

何かがアシユマに向かって飛びついた。

アシユマの鬼虎が閃く。

鉄ミミズが数匹地に落ちた。

「アシユマさま……！」

その様子をモニタで見ていたアーチエルが叫ぶ。

鉄ミミズの対処はこれが限界だった。

これ以上鉄ミミズの攻撃を受ければ、全てを対処できない。

(いったん、退くか？)

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

………」

アシユマは異変を感じた。

魔法ウィングが発動しないのである。

「………！！」

アシユマは驚愕した。

「無駄よ。魔法は発動しないはずだわ。何と言っても、このバヴェルの念導境界面内ですもの。わたしの意に介さない物は発動しない

わ。それより諦めて、わたしと一体化しなさいな。これ以上の快感を得たことなんてないほど気持ち良いのよ。ああ」

ティシユラは誘っていた。

自分と一体化することを。

「御免蒙る」

アシユマはにべもなく断わった。

「そう。残念だわ。それじゃ、死になさい」

周りになにやら蠢く者の気配を感じた。

先程の数の数倍はしよう。

鬼虎の剣捌きだけでは処理できないだろう。

万事休す！

『アシユマさまあ！！』

その時、アーチエルの乗るバヴェルが突っ込んできた。

互いの念導境界面はその接触面で火花を散らした。

アーチエルのバヴェルは勢い余って激しくティシユラのバヴェルに突っ込み、互いを半壊させて止まった。

「アーチエル！！」

アシユマはアーチエルに呼びかけた。

無論安否を確かめる為である。

『大丈夫よ。アシユマさま……怪我は……うん、無いみたい』

「そうか、良かった」

アシユマは安堵の溜息をついた。

『アシユマさま、油断なさらぬよう！』

アーチエルがアシユマを諫めた。

「そうだな」

アシユマは自分の油断を恥じた。

アシユマは自分の周りに念導境界面が再び張られている事に気付いた。

「そうか……二つのバヴェルの念導境界面が干渉しあって無くなっているのか……」

アシユマは独りごちて得心した。

「うっうっ……」

うめき声を上げてティシユラは眼が覚めた。

見ると、双方のバヴェルが半壊して機能を停止しているではないか。

「なに？ 念導境界面は？ ……ち！ 向うのバヴェルと干渉しつつて形成できない？」

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイング！！」

アシユマはウイングを唱えた。

「……！！」

ティシユラ何もいえなかった。

アシユマはティシユラのコクピットの前にまで来た。

「さて、一応訊くが、降伏の意味はあるか？」

「わたしを貴方の妾にする意思はお有り？ きっと満足すると思うわ」

「すまんが、アーチェル一人で充分だ」

「なら、覚悟を決めるわ。おやりなさいな」

「俺を、無抵抗の者に出さない奴と計算しているのなら、それは誤りだ。バヴェルと一体化している以上もう既にバヴェルの縛め

からは抜け出せまい。せめてもの情けだ。一思いに殺してやるっ」

アシユマはそう言い放った。

『アシユマさま!』

アーチエルが叫ぶ。

「アーチエル、勘違いするな。バヴェルに取り込まれた以上、最早『死』しか救いにならない」

『そんな……』

「さて、手間取った。時間を掛けずに行くぞ」
アシユマはプラズマの火球を作った。

「あ……」

ティシユラは驚愕の表情でそれを見ている。
アシユマはそれをティシユラに投げつけた。

「ぎゃああああ!」

ティシユラは断末魔の声と共に、一瞬の内に蒸発しこの世から消し飛んだ。

コックピットも融けてなくなり、やっとバヴェルはその動きを止めた。

バヴェルの停止と共にアポカリプスもその発動を停止し、悪鬼・ドラゴンの類の姿も消え去った。

アシユマは改めてハヤとユキの遺体を引き取って青龍号に納めた。

オロ艦隊は、尚も徹底抗戦の気配を見せた。

が、本体が戦っている間にオロは戦線を離脱し、逃げ出してしまった。
った。

オロの行方はいまだに分かっていない。

オロの艦隊は徐々に劣勢を見始め、最後には降伏してしまった。

そして残った二機のバヴェルはアシユマの鬼虎のあの『力』でこの世から跡形もなく消え去った。

第五節 シュンマ・イーハニア

ここは、ノリトレアの王宮、アルステイン王の執務室である。主だった面々が集まっていた。

「オロが逃げてしまった事が気に掛かるけどね」

「あとは、イーハンとの戦争の決着だな」

アシユマは言った。

その他には数名の閣僚たちも交じっていた。

「そんな事は分かっておる！ 問題はどう終わらせるかだ」

防衛省の大臣がそう言った。

正論である。

誰も何も口を挟まない。

「この軍事政権で奴あ、言ってみればオロの傀儡政権見たいなモンだろ？ ほって置いてても自滅するんじゃないの？」

オルバニアンがそう言った。

「馬鹿者！ そうなるまでに、我が軍の戦力がどれだけ消耗すると思っているのだ？」

先程の防衛省大臣が答える。

「『消耗』ねえ。あくまでも兵を戦力としか考えられないんだ。兵士だって人間だぜ？」

「兵は戦力だ！ それ以外の何者でもない！」

「まあ、その損耗に気を掛けてくれるんだ。良しとしようか」

「とにかく長引かせる事は、敵にとっても味方にとっても大切な命を奪う事になります。何とかならないものでしょうか？」

アーチエルがそう言った。

「敵の兵など、どうでも宜しい」

「どうでも良くありません！ 敵でも人間である事には代わりありません！」

アーチエルは怒った。

「まあ、まあ、アーチエル様。大臣、貴方の言う事も尤もですが表
現に気を付けたほうが良いでしょう」

アルステインが言った。

「王よ！ このような得体の知れない輩を、一体どこからお連れに
なつたのですか？」

その事には触れずにいきなりアシユマが、

「要は敵の中枢を叩けば、良いわけだ」

そう言い放った。

「な……人の話を少しは……」

「すまんが、大臣説明してやってくれ」

アルステインが重ねて言う。

「ですが、王よ……」

防衛省の大臣が困惑して言った。

「たのむ」

「王にそこまで言われては……」

そして、防衛省の大臣は説明を始めた。

大臣の話によるとこうだ。

敵の大本営を叩くにはユーパン海峡を抜けなければならないが、
その前にはイボラスとビニラと言う二つの要塞を突破しなければな
らないという。

この二つの空中要塞は直径三千メートル、高さ五百メートルもの
巨体を誇る要塞との事だ。

規模だけ言えばあのバヴェルに匹敵する構造物である。

その空中要塞は超長距離魔導砲を装備してあつて超長距離射撃が
可能だという。

その空中要塞がユーパン海峡を挟み撃ちにして、ここを通つた敵
は皆無だという。

その空中要塞を抜けた先に矢張り同規模の空中要塞ビムラーが控
えておりその空中要塞自体が大本営だという。

そこに今回のクーデターの首魁、シュニク・インジャがいると思

われる。

そして、シユンマ・イーハニアの父親、シヨウマ・イーハニア国王が、そこに軟禁されていると言う事だった。

「これが、今回の概要だ。簡単に敵の中枢を叩くなどと言って欲しくは無い。まずはイボラスとビニラが問題だ」

大臣はそう言った。

それを尻目にアシユマ達は……

「俺一人なら問題ないな」

「またアシユマさまだけ危ない目を……」

「先ずはシヨウマ様をお助けしないと……」

「誰かシヨウマ様の顔知ってるかあ？」

「ああ、それなら僕が……」

等と勝手に話を始める始末。

「お前たちはワシの話を聞いとらんのかあ!!」

大臣がキレた。

「聞いている」

アシユマは気だるそうに言った。

「俺一人が行けば、それで済む事だ」

「また、アシユマさまは一人で危ない事を背負い込んで。許しませんよ?」

と、アーチエル。

「ですから、先ずはシヨウマ様をお助けしないと。人質にされたら僕達の身動きが取れません」

そう言ったのはレン又だった。

「誰かシヨウマ様の顔知ってるかあ?」

と、オルバニアン。

「あ、僕、知ってます」

そう言ったのはハルマだった。

「わたくしも知っております」

そう言ったのはサリアナ・タウルだ。

「どうやら組み分けをしたほうが良いみたいだな」
アルステインが言った。
「組み分けとは？」
「陽動、シュニクを追う者、シヨウマを助ける者この三組だ」
「成程……では陽動は俺だな」
アシュマが言った。
「いや、まてよ。陽動は俺達に任してもらおう」
オルバニアンは言った。
「アシュマだと要塞自体ごと破壊しかねないからな」
「全くだよ」
アルミナが追隨する。
「そうか」
アシュマが淡々として答える。
「怪獣。われらは何をすればよい？」
キュポアはアシュマに自分の処遇を訊いた。
「そうだな。とりあえず青龍号を守って欲しい」
アシュマは言った。
「そうではなくて、わらわは、ハルマと行動を共に……」
キュポアは自分の処遇に対して訴えた。
「そうなら聞くな。足手まといだ。止めとけ」
アシュマはにべもない。
「わらわはあ……」
キュポアは必死に訴えた。
「だから、止めとけ」
「怪獣の意地悪」
キュポアはいじけてしまった
「じゃあ、組み分けするところになりますかね……」
ハルマが言った。
「組み分け？ ああ、そうだな」
アシュマが応ずる。

「とりあえずこうなりますかね？」
ハルマが組み分けを試してみた。

陽動組……オルバニアン、アルミナ、ガンロク、ジーク。

シヨウマ救出組……ハルマ、サリアナ、レンヌ。

シュニク捕縛組……アシュマ。

居残り組……アーチエル、キュポア、リイナ、ミカ。

以上、こう言う組み合わせとなった。

「アシュマさま……どうしてわたくしは、居残り組なのですか？
どうしてお側に置いて下さらないのですか？」

アーチエルはアシュマに訴えかけた。

「アーチエル、皆を守って欲しい」

「守る……」

「そうだ。頼んだぞ」

アシュマはアーチエルを諭すように言う。

「シヨウマ殿の居場所は分かるのか？」

アシュマが誰ともなく話しかけた。

「ワシの部下が調べ上げており申す」

アベニが言った。

「ムラサキか？」

アシュマが問う。

「如何にも」

と、アベニ。

「そうか。それならば問題ないな」

アシュマはそう言った。

「そういや、ロシって野郎を見逃しているな。これを機にこちらを
狙ってくるということはねえか？」

オルバニアンが言う。

「考えられなくはない」

アシユマが応じた。

「が、奴の狙いはあくまでも俺とアーチェルの二人だけのはず。俺達が宮殿に居ない間は逆に安全だろう」

アシユマは言い終えた。

アシユマは一人霊安室に来た。

そこにはハヤとユキ・ワナツクスの遺体が安置されていた。

そこで、アシユマは一人呟く。

「ユキよ。ハヤよ。必ずロシを倒してお前たちへのはなむけとする。待っていてくれ。必ずその報を持ってくる」

「アシユマさま」

いつの間にかアシユマの後ろにアーチェルが控えていた。

「アーチェルか」

「はい」

「いま、聞いた通りだ。ロシを討って、二人のはなむけにする」

「はい」

「反対はしないのか？」

「あの方は人の命をなんとも思わず、人の命を道具としか思わず、人の命を軽んじる人です。許してはおけません」

「アーチェルからそのような言葉が出てくるとは、驚いた」

「わたくしとて、このような物言いは好みません。ですがそう言わせるだけの物をあのロシと言う方は持っています。それにここに葬られているユキさんとハヤさんに、一刻も早く安らかに眠って頂きたいのです。我が主を護って頂いたお二方に」

「そうだな。その通りだ」

アシユマはアーチェルの肩を抱き、アーチェルはアシユマにしな垂れかかった。

ハルマは密かに腰に純魔導石製の刀を腰に落とし差しにした。これだけで力がみなぎるような気がした。アシユマが教えてくれた念の練り方を思い出してみた。すると刀が青白く光り強力な念導境界面が張られ、己でも驚くほどだった。

会議も終わり、そのまま夕食会となった。

「しかしまだ、戦争が続いているのに俺達だけこんなこととしていて良いのかねえ」

オルバニアンが言った。

「良いんですよ。皆さん方はバヴェルを粉碎し、文字通り世界の平和を守った。それをねぎらう意味での夕食会でもあります」

のんびりとアルステインが言う。

「でも、オロモロシも逃がしてしまっただんだけ？」

「まあ、何とかなるでしょう」

「ホントかよ？　しかし、いま飯食っているよりイーハンに攻め込んだほうが良いんじゃないかねえか？」

「今、焦っても仕方なし」

「敵は浮き足立っているぜ。今がチャンスだ」

「敵はそれを承知しています。罾を張っている所に、わざわざ突っ込んでいくようなものです」

「なら、敵陣に突っ込む事自体、意味がねえじゃないか」

「そこに敵の虚が出来ます。兎に角、一拍おく事が大事です」

「????」

決戦の朝を迎えた。

朝と言っても明け方前だ。

青龍号の格納庫へ行く。

「整備は万全かな？ コクレトさん」

アシユマが訊く。

『軍曹』と、訊かなかったのは、アリシアナ・コクレトがオロ・エバスの軍から抜けたことを意識しての事だ。

それも一時的な事で、いずれはノリトレアの軍に志願するそうだ。それまでは、特別措置として青龍号の整備を任されている。

「はっ、はい！ 万全であります」

アシユマは、ふうと溜息を一つつくと、

「アリシアナは、まだ軍属じゃないから、そんなに緊張しなくても良いんだ」

そう言った。

「はあ、しかしこれは癖みたいなものでありまして……」

アリシアナは緊張しながら答えた。

「分からんでもないがな……アリサは？」

アシユマは話題を変えた。

「アリサでありますか？ まだこの時間でありますから寝ております」

「そうか」

「済みません」

アリサは、その後、精神的な後遺症が懸念されたが、最初にロシの気の放出の時点で気を失ったらしく、それから後の事は覚えていない。

むしろその方が都合だ。

「気にしなくて良い。こんな朝早く訪ねるほうが非常識なのだ」

「済みません」

「じゃあ、整備のほうは任せるぞ」

「はっ！ お任せ下さい」

徐々に人数が多くなり、発進準備にも熱が入りだした。

いよいよ発進。

舵を取るのはダン・コクレトだった。

「管制室、これより青龍号、発進する。よろし？」

ダン・コクレトが言った。

「大丈夫だ。イーハンの野郎共を、ぎゃふんと言わしてやってくれ」

「わかった。発進する」

青龍号は空高く舞い上がった。

暫く青龍号は雲の上を滑るように飛んでいた。

ハルマが、

「アシユマさん、そろそろお願いします」

と、言ってきた。

「なんだ？ 『もつ』か？」

「はい」

「ならば、いくか」

アシユマが気だるそうに椅子からゴンドラのほうに歩いて行った。

「アシユマさま。ご無事で……」

「アーチエル。行って来る」

二人はいつものフレンチキスをした。

アシユマはゴンドラから外へ出る。

いつものように、鬼虎の鯉口が勝手に切られ、超長距離魔導砲の

奔流の中を突き進む。

魔導砲のエネルギーは鬼虎の念導境界面で電光となり鬼虎の鯉口

の中、鬼虎の本身へと吸収されて行った。

何度か超長距離魔導砲が発射された。

攻撃してきたのはイボラスとビニラだろう

「流石ですね。アシユマさん」

ハルマが言う。

だが、勿論聞こえるわけではない。

やがて眼の前に見えてくる空中要塞ビムラー。

アシユマは念導境界面を尖らせて突入の体制を作った。

空中要塞ビムラーは直径三千メートル高さ五百メートルの巨体を誇っていた。

火力も大きい。

死角も無い

が、弱点として足の遅さが目に付いた。

時速にして僅か十キロメートルなのだ。

が、砲塔としてはこれで十分だろう。

アシユマはその無敵を誇る砲塔群に……そのブリッジに突入しようとしていた。

「撃てえ！ てえ！！」

敵の大将格の男が言った。

だが、その男は知らない。

アシユマが、そのサイコ・フライヤーに、乗り合わせていることに。

アシユマは、バヴェルとの戦いを経て、更に念導境界面が強くなったようだ。

敵の砲はことごとくアシユマの念導境界面に触れ、エネルギーと化し、場と一体となって電光と成し、鬼虎の鯉口に吸い込まれて行った。

サイコ・フライヤー青龍は、アシユマのランス型のエネルギーの塊に覆われて、ビムラーのブリッジに突き刺さった。

「何をしておるかあ！ 早く排除せよ！」

大将格の男が叫ぶ。

「イツカクよ。潮時じゃ。我は脱出をする。後を頼むぞ」

大将格の男を名前で呼ぶこの男、この男こそクーデターの首謀者、シュニク・インジャだった。

「おらおらおら！ いくぜー！！」

青龍号の中からオルバニアンがでてきて、バルカン砲で念封弾を

撒き散らし始めた。

早速陽動に動いたわけだ。

アルミナも出てきて、敵兵を真つ二つにし始める。

ガンロクもまた敵兵を斬り割り始めた。

ジークもその大剣を以つてして敵を斬り刻んだ。

ブリッジが騒然となった。

ハルマ、レンヌは、予め調べてあつた地図を元に、軟禁された国王であるシヨウマ・イーハニアを救うべく、空中要塞内を歩き始めた。

そしてアシュマはシュニクを捕らえるべく動き始めた。

ブリッジの中央にある指揮所に目をやった。

指揮所の椅子が天井を越えて、上への回廊に移動した形跡があった。

どうやら、シュニクはあそこから逃げたものと、想像ができた。

あそこからシュニクに迫れるかもしれない。

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黑

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイングー！」

アシュマは呪文を唱えた。

アシュマは飛び、その穴に身を投じようとした。

が、敵将であるイツカクなる者が、

「そんな妖術使い。その穴は恐れ多くもシュニク様のお通りになれる穴。お前のような怪しい輩が、通つてよい物ではない。それでも通りたくば、このイツカクを倒してから通るが良い！」

アシユマはこれが時間稼ぎだと分かっていた。

分かっていたが、

「イツカクと言ったか。俺はこれでも忙しい。またの機会にしてくれないか？」

律儀に相手をしてやった。

「ならぬ。ワシはシュニク様を守らねばならん。お主のような輩を通すわけにはいかんだ」

アシユマは、はぁ、と溜息を吐き、

「しかたない。少しだ。少しだけ相手をしてやるっ」

完全に相手を子ども扱いにした。

「な、何たる態度、何たる侮辱。こんな事があっても良いものだろうか？ 否！ そちの名を聞こう。名は何と申す？」

「アシユマだ。アシユマ・アトー」

「なんと、そちがあのだ『閃光のアシユマと』申すか！ 相手にとって不足無し。ワシはこの城を預かるイツカク・ウニ。いざ尋常に勝負！」

「俺にとっては不足ありだ」

そしてアシユマは刀を峰に返した

「うぬぬぬ。尚も侮辱するか！ 参る」

イツカクは突進した。

アシユマは相手の上段からの、攻撃を存分に行わせ体を開くと、イツカクの小手、肩口、背を存分に叩いた。

イツカクは、

「うっ！」

短い喚き声と共に気絶した。

「要らぬ時間を過ごしてしまった。これはどうも俺の悪い癖だな」
アシユマは独りごちた。

ハルマとサリアナとレンヌのショウマ救出組は、順調に歩を進め

ていた。

直ぐにシヨウマ王が囚われている部屋までたどり着いた。

「早く王をお救い下さい。僕がここで敵を食い止めます」

レンヌが言った。

「恩にきます」

ハルマが言う。

鍵は直ぐに開いた。

ハルマが部屋の中へ入って行く。

敵の抵抗もそれなりにあった。

どこから湧いて出るのか敵は次々とやって来た。

「アンサラー、オールソード！ コマンド、『六剣乱舞』！！」

レンヌの召喚した六振りの剣は華麗にそして残虐に敵を斬り裂いていく。

もう、そろそろ囚われた部屋から王が出てきても良いはずだ。

レンヌがそう思っていると、突然後ろの部屋で大爆発が起こった。

レンヌは咄嗟に近くの手摺に手を掛けた。

後ろの部屋のあった部分はすっぽり穴が開き、部屋も何も無くなっていた。

「そんな……」

レンヌはそう呟き呆然となった。

アシユマは『穴』を上り、そして抜け、一際広い空間に出た。

どうやら、脱出用のサイコ・フライヤーの格納庫らしい。

幸いにもシユニクらしい人物がいた。

拳動といい『氣』の張り方といい、影武者などではなく本物だろう。

「シユニク・インジャ殿とお見受け致す。我に同行を」

「たかが剣士風情が何を言う。者供、かかれ！」

「今度こそ遊んでいる暇は無いというのに」

アシユマは一人で二十数人の敵と戦った。

その間にシュニクはサイコ・フライヤーに乗り込もうとしている。

「させるか!」

アシユマは人ごみを正に『飛び』越えシュニクに迫った。

そしてシュニクに刀を突きつけると、

「この者の命が惜しくば刀を捨ててもらおう」

そう言った。

そして、

「全域に通達しろ。シュニクはこの手で捕らえた。無駄な抵抗をす
るなとな」

全艦に家老のシュニクが捕らえられたとの報が伝えられると、すぐさまノリトレア艦隊が出張り、イボラス、ビニラ、ビムラーの三要塞は武装解除がなされた。

その直ぐ後にシヨウマ王が生死不明と伝えられると各所で散発的に戦闘が行われたが、アシユマが直接出向き、これも直ぐに治められた。

そして……。

「嘘じゃろ? レンヌ! のう、嘘じゃと言ってくれ!」

キュポアはレンヌの、その報が信じられなかった。

いや、信じたくは無かった。

ハルマが死んだなどと。

「でも、事実なんです。キュポアさん。残念ですが……残念ですが、ハルマさんとサリアナさんは……」

「嘘じゃ!」

キュポアは泣きながら青龍号の自分のブースへと走り去った。

「キュポアさん!」

レン又は叫んだもののどうして良いのか分からなかった。

「私が行きましょう」

アーチエルが言った。

「いいのか？ アーチエル。俺も行くのか？」

アシユマが言った。

「いいえ。こう言うときの姉ですもの。お気になさらないで」

アシユマを制しキュポアの後を追った。

（ハルマ。優しい奴じゃったのう。いつも陽だまりの中にいるような笑顔を、わらわに見せて……ハルマが死んでしまったなんて……。ハルマ。ハルマ。ハルマ！！好きだ。好きじゃった。わらわの全てを捧げても足りぬほど好きじゃった。なのに居なくなってしまうなんて……あんまりではないか！！のう、ハルマよ。お前は本当に死んでしまったのか？）

「キュポア、ちょっと宜しいかしら？」

アーチエルである。

キュポアを心配して見に来たのである。

「……なんじゃ。姉様が……」

キュポアは暗く沈んだままだった。

「……キュポア。まだ、ハルマ様が死んだとは限らないわ」

「……しかしあの状況じゃ。とても生きているとは……」

「いいの？ それで？ 信じなくて良いの？ ハルマ様が生きていることを諦めてしまつて」

「……姉様……ハルマは、それはそれは良い奴じゃった……」

「分かっているわ」

「諦めたくない。死んでなんか欲しくない！ 生きていて欲しい！

わらわはハルマの事が好きなのじゃ！」

「分かっているわ。貴女の気持ちは。なら信じてお上げなさい。ハルマ様が生きていらっしやる事を」

「姉様……姉様っ！ う、うわあああ……」

アーチエルがブリッジに戻ってきた。

「キュポアはどうした？」

アシユマが聞く。

「泣き疲れて寝ていますわ」

「そうか……後追い自殺なんて事はしないよな？」

「キュポアは、そこまで弱い娘ではありません」

「そうか。そうだな」

アシユマは首肯した。

サイコ・フライヤー青龍号は母港のノリトレア宮殿に戻ってきた。これからオロ・エバス国は多額の債務を負わされる事になるだろう。

それでも、オロの行方は分かっていない。

オロ・エバス国も解体できない。

油断は出来ない。

しかも、オロと行動を共にした重役（基本的に会社組織であるから）も行方を晦ました。

イーハンは国元連の監視の下、軍事政権を解体され、民主政府を打ち立てた。

これを機に王政は解体された。

これで王は象徴となり政治的権限を全て失った。

だが、王のシヨウマ・イーハニアは戦闘中に行方不明。

その長男のシュンマ・イーハニアもそれより以前に行方不明。

長女のカオルコ・イーハニアもクーデター勃発と同時に行方不明。

決着は付いたには付いたが、釈然としないものが残った。

「そうか。父上が……」

アルステイーンは言った。

「そう。貴方にとってシヨウマ様は父君に当たるお人なのね？」

エファールが言った。

「ええ。でも小さい折に別れたきりそのままだったものですから、あまり実感としては湧きませんけどね」

「無理しなくて良いのよ？ ヨディ。わたしで良かったら慰めてあげる」

「エファさん……エファール……」

アルステイーンはエファールに抱きついた。

「ああ、ヨディ……」

エファールはアルステイーンの頭を抱いた。

アルステイーンの頭はエファールの胸に埋まった。

「明日はスコラに戻る日ね」

リイナは、月の見えるテラスで、レンヌに語りかけていた。

「そうだね。リイナ」

レンヌはそう応えた。

「これで全て終わったのね？」

「そうだよ。それにしてもハルマ君は惜しい事をしたよ。まさかあんな形で……」

「待って。まだ死んだわけじゃあ……」

「でも、あの状況じゃあ……いや、これは禁句だったね」

「ええ。でも、レンヌ、禁句だけど貴方だけでも無事でよかった。本当に」

「リイナ……」

「レンヌ……わたしはこれを最後に戦闘の第一線から身を引こうと思っっている」

「リイナ」

「わたしの身体はもう直接戦闘には耐えられないほど衰えた。イレギュラーナンバーとしてのわたしは、もう使い物にならないだろう」
「……………」

レンヌはリイナの話複雑な想いで聞いていた。

「だから、よけいに愛して欲しい。一人の人間としてのわたしを」
「勿論さ、リイナ。例えどんな君でも、僕は君を愛するよ」

「レンヌ……………」

二人は抱き合い、お互いの唇を相手の唇に重ねた。

今ここに春を迎えようとするカップルが一組。

アン・デボンとガンロクである。

アンはガンロクに割り与えられた部屋の前に立った。
そしてドアをノックした。

「どうぞ。鍵はかかってねえだ」

「……………失礼します」

「アンさん……………」

「ガンロクさん……………失礼かとは存じましたが……………来てしまいました。はしたない女とお思い、お笑い下さい」

「しつ、失礼でも、はしたなくても何でもねえべ！ アンさんはそんなお人じゃねえ」

「わ……………わたくしは……………ガンロクさんに抱かれに来ました……………臆面もなく。それだけで充分はしたないと思います……………」

「お、おれに抱かれに……………アシユマお師匠への想いはいかががすんべ……………」

「記憶の奥底に沈めてまいりました。いま、わたしの気持ちはガンロクさんに……………」

そう言っつてアンは身体をガンロクに預けてきた。

ガンロクは抱きたくなる衝動を必死にこらえ、その両手でアンを引き離した。

「な……なんねえ。アンさんはお師匠の事が……なんねえ」

ガンロクは必死に抵抗を試みた。

だが、アンは再びガンロクにしがみつき、

「お慕い申し上げております」

そう言った。

ガンロクはもう何も考えられなくなっていた。

アンをベッドまで抱え込み、押し倒しその後の事は覚えてなかった。

ただ、喜びと少しの後悔がない交ぜになっていた。

事が終わった後、アンは

「嬉しゅう御座います」

と、言った。

ガンロクは黙ってアンの小さな手を握り締めた。

オルバニアンとアルミナは再びバウンティー・ハンターとしての旅にでるといふ。

半分は武者修行の為だと言ふ。

「錬武館の道場主になるのは、もう少し先のことになりそうだな」

オルバニアンがそう言った。

何処か遠い目をしている。

「半分は武者修行の為なんですよ？　ならいいじゃない」

アルミナも一緒だ。

オルバニアンは、

（こいつと一緒になら、何処へでも、何とでもやって行ける）
そう思った。

二人は誰にも悟られる事なく、ひっそりと旅に出た。

ミカとジーク、サクラコはスコラに戻るといふ。
アーチエルとアシユマがスコラに戻るのもう少し先になりそう
だと言ふ。

ミカとジークは王宮の温室を見て回っていた。

ここは、年中通して、花が絶えていなかった。

美しい花があちらこちらに、咲き乱れていた。

「ねえ、ジーク君」

「ん？」

「わたし、キュポアちゃん見てて思ったの。好きな人を亡くすって
事が、どれほど悲しい事かってことを。辛くて、切なくて、やっぱり
悲しい。キュポアちゃんには悪いけど、わたしはそんな想いをし
たくは無いの。だからジーク君、死なないでね。おねがい」

「不吉な事言うな。俺は死なん」

「ホントよ？」

「分かってる」

「ホントにホントよ？」

「分かってる」

「ホントにホントにホントよ？」

「分かったってば」

ジークとミカは温室でいつまでもじゃれ合っていた。

キュポアには何と見合い話が復活していた。

相手は前回と同じくシュンマ・イーハニア。

よりによって今、政情不安定なイーハンの皇太子である。

しかしシュンマ皇太子は行方不明ではなかったか？

その上、国王で父親のシヨウマ・イーハニア、姉のカオルコ・イ
ーハニアまでもが消息を顕にした。

このニュースは国内外を一気に駆け巡り、政情不安定なイーハンは忽ちシヨウマ派の手に落ち小康を取り戻した。

「わらわは、嫌じゃ。見合いなどとそれはそうだろう。」

最愛の人、ハルマ・イコナを失って間も無いのである。気持ちの整理も付いていないはずである。

そのキュポアの心情などお構い無しに、兄のエステーはドカドカと、土足でキュポアの心の中に踏み込んで来たのである。

『今度は否やはいわせんぞ。キュポア！ 何としてもイーハンの皇太子殿と、見合いをするのだ』

この兄はどうしても見合いをさせようとしている。

「エステー兄様。わらわは今何も考えられん。そんな状態で見合いなどしとう無い」

『お前の私情など、今はどうでも良い。今は見合いをする事だけ考えれば良いのだ！』

エステーは無情にも妹に命令をした。

「そんな……わらわは……わらわは……」

キュポアは泣きそうな声になった。

不運にも今回は近くにアシユマもいなければ、アーチエルもいなかった。

『先方には出席する旨伝える。幸いにも、今、お前は、ノリトレアにいて、イーハンとは目と鼻の先。いいな？』

「兄様、ならば、アシユマ義兄様とアーチエル姉様に、同席してもらうなら、出ても良いぞえ」

『それならば、それでも良いが……』

(兄様が出席するとごり押しされかねないからの)

『では、そう言うことで、アシユマ殿とアーチエルには、話を通しておく。よいな？ キュポア？』

「分かったぞえ」

『ではな。キュポア』

そこで、通信は切れた。

見合いの話は、イーハン側に出席の旨が伝えられた。

アシユマとアーチエルにも、この話は個別に伝えられた。

その時、アシユマとアーチエルは何をしていたか。

ハヤとユキ・ワナツクスの墓標の前に居た。

「アーチエルよ。俺は、ユキにもハヤにも何もしてやれなかった。

特にハヤにはマスクドに手を切らせてまで、こちら側に呼んだのに、死なせてしまった。俺は……俺は……」

アシユマは声を詰まらせた。

アーチエルはアシユマの方を向いた。

アシユマは悲痛な顔をしていた。

「許してくれ。ユキ……ハヤ……」

「許していただけだと思いますよ。ユキさんもハヤさんも。アシユマさまを愛されて。短いけれど女の幸せを感じていたと思います」

「そうだろうか……」

「ええ。そうですとも」

そうしてアーチエルは自分の手をアシユマの手に絡めてきた。

「こうなったら、わらわは見合いの席ではつきり縁談を断わるぞ」

キュポアはそう断言した。

「キュポアがそうしたければそうするが良い。国と国との思惑が絡むと厄介な物だな」

アシユマがそう言った。

「そうじゃな……」

「あとはイーハン側から、何か言って来るかも知れんが、そこは、

エースティーにまかそう。なにせこの話をこり押ししたのはあいつだからな。責任はあいつに取ってもらおう」

アシユマは不穩当にもそう言った。

そして見合い当日。

「キュポア・アップルトン王女おな〜り〜」

キュポアは見合いの席に着いた。

アーチエルとアシユマも一緒である。

二人は所謂いわゆる付添い人である。

本来ならば、エースティーが出席するのが筋なのであるが、アシユマとアーチエルは言わば両親の代わりだった。

キュポアはこの期に及んでも意気消沈していた。

そんなに早くハルマの事を忘れる事が出来るわけないのだ。

それをみて、アシユマもアーチエルも何も言わなかった。

キュポアはむしろこの縁談、破談になっても構わないとさえ思っていた。

「シユンマ・イーハニア様おな〜り〜」

イーハニア側の一家が入ってきた。

シユンマ・イーハニアは何と面を被つての登場だ。

(失礼にも程がある)

キュポアはそう思った。

「お初にお目にかかる。そちらは剣名高きアシユマ殿とお見受けいたします。ワシはシヨウマ・イーハニア。これなる愚息のシユンマの父親に当たり申す」

と、言った。

が、驚いたのは、アシユマ達に対して両親側の席に着いている女性は、なんとサリアナではないか。

そのサリアナが、

「カオルコ・イーハニアと申します。今まで謀るような事を致しま

して、申し訳ありませんでした。なにせ状況が状況だったものから……」

「お……お主、生きておったのか……」

キュポアは驚愕していた。

「ではハルマは……ハルマは生きておるのか？」

キュポアは思わず尋ねていた。

「はい。ここにいますよ」

声はすれども姿は見えず。

キュポアが戸惑っていると仮面の青年が面を取り顔を見せた。

何とそこにはキュポアの愛しいハルマの顔があった。

「ハルマ……」

「はい。キュポアさん」

「なぜ、今まで連絡も寄越さずに……それより一体どうやって生きて帰ってこれたのじゃ!？」

「そうか! ハルマの念導境界面か!」

そうアシユマが断じた。

「はい。その通りに御座います」

ハルマが肯定をした。

ハルマの話によればあの爆発の際、皆をハルマの念導境界面が包み、皆を守ったという。

「それならそれで連絡ぐらい寄越してくれても……わらわがどんな想いでお主の事を……ぐすっ……えぐっ……ひっく……」

「キュ……キュポアさん？」

「ハルマのばかッ!」

「いや、僕の本名はシユンマ・イーハニアで……」

「そんな事はどうでも宜しいわい! ハルマのばかッ!」

「そうですね。名前なんてどうでも宜しいですね」

と、言ってシユンマはキュポアの側に行った。

「ただ今です。キュポアさん」

「ハルマ……ハルマ!! うわあああ〜ん!!」

キュポアはハルマに抱きつき大声で泣き始めた。
この見合いが上手く行ったことは疑いもなかった。

キュポアとハルマの二人は庭を散策していた。

庭には池が掘られている。

二人はその淵を歩いていた。

とても楽しそうだ。

まるで二つの魂が前世からの約束を、今、果たさんが為、寄り添っているように見えた。

アシユマとアーチエルは少し離れた所からその様子を見ていた。

その前にある男が立ちはだかった。

「お前は……」

アシユマは絶句した。

それは紛れも無くマスクドのロシだった。

「アシユマよ、決着を付けに来た」

マスクドのロシはそう言った。

「そんな下らん事の為に、ここにわざわざ来たか」

「マスクドの名誉の為に、貴様を生かしておく訳にはいかんのだ」

「マスクドの掟と言う奴か」

「そうだ」

「アシユマさま……」

アーチエルは複雑な面持ちで二人を見ていた。

「アーチエル。ここは二人の仇を取らせてもらう」

勿論それはハヤとユキの事である。

「アシユマさま。存分になされませ。今日この場にそぐいませんが、お二人の御霊の為、マスクドのロシを討つ事を許します」

かたじけな
「忝い」

アシユマはそう言った。

そして、

「ロシよ、お前を倒す。あの世でハヤとユキに詫びるが良い」
そう言った。

「笑わせる。そんな気はさらさら無いな」

「そうか。救われん奴」

「またもや秘剣・流星で来るか？ アシユマよ」

「いや、流石にもう見切られていよう。ロシよ。違うか？」

「お見事。そのとおりだ。最早我に秘剣・流星は効かぬ」

「ならば奥義をご披露しよう」

「奥義？ まだ何かあるというのか」

「見たときにはお前は既に死する」

「言つたな？」

「……………」

「既に語らずか……。ならば行くぞ」

ロシは八双の構える。

対するアシユマは腰を落とし、居合いの構えを見せた。

ロシは八双飛燕剣と言う技を使ってくるらしい。

見た事がないので謎の技だ。

それだけに不気味ではある。

それに対してアシユマは静かだ。

二人は対照的だ。

動のロシに対して静のアシユマ。

アシユマは臍下丹田に気を集め、無念無想の境地に至る。

生きるも一刀、死するも一刀。

奥義『無想活殺』である。

池の魚がぱしゃりと跳ねる。

ロシが走り、一気に間合いを詰める。

アシユマは、ただ静かに鬼虎を引き抜く。

刀身を引き抜いた先にロシの胸があった。

それは吸い込まれるようにしてロシの胸を両断していた。

アシユマは振り返り、何かを言いかけるロシの首と胴体をも切り

離してしまった。

「生きるも一刀。死するも一刀。生死の境を越えて繰り出される一刀だ。これが最終奥義たる所以よ」

ロシの首は、こちらを向いて、何か言いたげに口をパクパクとさせていたが、やがて顔が老化して言ったかと思うと、なんとミイラになり、骸骨となって風化して、やがて崩れて、風に飛ばされてしまった。

「結局は仲間を利用し、仲間を守られなければ、何も出来ない男だったな。貴様は」

と、アシユマは呟いた。

「アシユマさま」

アーチエルがアシユマに寄りそう。

「大丈夫だ。アーチエル。全て終わった。もう心配は要らない」
アシユマはそう言ってアーチエルを優しく抱きとめた。

イーハンは晴天。

本日も平和なり。

第十二話 了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4545k/>

デュエリスト アシュマ 第十二話 キュポアの春（後編）

2010年10月8日14時51分発行